
嵐山町

油面遺跡

2 嵐山-14号 油面遺跡報告書作成業務委託

埋蔵文化財発掘調査報告

2021

埼玉県

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

圏央道の埼玉県・茨城県区間全線開通により、県内を走る関越道や東北道を含め、東京から放射状に延びる東名高速から東関東道までの区間が圏央道で結ばれました。この開通効果により、各高速道路インターチェンジ周辺への企業立地ニーズが高まっています。そのため、埼玉県では、平成29年に「第3次田園都市産業ゾーン基本方針」を定め、圏央道以北地域においても、産業基盤づくりを積極的に進めています。関越自動車道嵐山小川インターチェンジから約800mに位置する嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業もその一環として行われたものです。油面遺跡の発掘調査は、同事業に伴う事前調査として、埼玉県企業局の委託を受け、当事業団が実施しました。

調査対象の油面遺跡は馬の背状の尾根の上で、平坦部はわずかしかありませんが、縄文時代前期の集落跡や、平安時代の住居跡が発見されました。住居跡からは、糸をつむぐための紡錘車や木製品の加工工具の袋状鉄斧なども発見され、丘陵での人々の暮らしぶりを彷彿させます。また、炭焼窯跡も発見され、人々が木材の伐採や製材、木炭生産など水田耕作に不向きな丘陵地の開発を積極的に進めたことがうかがわれます。今回の調査結果は、周辺の発掘調査と同様の傾向を示しており、各時代における丘陵地の利用の様相が追認されました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護及び普及啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部文化資源課をはじめ、埼玉県企業局、嵐山町教育委員会、地元関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和3年3月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 藤 田 栄 二

例　言

- 1 本書は比企郡嵐山町大字勝田地内に所在する油面遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 遺跡の代表地番、発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

油面遺跡（№36-198）
比企郡嵐山町大字勝田468-1他
平成31年4月22日付け教生文第2-4号
- 3 発掘調査は、嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が調整し、埼玉県の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
- 4 事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成31年度）
「30嵐山-6号　油面遺跡埋蔵文化財発掘調査業務委託」
整理・報告書作成事業（令和2年度）
「2嵐山-14号　油面遺跡報告書作成業務委託」
- 5 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、平成31年4月1日から令和元年9月30日まで実施し、富田和夫、桑原安須美、砂生智江、片山祐介が担当した。

- 整理報告書作成事業は、令和2年10月1日から令和3年3月30日まで、砂生が担当し、埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集として印刷・刊行した。
- 6 発掘調査における基準点測量は株式会社ソレイユに、空中写真撮影は中央航業株式会社に委託した。
 - 7 発掘調査における写真撮影は各担当者がを行い、出土遺物の写真撮影は砂生が行った。
 - 8 出土品の整理・図版作成は上野真由美、金子直行、滝瀬芳之、水村雄功の協力を得て砂生が行った。
 - 9 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部文化資源課が、縄文時代の土器を金子が、縄文時代の石器を上野が、近世の石製品を水村が、金属製品を滝瀬が、その他を砂生が行った。
 - 10 本書の編集は砂生が行った。
 - 11 本書にかかる諸資料は令和3年4月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 - 12 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします。（敬称略）

嵐山町教育委員会

凡 例

1 油面遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系國土標準平面直角座標第IX系（原点北緯 $36^{\circ} 00' 00''$ 、東経 $139^{\circ} 50' 00''$ ）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

D-7 グリッド北西杭の座標は、X=8220.000m、Y=-45840.000m、北緯 $36^{\circ} 04' 22.82846''$ 、東経 $139^{\circ} 19' 27.86302''$ である。

2 調査で使用したグリッドは、國土標準平面直角座標に基づく $10 \times 10\text{m}$ の範囲を基本（1グリッド）とし、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

3 グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A・B・C…）、西から東方向に数字（1・2・3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせ、例えばA-1グリッド等と呼称した。

4 本書における本文・挿図・表に示す遺構の略号は、以下のとおりである。

SJ 堅穴住居跡 SC 集石土壙 SK 土壙

FP 焼土跡 SF 炭焼窯跡 SD 溝跡

SO 道路跡 P ピット・柱穴

5 本書に掲載した遺構番号は、発掘調査時に付した番号を使用した。

6 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。但し、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

調査区全体図 1:1300

区割図 1:250

遺構図

住居跡・集石土壙・土壙・溝跡・

ピット・焼土跡・炭焼窯跡 1:60

道路跡 1:80

遺物実測図

土師器・須恵器 1:4

拓影図・断面図 1:3

石器 1:3

土製品 1:3

鉄製品 1:3

7 遺物実測図の表記方法は以下のとおりである。
須恵器（断面黒塗り）

8 遺構断面図に表記した水準数値は、全て海拔標高（単位m）を表す。

9 遺構一覧表の表記は以下のとおりである。

・長さ・幅・深さ・短径・長径はm単位である。

10 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。
・大きさはcm・重さはg単位である。

・（ ）内の数値は推定値を示す。

・〔 〕内の数値は残存地を示す。

・胎土は土器中に含まれる飴物等のうち、特徴的なものを記号で示した。

A:雲母 B:片岩 C:角閃石 D:長石

E:石英 F:軽石 G:砂粒子 H:赤色粒子

I:白色粒子 J:針状物質 K:黒色粒子

L:その他

・残存率は、図示した器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

・焼成は、良好・普通・不良の3段階に分けて示した。

・色調は『新版標準土色帖』に従った。

・備考には、注記No・生産地・年代等を示した。

・土器・陶磁器の生産地については、胎土によって判断した。

11 本書に使用した地形図は、国土地理院発行
1/50000地形図（熊谷）を編集・使用した。

遺構名新旧対応表

グリッド	新	旧
P-12	S J 2 P 1	P95
P-12	S J 2 P 2	P37
Q-12	S J 2 P 3	P21
P-12	S J 2 P 4	P84
P-12	S J 5 P 1	P146
P-12	S J 5 P 2	P144
P-12	S J 5 P 3	P139
P-12	S J 5 P 4	P149
E-6	S F 28	S X 2
T-9	P166	S J 1 P 2
T-9	P167	S J 1 P 3
T-9	P168	S J 1 P 4
T-9	P169	S J 1 P 5
T-9	P170	S J 1 P 6
T-9	P171	新規
T-9	P172	新規
S-9	P173	S F - P 1
S-9	P174	S F - P 2
S-9	P175	S F - P 3
O-12	欠番	F P 10
F-12	欠番	S X 1

A区

グリッド	新	旧
C-4	P1015と同一	P1016
D-3	P1033と同一	P1034
D-5	P1096と同一	P1097

B区

グリッド	新	旧
T・U-9	P170	新規
T-9	P171	新規
R-12	欠番	P12
Q-12	欠番	P16
Q-12	欠番	P28
Q-12	欠番	P31
Q-12	欠番	P32
S-11	欠番	P44
R-11	欠番	P46
S-11	欠番	P51
S-11	欠番	P54
R-12	欠番	P57
S-11	欠番	P60
R-11	欠番	P66
R-11	欠番	P67
R-11	欠番	P71
R-11	欠番	P72
R-11	欠番	P73
R-11	欠番	P74
R-11	欠番	P75
P-13	欠番	P85
R-12	欠番	P93
R-12	欠番	P100
S-12	欠番	P111
S-11	欠番	P115
O-13	欠番	P128
P-12	欠番	P135

目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1	2	古代の遺構と遺物	58
1	発掘調査に至る経過	1	(1)	住居跡	58
2	発掘調査・報告書作成の経過	2	(2)	炭焼窓跡	61
	(1) 発掘調査	2	(3)	土壤	65
	(2) 整理・報告書の作成	2	(4)	グリッド出土遺物	65
3	発掘調査・報告書作成の組織	3	3	中・近世の遺構と遺物	66
II	遺跡の立地と環境	4	(1)	溝跡	66
1	地理的環境	4	(2)	道路跡	66
2	歴史的環境	5	(3)	ピット	70
III	遺跡の概要	9	(4)	グリッド出土遺物	84
IV	遺構と遺物	20	V	自然科学分析	85
1	縄文時代の遺構と遺物	20	1	出土炭化材の樹種同定(1)	85
	(1) 住居跡	20	2	出土炭化材の樹種同定(2)	89
	(2) 集石土壤	28	3	放射性炭素年代測定(1)	91
	(3) 土壌	30	4	放射性炭素年代測定(2)	93
	(4) 焼土跡	33	VI	調査のまとめ	96
	(5) 遺物包含層	39		写真図版	

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4	第35図 A区遺物包含層出土遺物（3）	44
第2図 周辺の遺跡（縄文・弥生時代）	6	第36図 A区遺物包含層出土遺物（4）	44
第3図 周辺の遺跡（古墳時代～近世）	7	第37図 A区遺物包含層出土遺物（5）	45
第4図 基本層序	10	第38図 A区遺物包含層出土遺物（6）	46
第5図 全体図	11	第39図 A区遺物包含層出土遺物（7）	47
第6図 区割図（1）	12	第40図 B区遺物包含層出土遺物（1）	50
第7図 区割図（2）	13	第41図 B区遺物包含層出土遺物（2）	51
第8図 区割図（3）	14	第42図 B区遺物包含層出土遺物（3）	52
第9図 区割図（4）	15	第43図 B区遺物包含層出土遺物（4）	53
第10図 区割図（5）	16	第44図 B区遺物包含層出土遺物（5）	54
第11図 区割図（6）	17	第45図 B区遺物包含層出土遺物（6）	55
第12図 区割図（7）	18	第46図 第1号住居跡	58
第13図 区割図（8）	19	第47図 第1号住居跡遺物出土状況	59
第14図 第2号住居跡	20	第48図 第1号住居跡出土遺物	60
第15図 第3号住居跡	21	第49図 第1号炭焼窯跡	62
第16図 第3号住居跡遺物出土状況	22	第50図 第2号炭焼窯跡（1）	63
第17図 第3号住居跡出土遺物	23	第51図 第2号炭焼窯跡（2）	64
第18図 第4号住居跡	24	第52図 土壌	65
第19図 第4号住居跡遺物出土状況	25	第53図 グリッド出土遺物	65
第20図 第4号住居跡出土遺物（1）	25	第54図 第1・2号溝跡	67
第21図 第4号住居跡出土遺物（2）	26	第55図 第3号溝跡	68
第22図 第5号住居跡	27	第56図 道路跡位置図	69
第23図 第1号集石土壌	28	第57図 A区ピット（1）	71
第24図 第1号集石土壌出土遺物	29	第58図 A区ピット（2）	72
第25図 土壌	31	第59図 A区ピット（3）	73
第26図 土壌出土遺物	32	第60図 A区ピット（4）	74
第27図 燃土跡（1）	34	第61図 A区ピット（5）	75
第28図 燃土跡（2）	35	第62図 B区ピット（1）	76
第29図 燃土跡（3）	36	第63図 B区ピット（2）	77
第30図 燃土跡出土遺物	38	第64図 B区ピット（3）	78
第31図 A区遺物包含層遺物出土状況	40	第65図 B区ピット（4）	79
第32図 B区遺物包含層遺物出土状況	41	第66図 B区ピット（5）	80
第33図 A区遺物包含層出土遺物（1）	42	第67図 B区ピット（6）	81
第34図 A区遺物包含層出土遺物（2）	43	第68図 ピット出土遺物	83

第69図 グリッド出土遺物	84	第73図 暦年較正結果	93
第70図 炭化材の走査型 電子顕微鏡写真（1）	87	第74図 暦年較正結果	95
第71図 炭化材の走査型 電子顕微鏡写真（2）	88	第75図 油面遺跡と周辺の遺跡の立地	96
第72図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真	90	第76図 油面遺跡と周辺の 遺跡の住居跡等位置分布	97

表目次

第1表 周辺の遺跡一覧	8	第14表 A区ピット一覧表	82
第2表 第3号住居跡出土石器観察表	23	第15表 B区ピット一覧表	82
第3表 第4号住居跡出土石器観察表	26	第16表 A区ピット出土石器観察表	84
第4表 集石土壙出土石器観察表	29	第17表 グリッド出土遺物観察表	84
第5表 土壙一覧表	31	第18表 樹種同定一覧	85
第6表 土壙出土石器観察表	32	第19表 炭化材の樹種同定結果一覧	86
第7表 焼土跡一覧表	38	第20表 測定試料および処理	91
第8表 A区遺物包含層出土石器観察表	48	第21表 放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果	92
第9表 B区遺物包含層出土石器観察表	56	第22表 測定試料および処理	94
第10表 第1号住居跡出土遺物観察表	61	第23表 放射性炭素年代測定 および暦年較正の結果	94
第11表 土壙一覧表	65		
第12表 グリッド出土遺物観察表	65		
第13表 溝跡一覧表	68		

写真図版

図版1 1	調査区全景（南から）	図版5 1	第3号住居跡
図版2 1	調査区全景（垂直）	2	第4号住居跡
2	調査区遠景（南西から）	図版6 1	第1号集石土壙検出状況
図版3 1	西尾根遠景（南東から）	2	第1号集石土壙
2	南尾根遠景（上から）	3	第1号焼土跡
図版4 1	第2・5号住居跡	4	第1号焼土跡断面
2	第2号住居跡炉跡	5	第2号焼土跡
3	第2号住居跡炉跡断面	6	第2号焼土跡断面
4	第5号住居跡炉跡	7	第3号焼土跡
5	第5号住居跡炉跡断面	8	第3号焼土跡断面

図版7	1	第4号焼土跡	図版13	5	第1号炭焼窓跡
	2	第4号焼土跡断面			木炭出土状況(3)
	3	第5号焼土跡		1	第2号炭焼窓跡
	4	第5号焼土跡断面		2	第2号炭焼窓跡
	5	第6号焼土跡断面			木炭出土状況(1)
	6	第7号焼土跡断面		3	第2号炭焼窓跡
	7	第8号焼土跡断面			木炭出土状況(2)
	8	第10号焼土跡断面		4	第2号炭焼窓跡
図版8	1	第11号焼土跡断面			木炭出土状況(3)
	2	第12・13号焼土跡		5	第2号炭焼窓跡
	3	第12・13号焼土跡断面			木炭出土状況(4)
	4	第17号焼土跡断面	図版14	1	第1号道路跡
	5	第21号焼土跡断面		2	第4~6号道路跡
	6	第22号焼土跡	図版15	1	西尾根ピット分布状況
	7	第25号焼土跡断面		2	南尾根ピット分布状況(1)
	8	第27号焼土跡		3	南尾根ピット分布状況(2)
図版9	1	第1号住居跡		4	南尾根ピット分布状況(3)
	2	第1号住居跡遺物出土状況(1)		5	B区遺物包含層(1)
図版10	1	第1号住居跡カマド(1)		6	B区遺物包含層(2)
	2	第1号住居跡カマド(2)		7	M-13グリッド袋状鉄斧 出土状況(1)
	3	第1号住居跡遺物出土状況(2)		8	M-13グリッド袋状鉄斧 出土状況(2)
	4	第1号住居跡遺物出土状況(3)			
	5	第1号住居跡遺物出土状況(4)	図版16	1	第3号住居跡
	6	第1号住居跡遺物出土状況(5)		2	第4号住居跡
	7	第1号住居跡遺物出土状況(6)	図版17	1	第4号住居跡
	8	第1号住居跡遺物出土状況(7)			
図版11	1	第1・2号溝跡(1)		2	第1号集石土壤
	2	第1・2号溝跡(2)	図版18	1・2	土壤
	3	第3号溝跡	図版19	1	焼土跡
	4	第3号土壤(1)		2	A区遺物包含層
	5	第3号土壤(2)	図版20	1・2	A区遺物包含層
図版12	1	第1号炭焼窓跡検出状況	図版21	1・2	A区遺物包含層
	2	第1号炭焼窓跡	図版22	1・2	A区遺物包含層
	3	第1号炭焼窓跡	図版23	1・2	A区遺物包含層
		木炭出土状況(1)	図版24	1・2	B区遺物包含層
	4	第1号炭焼窓跡	図版25	1・2	B区遺物包含層
		木炭出土状況(2)	図版26	1・2	B区遺物包含層

図版27 1・2 B区遺物包含層

図版28 1・2 B区遺物包含層

図版29 1~7 第1号住居跡

図版30 1~3 第1号住居跡

図版31 1 第1号住居跡

2 ピット

図版32 1 小形石器

2 古代のグリッド出土鉄製品

I 発掘調査の概要

1 発掘調査に至る経過

埼玉県では、新たに平成29年度からの5年間の県政運営の基本となる『埼玉県5か年計画 一希望・活躍・うるおいの埼玉ー』を策定し、各分野での施策に取り組んでいる。このうち成長の活力をつくる分野では、「埼玉の成長を生み出す産業を振興する」という基本目標を掲げ、圏央道沿線地域に加え圏央道以北地域などにおいて、高速道路インターチェンジ周辺や県内主要幹線道路周辺に田園環境と調和した産業基盤づくりを積極的に進めている。こうした中で埼玉県教育局市町村支援部文化資源課では文化財の保護について、従前より関係部署と事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業地内の埋蔵文化財の取扱いについては、平成29年度「公共事業と埋蔵文化財保護の調整会議」で照会があった。事業予定地については、埋蔵文化財の所在が不明であったため、嵐山町教育委員会が平成30年10月22日から平成30年11月7日まで確認調査を実施したところ、縄文時代や中世の遺構や遺物が確認された。そのため、平成30年11月12日付けで「油面遺跡（36-198）」として遺跡台帳に登載された。この結果に基づき、事業予定地内の埋蔵文化財の取扱いについて、平成30年12月12日付け教文資第1707-1号で次の通り地域整備課長宛て回答した。

1 埋蔵文化財の所在

事業予定地には次の周知の埋蔵文化財包蔵地が所在します。

名称	種別	時代	所在地
油面遺跡 (No.36-198)	集落跡	縄文、戦国	比企郡嵐山町大字勝田、大字花見台

2 法手続き

工事予定地内には、上記の埋蔵文化財包蔵地が所在しますので、工事に先立ち、文化財保護法第94条の規定による発掘通知を提出してください。

3 取扱いについて

「発掘調査を要する区域」については、工事計画上やむを得ず現状を変更する場合には、記録保存のための発掘調査を実施してください。

その後、事業の計画変更及び埋蔵文化財の現状保存は困難との結論に達したため、記録保存の措置を講ずることとした。

調査に際し、発掘調査実施機関である公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団と、文化資源課の三者で、工事日程、調査計画、調査期間などについて会議を開催し各種の調整を行った。

文化財保護法第94条第1項の規定に基づく埼玉県知事からの通知に対する同条第4項の規定による埼玉県教育委員会教育長からの勧告は以下のとおりである。

平成31年2月8日付け教文資第4-1583号

文化財保護法第92条第1項の規定に基づく公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長からの発掘調査届に対する埼玉県教育委員会教育長からの指示通知は以下のとおりである。

平成31年4月22日付け教文資第2-4号

(埼玉県教育局市町村支援部文化資源課)

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

油面遺跡の発掘調査は、嵐山花見台工業団地拡張地区産業団地整備事業に伴って平成31年4月1日から9月30日まで実施した。調査面積は11301.47m²である。

4月1日に発掘調査届提出等の事務手続きを行った。4月5日～25日に、重機による表土掘削を開始し、4月25日に開墾設置工事を行った。4月5日に現場事務所を設置し、発掘器材を搬入した。22日より補助員による遺構確認作業を開始した。4月22日に基準点測量を実施し、遺構概略図を作成した。

確認された遺構は、順次掘削・精査に着手し、土層断面図・平面図作成と、写真撮影を行った。6月20日、7月10日、8月23日、9月2日、9月17日に、ドローンによる遺構写真の撮影を行い、9月10日に空中写真撮影を実施した。

9月19日に発掘作業を終了した。9月20日に発掘器材を搬出し、9月24日に現場事務所を撤去した。実績報告書の作成と発見届・保管証提出等の事務処理を行い、9月30日に完了した。

(2) 整理・報告書の作成

整理・報告書作成事業は、令和2年10月1日から令和3年3月30日まで実施した。

遺物は、10月より水洗・注記を行い、順次接合

復元作業を行った。接合した遺物は実測図を作成し、計測値や特徴なども記入した。11月より遺物実測図の製図ペンによるトレースを行い、必要に応じて拓本を採った。これらはスキャナを使用してデジタル・データ化し、レイアウト編集して印刷用の挿図版下データを作成した。12月より遺物の写真を撮影し、写真図版の版下データを編集・作成した。

遺構図の整理は、遺物の整理作業と並行して10月より開始した。発掘調査で実施した遺構測量システムのデジタル・データおよび手作業によって作成した平面図・土層断面図等を修正・編集して第二原図を作成した。11月中旬よりパソコンを使用してデジタルトレースと編集作業を行い、印刷用の挿図版下データを作成した。遺構写真は、発掘調査で撮影されたものの中から選択し、写真図版用の版下データを作成した。

12月より、作成した遺物・遺構のデータ等とともに、報告文の執筆を開始した。これと、遺構・遺物の挿図と写真図版などを組み合わせて割付・編集を行った。

完了後印刷業者に入稿し、校正を3回行い、令和3年3月下旬に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第470集『油面遺跡』を刊行した。

図面類・写真類・遺物・データ類等の諸資料は埼玉県が管理・保管する。

3 発掘調査・報告書作成の組織

平成31年度（発掘調査）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	高 津 導	調査部 部 長	黒 坂 穎 二
総務部		調査部 副 部 長	吉 田 稔
総務部 副 部 長	山 本 靖	主幹兼調査第二課長	大 谷 徹
総務課 長	新 井 了 悟	主 任 専 門 員	富 田 和 夫
		主 事	桑 原 安 須 美
		主 事	砂 生 智 江
		主 事	片 山 勉 介

令和2年度（整理・報告書作成）

理 事 長	藤 田 栄 二	調査部	
常務理事兼総務部長	福 沢 景	調査部 部 長	吉 田 稔
総務部		調査部 副 部 長兼整理第一課長	上 野 真 由 美
総務部 副 部 長	山 本 靖	主幹兼整理第二課長	大 谷 徹
総務課 長	鈴 木 裕 一	主 任	砂 生 智 江

II 遺跡の立地と環境

1 地理的環境

油面遺跡は、埼玉県比企郡嵐山町大字勝田に所在する。関越自動車道嵐山小川ICから北東へ約0.8kmの位置にあり、嵐山花見台工業団地南東端に隣接する。

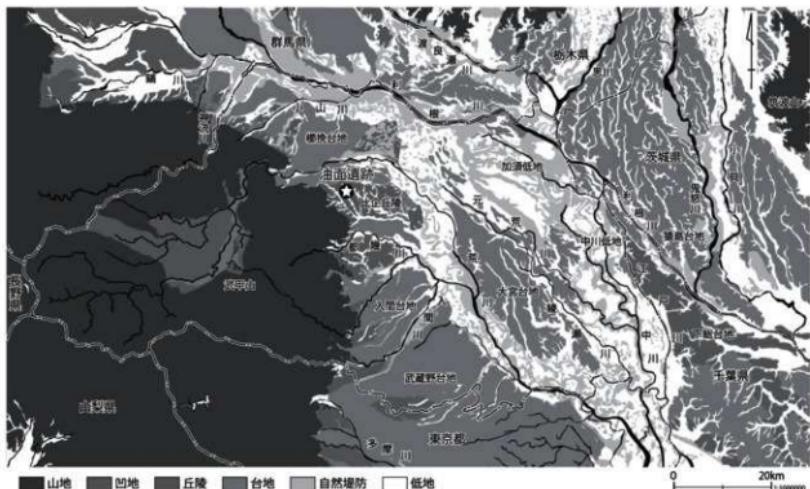
嵐山町周辺の地形を概観すると、町域の大部分は比企丘陵部に立地することがわかる。比企丘陵は、外秩父山地から東側に半島状に突出した丘陵であり、七郷層と呼ばれる第三紀に形成された岩盤層を基層とする。和田吉野川および、市野川によって、北側の江南台地、南側の東松山台地や、東側で独立丘陵を呈する吉見丘陵と区分され、丘陵中央部には滑川が流れる。丘陵一帯は、市野川へと注ぐ柏川・蟹田川や、滑川へと注ぐ中堀川・月中川・角川などの多数の小河川の開析によって、樹枝状に発達した開析谷が形成され、複雑に入り組んだ地形を呈している。開析谷の奥には溜池が

点在し、これらは水田経営に利用されている。

遺跡は、滑川と柏川に挟まれた比企丘陵西部にあり、馬の背状の尾根頂部に立地する。遺跡の乗る尾根は、東西・南の三方に延び、北側は谷が入り込み急峻な斜面となっている。当該尾根の標高は、80~90mである。

細尾根を北東へと辿っていくと、伊古乃速御玉比売神社の奥社とされる二ノ宮山へと至る。二ノ宮山の標高は131.8mで、比企丘陵では最高地点となる。周辺には、遺跡の南東に近接する、標高113mの大立山や、北東へおよそ3kmに位置する、標高105mの高根山などが所在する。

これらの斜面上には、ゴルフコースや工業団地が造成され、複数回にわたり工事に伴う発掘調査が実施された。それにより、斜面地に分布する集落跡が確認されている。



第1図 埼玉県の地形

2 歴史的環境

旧石器時代

遺跡周辺における当該時期の遺跡は現在のところ発見されておらず、遺物がわずかに確認されているのみである。油面遺跡の谷を挟んで西側に位置する尺尻遺跡（93）では、ナイフ形石器が出土している。また、塩西遺跡（78）からナイフ形石器文化期、白草遺跡から細石刃文化期の良好な資料が出土している。

縄文時代

旧石器時代の遺跡と同様に、草創期の遺跡の分布は、稀薄である。滑川町打越遺跡において、多縄文系土器群がまとまって出土している。早期前半では、越畠城跡（118）・年中坂A・B遺跡（111・112）において、撫糸文土器、沈線文土器が出土している。早期後半の条痕文期になると、丘陵地帯の平坦部や肩部において、炉穴が認められるようになる。油面遺跡の東側の尾根に位置する亥遺跡（108）では、条痕文期と思われる炉穴10基が確認されている。また、金平遺跡（67）では、野島式期の住居跡6軒のほか、住居跡に重複して炉穴5基が確認されている。

前期になると遺跡の数は増加する傾向にあり、遺跡に近接する、尺尻遺跡（93）では諸磯b式期の住居跡1軒と集石2基、尺尻北遺跡（92）で諸磯c式期の住居跡1軒と土壙2基が確認されたほか、新田坊遺跡（94）・芳沼入遺跡（88）においても前期後半の土壙が確認されている。

中期前半では再び遺跡の分布は稀薄になるが、中期後半には増加し、台地や低位の広い河岸段丘上に大規模な集落が営まれるようになる。行司免遺跡（57）は都幾川右岸の河岸段丘上に営まれた勝坂式期から加曾利E式期を主体とする大規模な環状集落で、多数の住居跡や集石土壙が確認された。後・晚期では再び遺跡が減少し、土器の出土が確認される程度となる。前述の行司免遺跡では、

安行式土器が出土している。

弥生時代

弥生時代にはいっても、縄文時代晩期の傾向は継続しており、前期・中期の遺跡はほとんど発見されていない。しかし、後期になると、蟹沢遺跡（87）で住居跡が11軒、大野田西遺跡（89）で住居跡25軒が確認されており、丘陵尾根上に集落が進出する様子がうかがわれる。

古墳時代

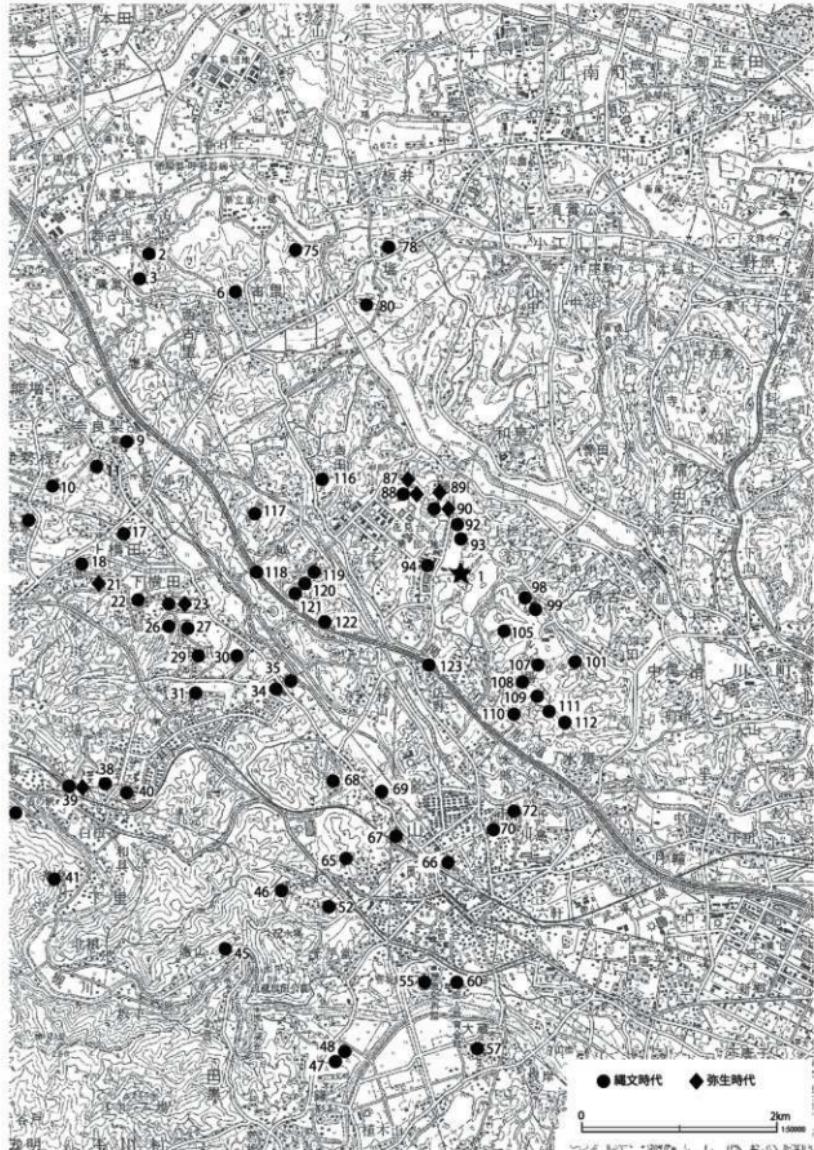
古墳時代では、丘陵内への遺跡の立地は認められず、周縁部において展開する。行司免遺跡（57）では、前期から中期にかけての方形周溝墓と住居跡が確認されている。古墳では、天神山古墳群（86）巖山古墳群（96）・郷社後古墳群（97）・下郷古墳群（126）などがある。

奈良・平安時代

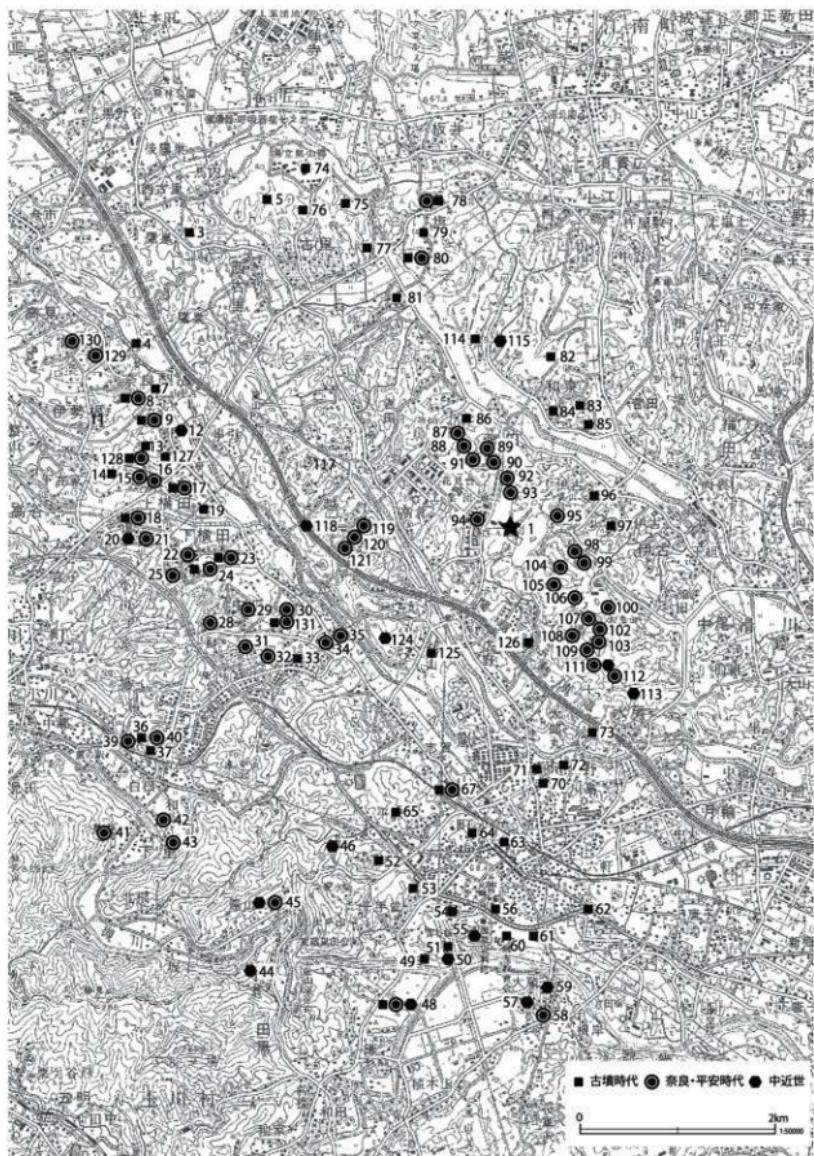
奈良・平安時代にはいると遺跡数は増加の傾向にあり、丘陵内部にも多数の遺跡が確認できる。柳沢A遺跡（104）・山田谷遺跡（106）などを含む滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群や、芳沼入下遺跡（91）などの嵐山工業団地関係の調査で発見された遺跡があげられるほか、天裏遺跡では、丘陵頂部の平坦面から斜面にかけて住居跡36軒が確認されている。天裏遺跡においては掘立柱建物跡1棟が確認されている点も留意される。

中世

中世になると遺跡周辺は鎌倉街道上道の隣地であることもあり、重要な中世遺跡が多く認められる。大蔵館跡（58）では、13～14世紀を主体とする遺構が確認され、大蔵館跡の西側に所在する行司免遺跡では、同時期と考えられる堅穴状遺構や井戸跡、溝跡などが確認された。戦国時代では、鎌倉街道上道沿いに杉山城跡（124）・越畠城跡（118）・高見城跡などの山城が所在し、重要な防衛線としての役割を果たしていたと推察される。



第2図 周辺の遺跡（縄文・弥生時代）



第3図 周辺の遺跡（古墳時代～近世）

第1表 周辺の遺跡一覧

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	油面遺跡	縄文・平安・中近世	67	金平遺跡	縄文・古墳・平安
2	五輪台遺跡	縄文	68	西町裏遺跡	縄文
3	神山古墳群	縄文・古墳	69	深沢遺跡	縄文
4	一ノ段遺跡	古墳	70	花見堂遺跡	縄文・古墳
5	藤塚古墳	古墳	71	花見堂古墳群	古墳
6	上緑地遺跡	縄文	72	岩村古墳群	縄文・古墳
7	草加古墳群	古墳	73	寺の古古墳	古墳
8	岡原遺跡	古墳・奈良・平安	74	古内古墳群茨原支群	古墳
9	貝塚遺跡	縄文	75	北田古跡	縄文・古墳
10	片瀬遺跡	縄文	76	二坂古墳群	古墳
11	台ノ前遺跡	縄文・古墳・平安	77	古里古墳群	古墳
12	瀬訪神社奉祀	中世	78	塙西遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
13	行人塚古墳群	古墳	79	塙古墳群	古墳
14	石塚古墳	古墳	80	塙前遺跡	縄文・古墳・奈良・平安
15	経塚遺跡	平安	81	陣屋古墳群	古墳
16	峯久保遺跡	平安	82	松原古墳群	古墳
17	峯原遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	83	船山遺跡	古墳
18	中井遺跡	縄文・古墳・奈良・平安	84	高申古墳群	古墳
19	新田古墳群	古墳	85	山崎古墳群	古墳
20	武田信俊公館	近世	86	天神山古墳群	古墳
21	宮脇遺跡	弥生・奈良・平安	87	蟹沢遺跡	弥生・奈良
22	恵戸遺跡	縄文・平安	88	芳沼人遺跡	縄・弥・奈・平・中近世
23	越原遺跡	縄文・弥生・古墳・奈良・平安	89	大野田西遺跡	弥生・平安
24	福岡遺跡	古墳・奈良・平安	90	大野田遺跡	縄・弥・奈・中近世
25	経塚遺跡	奈良・平安	91	芳沼人下遺跡	奈良
26	西福岡遺跡	縄文	92	尺尻北遺跡	縄文・平安
27	久保ヶ谷戸遺跡	縄文	93	尺尻遺跡	旧石器・縄文・平安
28	カサ遺跡	平安	94	新川坊遺跡	縄文・平安
29	日向遺跡	縄文・奈良・平安	95	旧伊太神社	奈良・平安
30	本宿前遺跡	縄文・奈良・平安	96	嶽山古墳群	古墳
31	内郷（1）遺跡	縄文・平安	97	郷東古墳群	古墳
32	内郷（2）遺跡	平安	98	台田領A遺跡	縄文・奈良・平安
33	西ヶ谷1号古墳群	古墳	99	台田領B遺跡	縄文・奈良・平安
34	下原道南遺跡	縄文・奈良・平安	100	二ツ沼北遺跡	奈良・平安
35	下原道北遺跡	縄文・平安	101	二ツ沼南遺跡	縄文
36	平松1号墳	古墳	102	二ツ沼西遺跡	奈良・平安
37	平松2号墳	古墳	103	細沼A遺跡	奈良・平安
38	中の台遺跡	縄文・平安	104	柳沢A遺跡	奈良・平安
39	平松台遺跡	縄文・弥生・奈良・平安	105	柳沢B遺跡	縄文・奈良・平安
40	松の木遺跡	縄文	106	山田山遺跡	奈良・平安
41	笠原遺跡	縄文・奈良・平安	107	中尾遺跡	縄文・奈良・平安
42	和具（2）遺跡	奈良・平安	108	亥遺跡	縄文・奈良・平安
43	和具（1）遺跡	奈良・平安	109	中西遺跡	縄文・奈良・平安
44	小倉城跡	中世	110	西玄遺跡	縄文
45	山根遺跡	縄文・平安・中世	111	年中坂B遺跡	縄文・奈良・平安・中世
46	旧平沢寺僧坊跡群	縄文・中世	112	年中坂A遺跡	縄文・奈良・平安
47	野践場遺跡	縄文	113	水房遺跡	中世
48	東落合遺跡	縄文・古墳・奈良・平安・中世	114	西浦の古墳群	古墳
49	石室古墳群	古墳	115	三門塚跡	中世
50	上石室遺跡	中世	116	山王下遺跡	縄文
51	山王古墳群	古墳	117	幡後谷津遺跡	縄文
52	表古墳群	縄文・古墳	118	越畠城跡	縄文・中世
53	原古墳群	古墳	119	大木山遺跡	縄文・奈良・平安
54	向原古墳群	古墳	120	小栗古墳跡	縄文・平安
55	菅谷解跡	縄文・中世	121	小栗遺跡	奈良・平安
56	植荷塚古墳	古墳	122	打頭遺跡	縄文
57	行司免遺跡	縄文・中世	123	中郷遺跡	縄文
58	大藏解跡	平安	124	杉山城跡	中世
59	向德寺跡	中世	125	栗の森古墳群	古墳
60	寺山古墳群	縄文・古墳	126	下郷古墳群	古墳
61	東原古墳群	古墳	127	方墳行人冢	古墳
62	上唐子西原古墳群	古墳	128	寿源寺遺跡	古墳・平安
63	東側古墳群	古墳	129	大杉遺跡	奈良・平安
64	東昌寺古墳群	古墳	130	都谷遺跡	奈良・平安
65	物見塚古墳	縄文・古墳	131	宮前遺跡	古墳・奈良・平安
66	向原遺跡	縄文			

III 遺跡の概要

油面遺跡は、比企郡嵐山町勝田地内に位置する。油面遺跡周辺は、工業団地やゴルフ場の造成に伴い広範囲で発掘調査が実施されており、既に多くの遺跡の存在が明らかとなっている場所である。

調査区は、3方向に延びる尾根が対象であり、調査面積は11301.47m²、標高はおよそ92mである。尾根は、東・西・南方向に延びており、それぞれを東尾根・西尾根・南尾根と呼称し、3つの尾根が集約される地点を中央尾根とした。調査区の北側は、急峻な斜面となる。

さらに、第3号溝跡より北側の調査区（東尾根・西尾根・中央尾根）をA区、南側（南尾根）をB区とした。ピット番号についてはA・B区それぞれで通し番号をつけており、A区に位置するピットには、番号の頭に10を付して区別した。その他の遺構については、A・B区共通で遺構番号を付している。

調査区内では、西尾根・南尾根の端部と、中央尾根の頂部にわずかに平場が形成されていて、遺構はこれらの平場を中心分布していた。特に、西尾根と南尾根の端部に集中する傾向が認められ、縄文時代・平安時代とともに、谷を臨む尾根の端部を積極的に活用していた様子がうかがわれる。

検出された遺構は、縄文時代の住居跡4軒、集石土壙1基、土壙8基、焼土跡25基、遺物包含層2箇所、古代の住居跡1軒、炭焼窯跡2基、土壙1基、中・近世の溝跡3条、道路跡7条、ピット224基である。これらの遺構の多くは、斜面への土の流出によって、上部を大きく壊されており、遺存状態は非常に悪かった。特に、縄文時代の住居跡のうち、南尾根に位置する第2・5号住居跡は、住居跡の掘り込みが完全に失われており、炉跡とその周辺に分布するピットの配置から住居跡と認定した。西尾根に位置する第3・4号住居跡についても、掘り込みの一部は失われていた。

このように、住居跡の覆土が流出することに

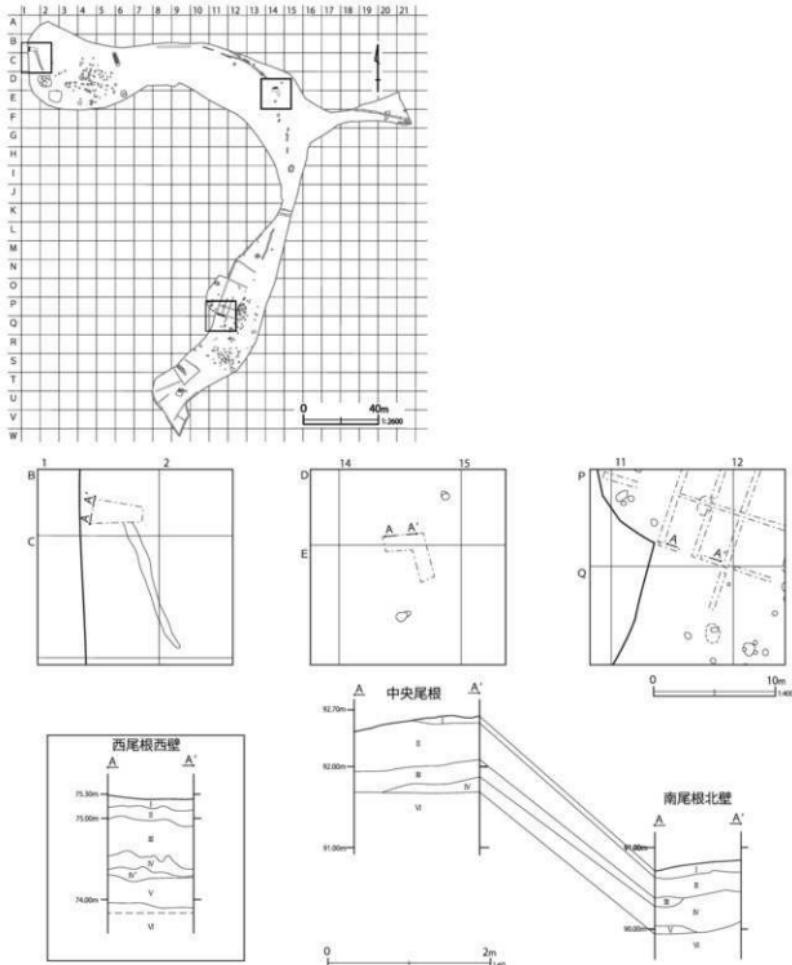
よって、斜面には遺物包含層が形成されていた。西尾根のものをA区遺物包含層、南尾根のものをB区遺物包含層と呼称した。ただし、これには縄文時代早期～中期に属する土器に加えて、須恵器・土師器片なども上下に入り混じっており、時期ごとの分層はできなかった。

平安時代の住居跡は、南尾根から1軒のみ発見されている。第1号住居跡である。谷を挟んで東側に位置する滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では、尾根筋ごとに1～2軒の住居跡が点在する状況が確認されており、油面遺跡周辺の丘陵地では、このようなあり方が一般的であると推察される。

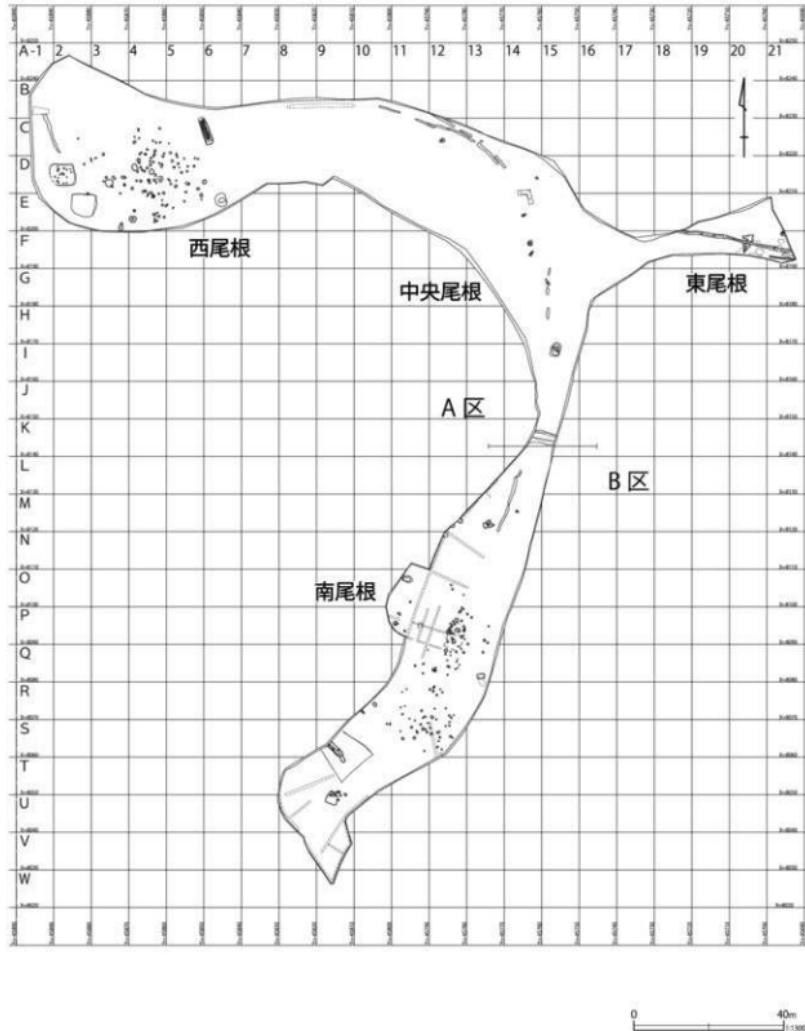
第1号住居跡は北側の壁にカマドを有し、カマドの両側には棚状施設と思われる掘り込みが付帯している。住居内からは、紡錘車のほか、小型の斧である袋状鉄斧が発見され、住居跡の性格にかかる貴重な遺物である。

炭焼窯跡は、西尾根・南尾根にそれぞれ1基ずつ確認された。それぞれ規模や形態は異なるが、出土した炭化材の自然科学分析を行ったところ、いずれも平安時代から鎌倉時代のものという結果を得た。炭の供給先は不明である。また、調査区内からは椀形鋤が出土しており、周辺における鍛冶遺構の存在が想定される。

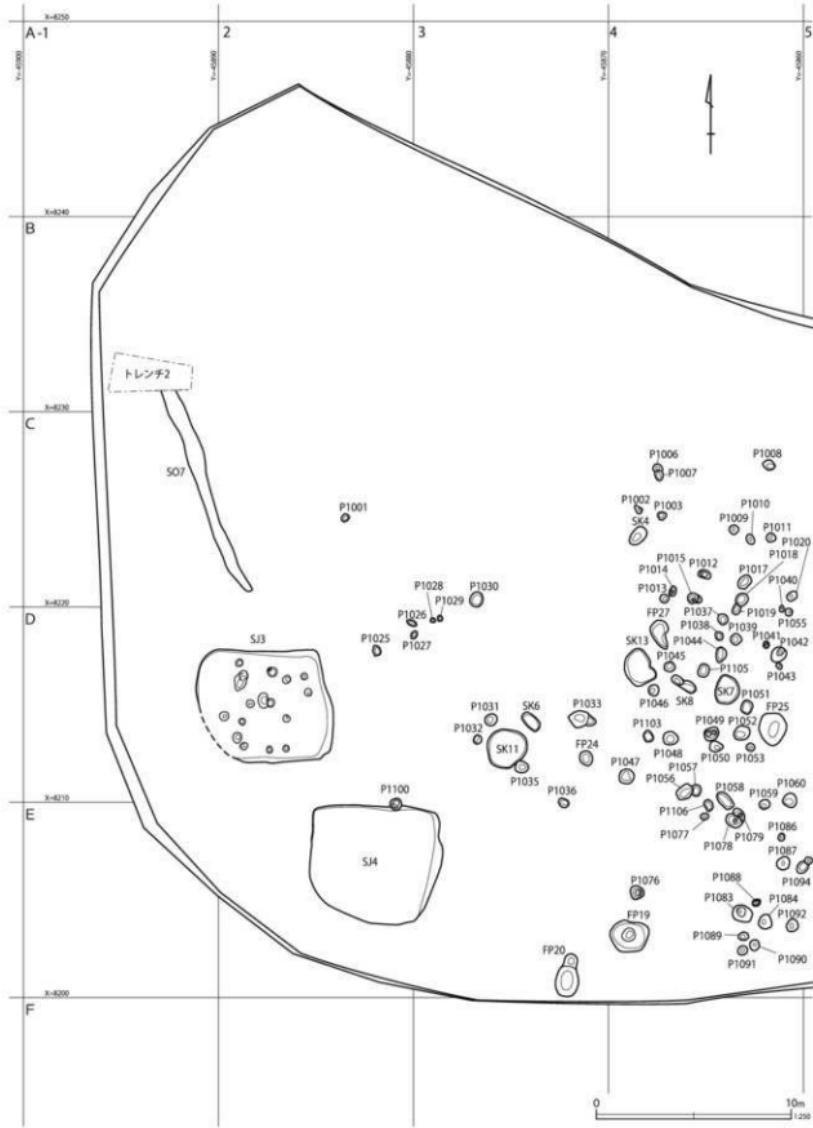
覆土に焼土粒や炭化物粒が含まれるものと被熱面が確認されたものについては焼土跡として区別した。焼土跡は、当初、縄文時代早期の炉穴を想定したが、断面観察の結果、検出面上での被熱であり掘り込みを伴わないものが多数あることが分かった。また、焼土跡内から縄文時代早期の遺物の出土は認められなかった。さらに、第6号焼土跡では、得られた炭化材の自然科学分析を行い、平安時代前期から中期との結果を得た。そこで、縄文土器片の出土したものは当該時期のものとし、それ以外については古代のものとして扱った。焼土跡は尾根沿いに点在する特徴が認められる。



第4図 基本層序



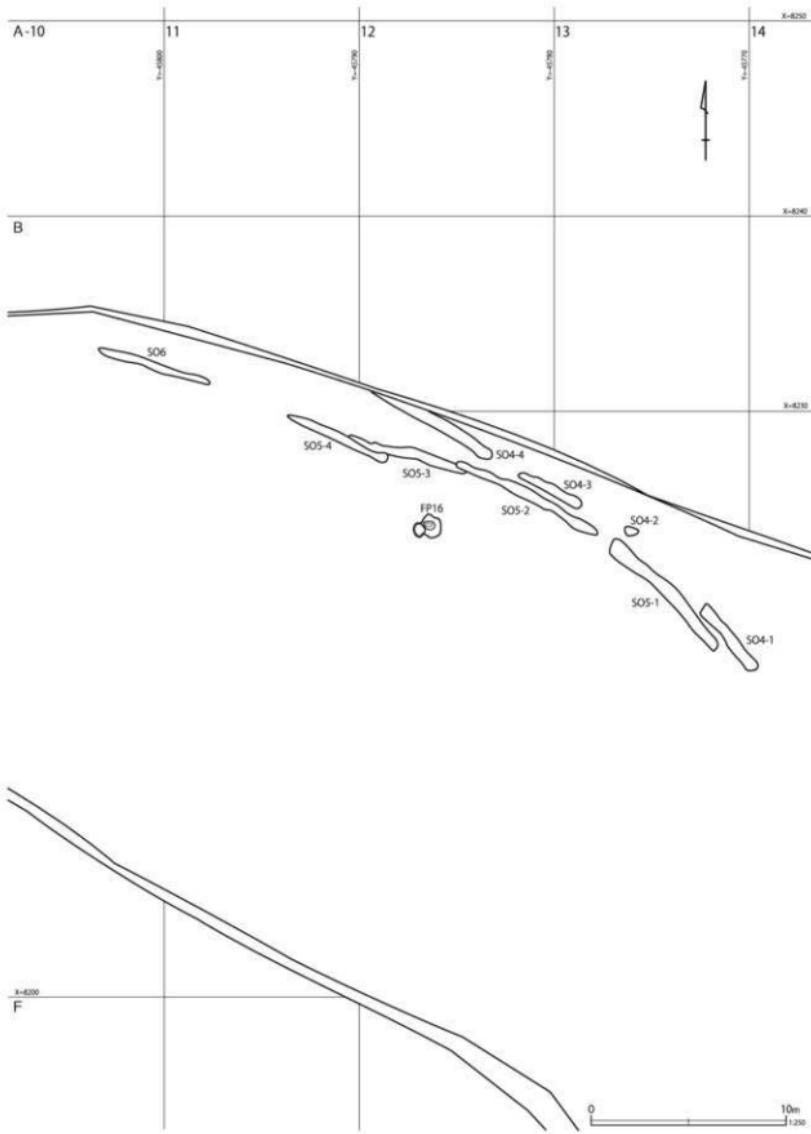
第5図 全体図



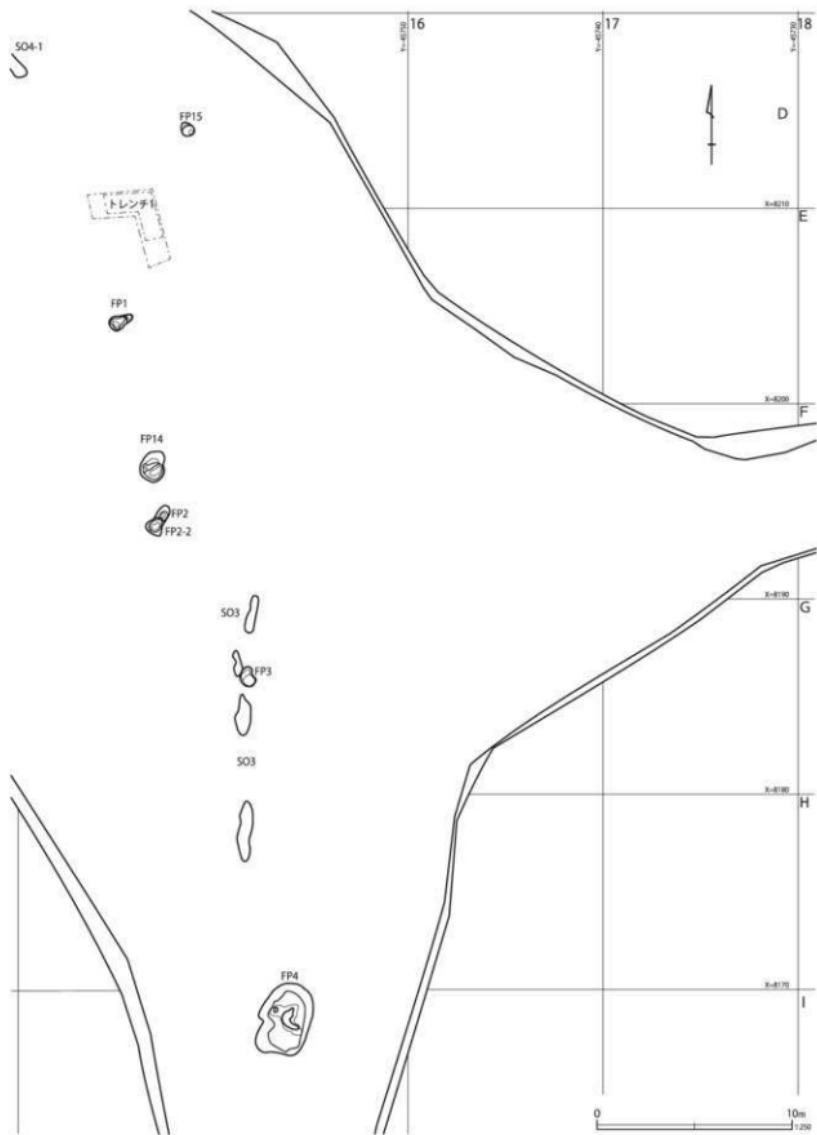
第6図 区割図(1)



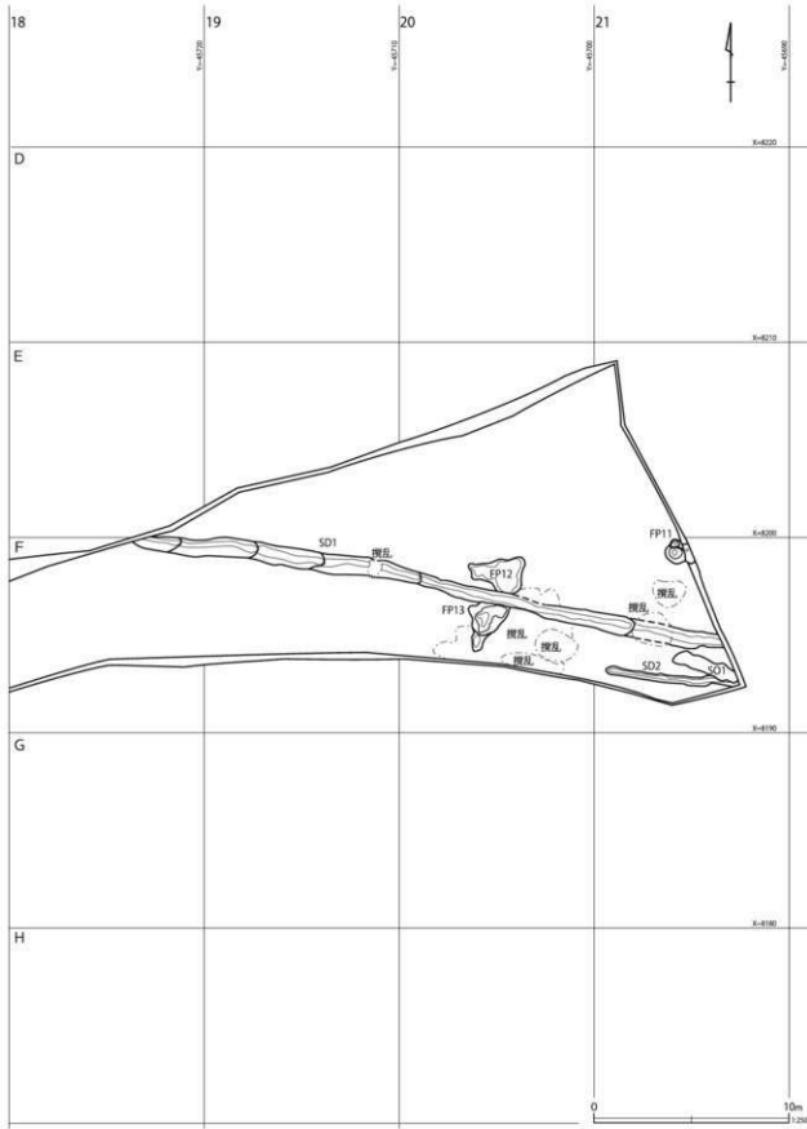
第7図 区割図(2)



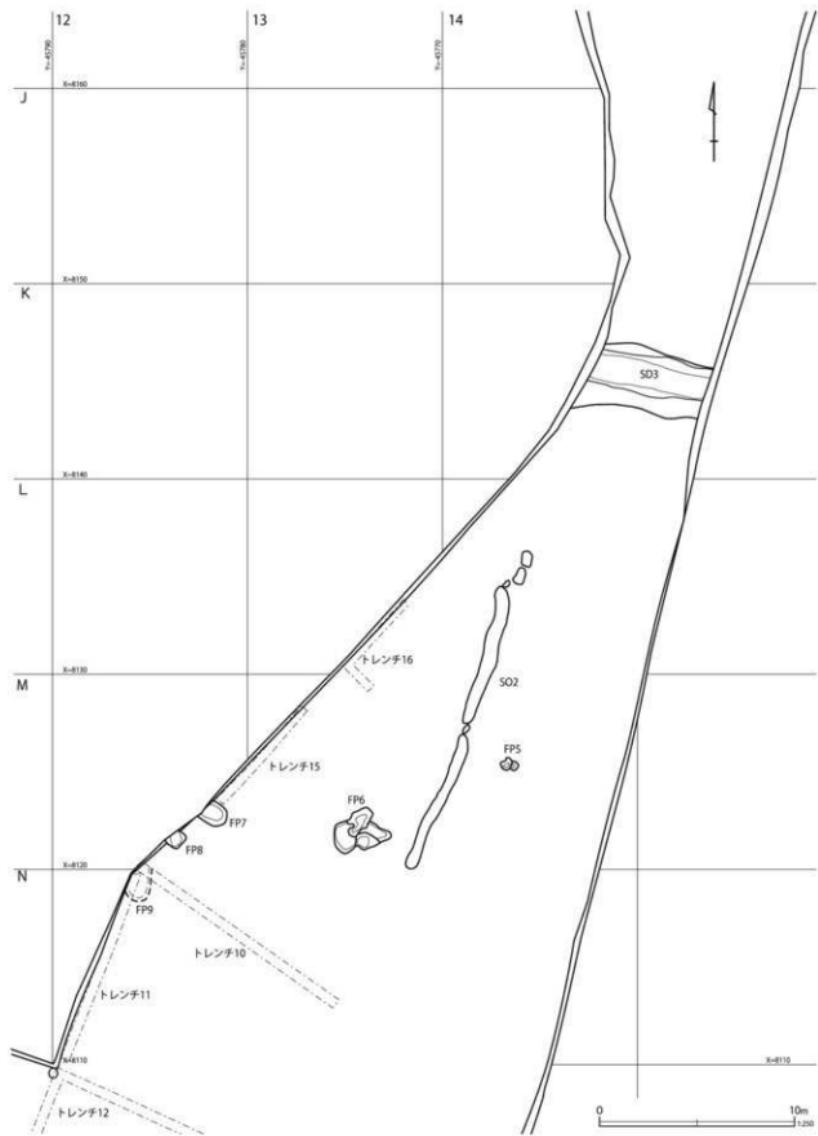
第8図 区割図(3)



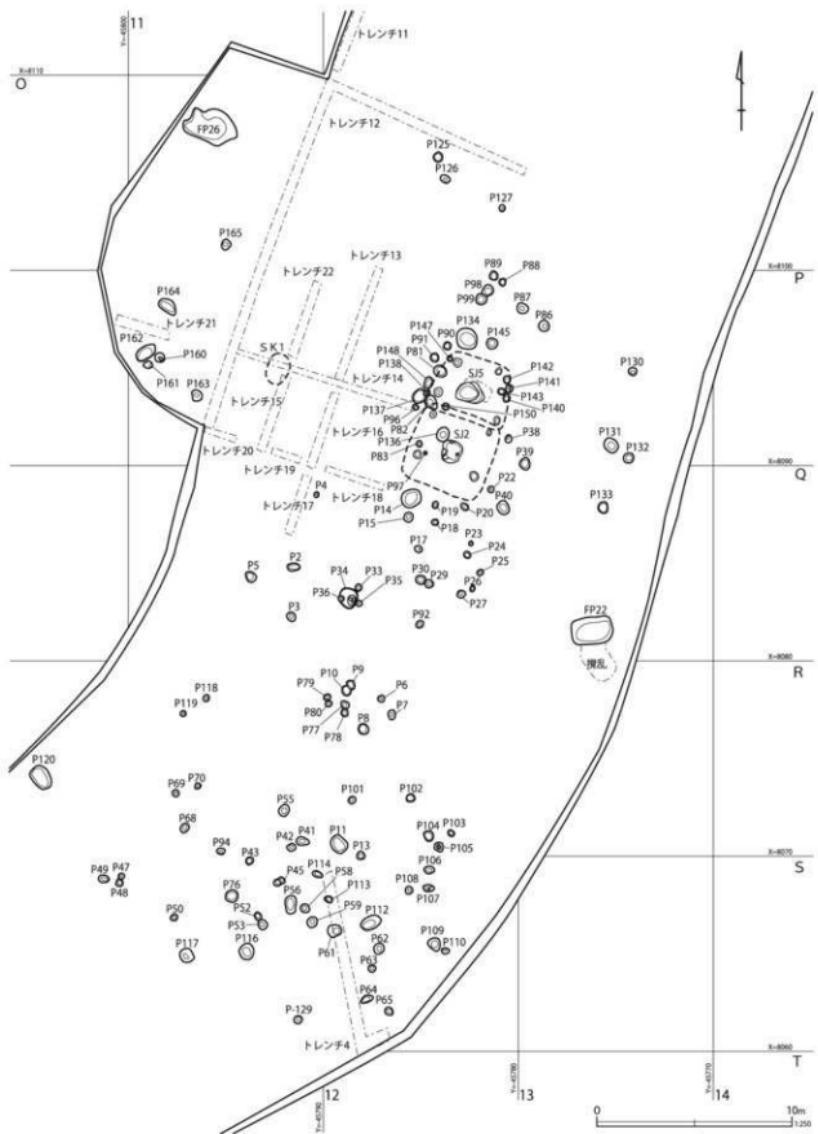
第9図 区割図(4)



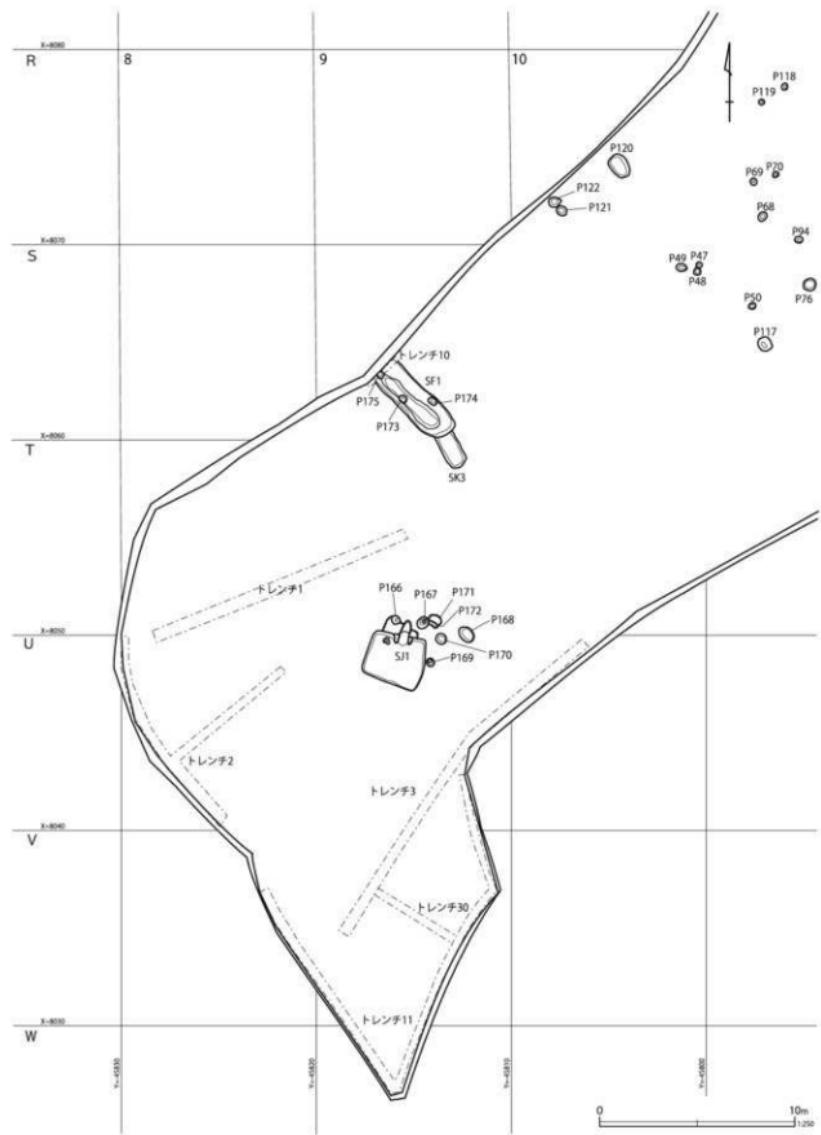
第10図 区割図 (5)



第11図 区割図（6）



第12図 区割図 (7)



第13図 区割図 (8)

IV 遺構と遺物

1 繩文時代の遺構と遺物

(1) 住居跡

縄文時代では、A区の西尾根端部で第3・4号住居跡、B区の南尾根斜面移行部で第2・5号住居跡の、合計4軒の竪穴住居跡が検出された。遺構確認面まで削平が及んでいる部分が多く、床面と炉のみが検出された住居跡や、確認面からの掘り込みが浅く、一部壁が削平された状態で検出された住居跡が多い。

第2号住居跡（第14図）

P-12グリッドに位置し、北側で第5号住居跡と一部重複する。床面まで削平が及んでおり、住居跡の新旧関係は不明である。炉跡とその周辺に分布するP1～4から、4本主柱の方形状を呈する住居跡と認定した。

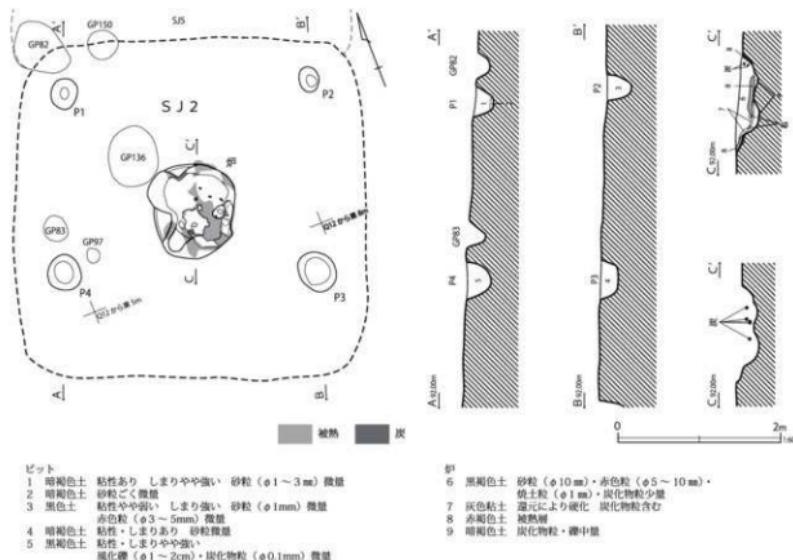
炉跡は地床炉で、不整円形を呈し、住居跡の中

央部やや南側に位置する。推定規模は長径1.18m、短径0.97mである。掘り込みは一部地山の岩盤層に達する。炉床近くで、炭化物が少量出土した。住居跡からは遺物は出土していない。

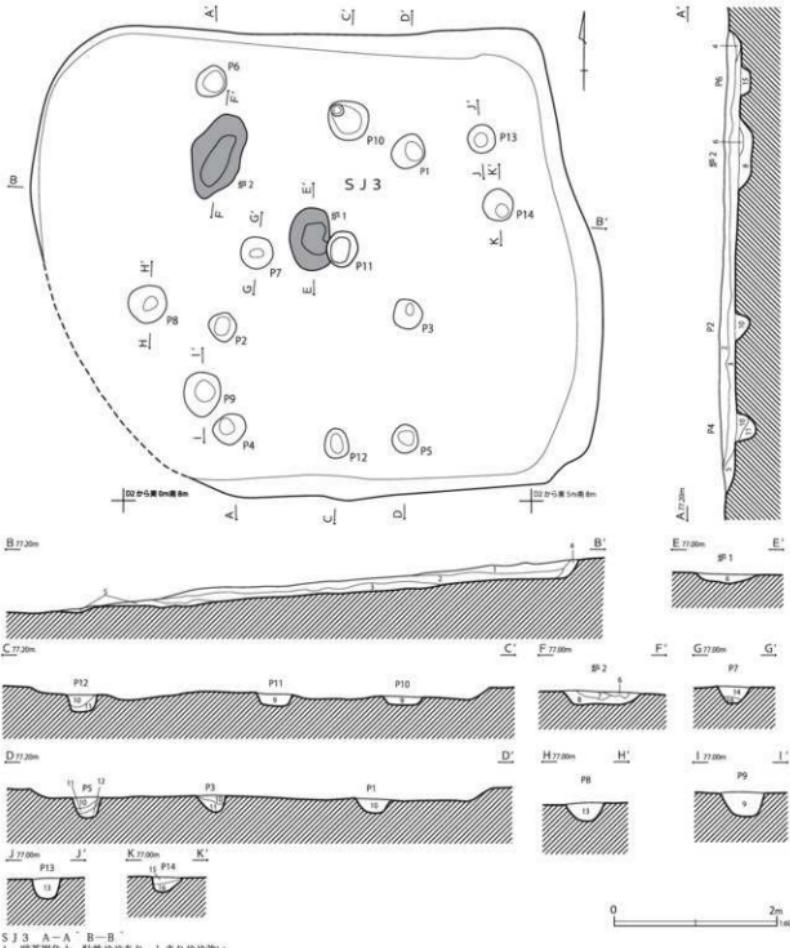
住居跡西側の斜面部に縄文時代前期後葉の諸磯b式期を中心とした遺物包含層が形成されており、住居跡も同時期の所産の可能性が高い。

第3号住居跡（第15、16図）

D-1・2グリッドで、第4号住居跡の北西側に位置する。住居跡は、西側に傾斜する斜面の肩部にあり、斜面への表土流出により、西側の壁面が一部失われていた。平面形は、東西方向にやや細長い不正な長方形で、推定される規模は東西方向の長径6.85m、南北方向の短径5.65mである。ピットは、14基検出された。



第14図 第2号住居跡



- S J 3 A-A' B-B'
- 暗褐色土
粘性ややあり しまりやや強い
 - 暗灰褐色土
黒雲母（φ0.5 mm）含む 粘性わざか しまりやや強い
 - 褐色土
黄白色・暗灰褐色 土粒（φ2～3 mm）微量
炭化物粒（φ2～4 mm）含む 粘性強い しまりやや強い
 - 暗灰褐色土
黒雲母粒（φ0.5 mm）多量 粘性・しまりなし
 - 暗灰褐色土
粘性ややあり しまりなし
 - 暗褐色土
ロームを主体とする
燒土粒（φ0.1～0.5 mm）・炭化物粒（φ0.5 mm）微量
粘性やや弱い しまりあり
 - 暗赤褐色土
炭化物粒（φ2～4 mm）多量 烧成粒（φ5 mm）少量
粘性ややあり しまりやや弱い 被熱あり
 - 暗褐色土
炭化物粒（φ1～2 mm）・燒成粒少量 粘性・しまりややあり

- B-C' D-E' F-G' H-I'
- ピット
- 明褐色土 黄褐色土ブロック（φ10 cm）微量
4層土をブロック状に含む 粘性ややあり しまり弱い
 - 明褐色土 ローム土と4層土の混合
粘性・しまりややあり
 - 暗褐色土 燃土粒（φ1 mm）少量 炭化物粒微量
粘性あり しまりややあり
 - 暗褐色土 燃化物粒（φ1 mm）少量 烧成粒・炭化物粒微量 粘性・しまりややあり
 - 淡褐色土 燃土粒・炭化物粒（φ1～3 mm）含む 粘性・しまりややあり
 - 淡褐色土 燃土粒・炭化物粒（φ0.5 mm）微量 白灰褐色（φ0.1 mm）ごく微量
粘性あり しまりややあり
 - 暗褐色土 粘性・しまりややあり

第15図 第3号住居跡

炉跡は2基検出された。炉1は住居跡のほぼ中央に位置し、規模は長径0.79m、短径0.55mである。床面において焼土粒・炭化物粒が確認されたため炉跡とした。

炉2は住居跡の北西寄りに位置し、規模は長径1.09m、短径0.67mである。住居跡の床面において、わずかに被熱面が確認された。

遺構の時期は、出土遺物から、縄文時代前期後葉諸磧b式期に属する可能性が高い。

第3号住居跡出土遺物（第17図1～20）

1は角頭状の口唇部が外反しながら開く器形の深鉢形土器で、横走する細かな単節R L縄文が口縁部に施文されている。口縁部及び内面は非常によく磨かれている。口縁部に縦位の沈線状のモチーフが見られるが、ガジリ痕と判断される。暗赤褐色を呈する。

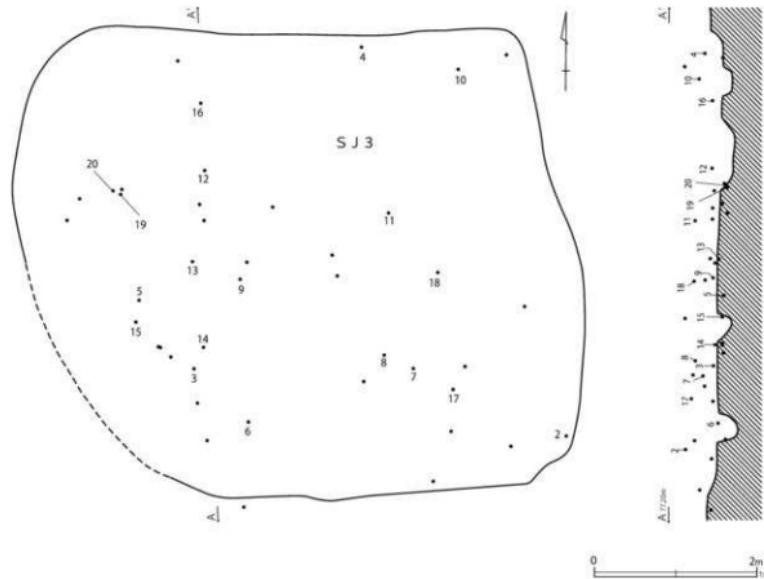
2は口縁部が外反する器形の胴部破片で、単節

L R縄文上に、半截竹管による細い横位の平行沈線が施文されて、胴部が区画されている。暗赤褐色の胎土に、若干の白色粒子が含まれる。

3は小さな破片であるが、やや幅広の平行沈線文間に大振りの爪形文が施文されている。橙褐色を呈する。

4～8は平行沈線でモチーフが描かれる土器群である。4、5は弧状の平行沈線文が施文されており、6、7は鋸歯状のモチーフが施文されている。8は横位の平行沈線文が施文されているが、平行沈線文間に低隆帶状を呈し、隆帶上にも横位の浅い沈線文が施文されている。

1、2は縄文時代前期後半の無織維土器である諸磧a式の可能性があり、4～7はいずれも橙褐色で白色粒子を含む諸磧b式に比定される爪形文土器と、平行沈線文土器であろう。8は白色粒子が多く含まれる点で、他の諸磧b式土器と趣を異



第16図 第3号住居跡遺物出土状況

にしている。

9～11は前期末葉の諸磯c式土器で、平行沈線文を地文として、9は縦位の棒状貼付文が垂下施文されている。10は棒状貼付文の代わりに縦位の集合平行沈線文が施文されているものである。11は地文の平行沈線文がやや間隔を空けて施文されており、破片の左隅に貼付文の剥落した痕跡が残る。内面は丁寧に磨かれている。いずれも胎土にやや砂粒を多く含み、白色粒子が含まれる。

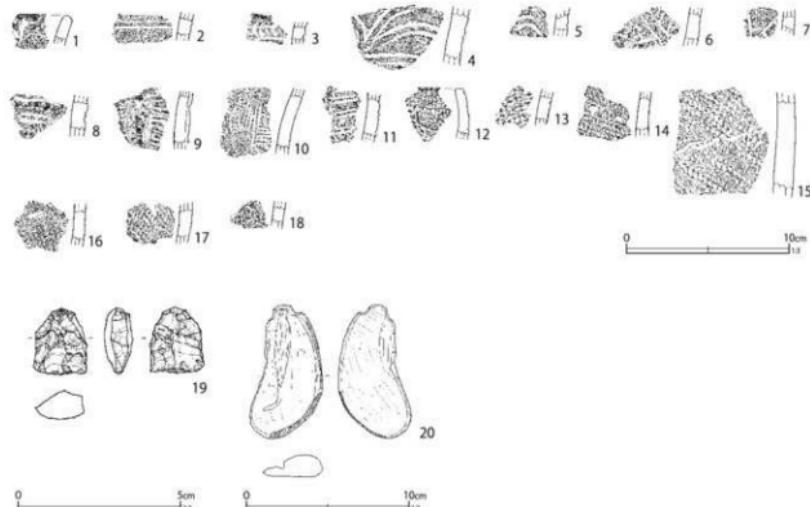
12、13は押引状の結節沈線文が施文される土器群である。12は角頭状の口縁部がやや内湾する器形で、口縁に沿って平行する2条の押引状結節沈線が施文されて口縁部が区画されている。結節沈線文下は横位の平行沈線が施文される。13は半截竹管の細かな結節沈線文が密に施文されており、渦巻状のモチーフを構成するものであろう。12は

橙褐色、13は暗赤褐色を呈するが、白色粒子を含み、諸磯c式の新段階に比定されよう。

14～18は単簡R L繩文のみが横位施文されている破片で、14、16、17は細かな単簡R L繩文が施文されており、橙褐色を呈する。諸磯a～b式の古段階に比定されるものと判断される。15はやや大粒の繩文で、原体末端の結節部によるS字状回転圧痕が施文される。諸磯b式に比定されるものであろう。

19、20は出土した石器である。19は黒曜石製のくさび形石器である。上下端部それぞれの方向から調整が施されている。

20は砥石である。上辺には、つまみ部を作り出すように、抉りが入っている。表面中央には、溝状に凹みが見られる。右側縁の一部には敲打痕が残されている。



第17図 第3号住居跡出土遺物

第2表 第3号住居跡出土石器観察表(第17図)

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
19	S J 3	くさび形石器	黒曜石	2.0	1.7	0.9	2.8	No.35
20	S J 3	砥石	砂岩	8.2	4.5	1.4	45.1	No.25 赤色化

第4号住居跡（第18、19図）

E-2・3グリッドで、第3号住居跡の南東に位置する。GP1100と重複し、ピットの方が新しい。第3号住居跡と同様に斜面方向への流出によって削平が進んでおり、西側と南側の壁及び床面の一部が失われている。平面形はやや不整形で、残存する規模は長軸の東西方向6.75m、短軸の南北方向5.80m、深さ0.31mである。

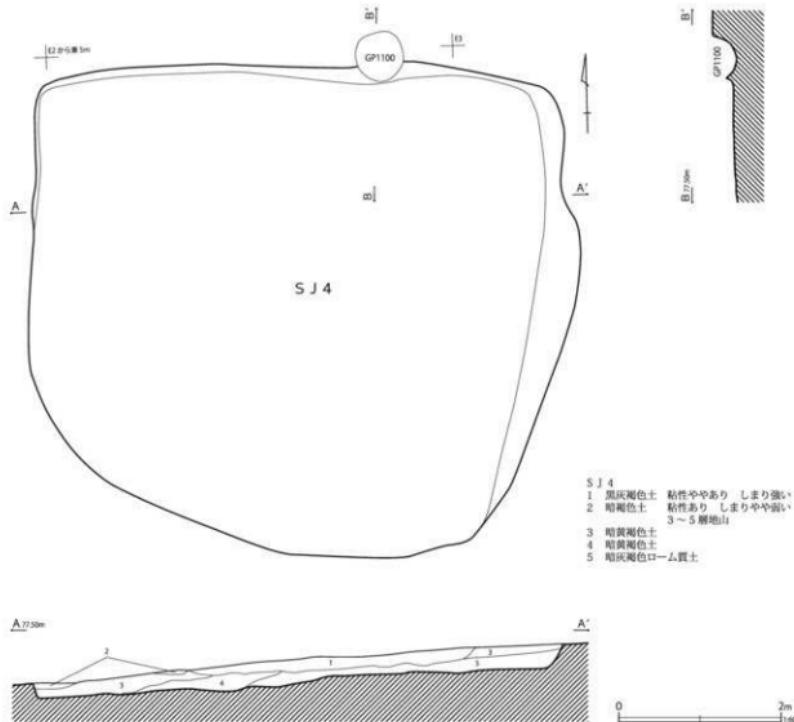
住居跡の範囲内からは、炉跡やピットは検出されなかつたが、A-A'断面の東側において明瞭な掘り込みを確認したこと、隣接する第3号住居跡とほぼ同規模・同形態であること、遺物が集中

して分布すること、斜面地に面していることなどから、住居跡と認定した。

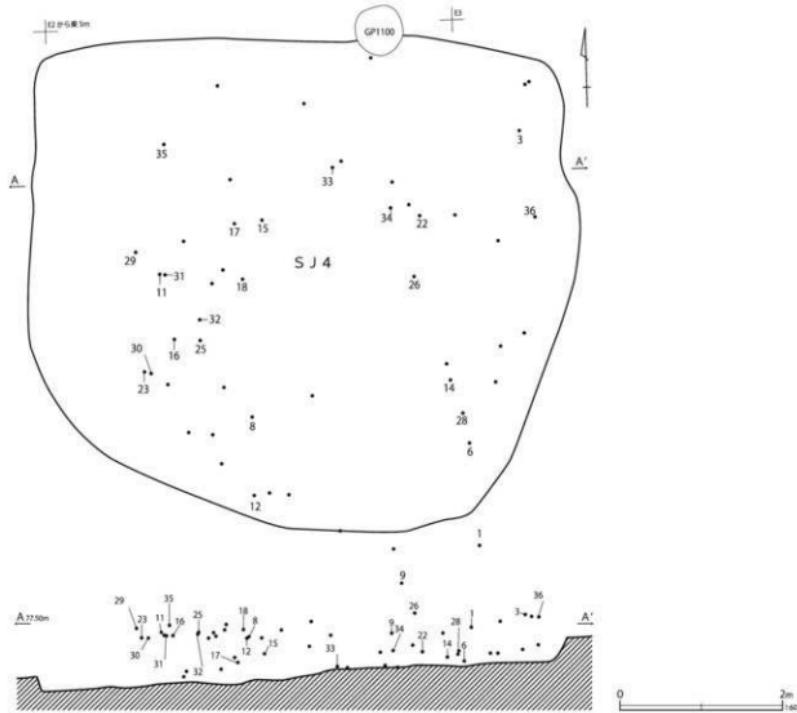
時期は出土遺物より、隣接する第3号住居跡と同様に、縄文時代前期後葉諸磧b式期に属するものと判断される。

第4号住居跡出土土遺物（第20・21図1~36）

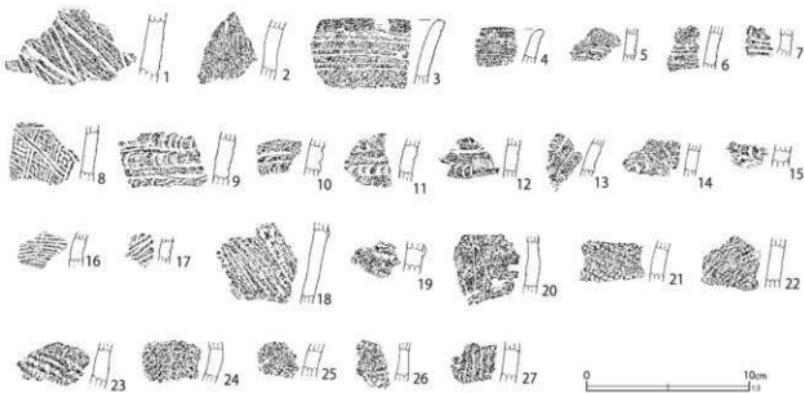
1、2は縄文時代早期後葉の条痕土器で、器壁に若干の繊維が含まれ、1は外面に深く明瞭な条痕文が施文される。半截竹管を束ねたような施文具による条痕文で、表面は明瞭であるが、裏面は擦痕状を呈する。2は内外面の条痕整形が浅く、条痕文の残りが悪い。口縁部に近い位置の破片で



第18図 第4号住居跡



第19図 第4号住跡遺物出土状況



第20図 第4号住跡出土遺物（1）

ある。いずれも繊維は少ないが、白色細砂粒が多く含まれている。

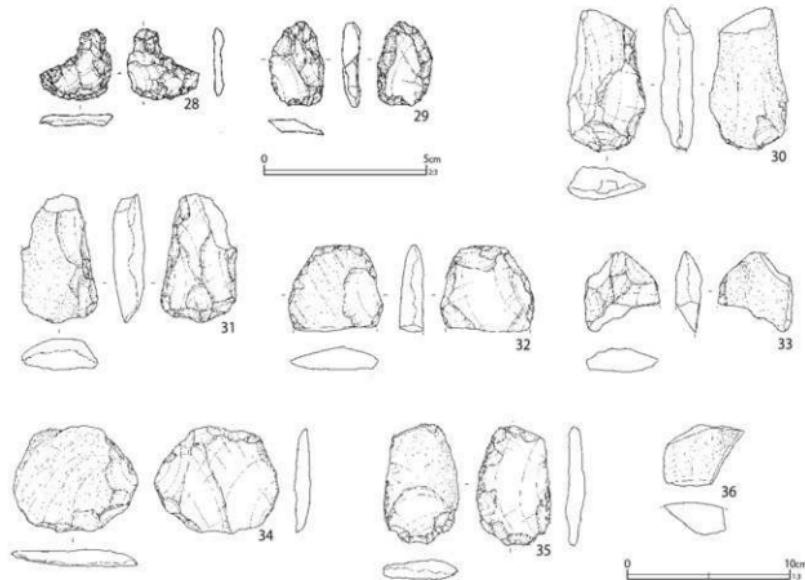
3～7は比較的幅の狭い半截竹管の平行沈線が、横位に施文されるものである。3は角頭状の口唇部が外反する口縁部に、3対の横位の平行沈線文が施文されるもので、地文に単節L R 繩文が横位に施文されている。口唇上と内面には丁寧なミガキが施されている。

4は先細り状の口縁部が開く器形で、浅い条線

状の平行沈線が横位に施文されている、地文繩文は施文されていない。

5～7は頸部から胴部にかけての破片と思われ、細かな平行沈線が施文されている。諸磯b式古段階に比定されよう。

8は平行沈線の横位の区画線下に、同種の平行沈線で斜格子目文が施文されるものである。地文には単節R L 繩文が施文されている。刈羽式に類似する。格子目文は時期幅の長いモチーフであり、



第21図 第4号住居跡出土物 (2)

第3表 第4号住居跡出土石器観察表 (第21図)

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
28	S J 4	スクレイバー	黒曜石	2.2	2.2	0.4	1.2	No.6
29	S J 4	スクレイバー	チャート	2.6	1.7	0.6	1.2	No.39
30	S J 4	打製石斧	頁岩	[8.7]	4.8	2.0	91.9	No.42
31	S J 4	打製石斧	ホルンフェルス	[7.9]	4.7	1.9	84.0	No.40
32	S J 4	打製石斧	ホルンフェルス	[5.3]	5.8	1.5	59.1	No.41 風化
33	S J 4	打製石斧	ホルンフェルス	[4.9]	[4.6]	1.6	33.2	No.52 一部赤色化
34	S J 4	スクレイバー	ホルンフェルス	6.6	7.7	1.1	62.1	No.11 風化
35	S J 4	スクレイバー	砂岩	7.4	4.6	1.2	39.8	No.38 やや風化
36	S J 4	磨石	砂岩	[3.8]	[5.0]	[2.0]	38.5	No.46 赤色化 一部黒色化

本例は諸磯 b 式の古段階辺りに比定されるものと思われる。

9~15は平行沈線間に爪形文を施す土器群で、諸磯 b 1式から b 2式に位置付けられるものであろう。9、10は爪形文を施す平行沈線間の間隔がやや開き、10はこの部分に斜位の刻みが施されている。浮線文土器の先行形態もしくは初期の土器と思われる。

19は浮線文が施される土器で、諸磯 b 2式と判断されるものである。

16、17は条線状の細かな平行沈線が施される、諸磯 b 3式の破片である。

18は条線地文上に、結節刺突を施す貼付文が施される諸磯 c 式土器である。

20は細沈線で鋸歯状のモチーフが描かれる土器で諸磯 c 式に比定される沈線文土器と思われる。

21~27は縄文のみが施される土器群で、21、23、27はR L 縄文、22、24~26はL R 縄文が横位施文されている。いずれも諸磯式に伴う土器

群であろう。

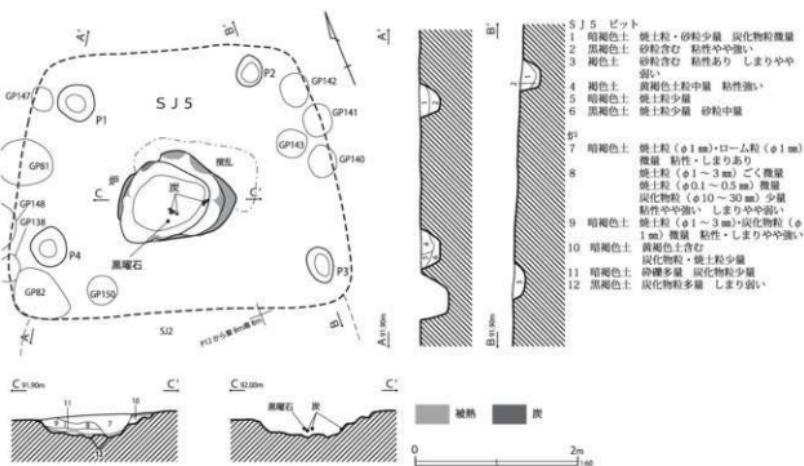
第21図28~36は出土石器である。28、29は小型のスクレイパーである。28はつまみを有しており、丁寧に調整が施されている。30~33は打製石斧で、すべて破損品である。34、35は剥片を利用したスクレイパーで、調整は最低限に施されている。36は磨石の小破片である。

第5号住居跡（第22図）

P-12グリッドに位置し、第2号住居跡の北側と一部重複するが、新旧関係は不明である。掘り込みは完全に失われており、炉跡とその周辺に分布するピットから住居跡と判断した。平面形は、南側に開く台形状を呈するものと想定される。

炉跡は住居跡のほぼ中央に位置し、推定規模は長径1.48m、短径1.03m、深さ0.31mである。炉床は岩盤層に達する。炉跡の縁辺部で被熱面が確認され、覆土中より黒曜石の剥片が出土した。

土器は出土していないが、第2号住居跡と同様に、前期後葉諸磯 b 式期の所産であろう。



第22図 第5号住居跡

(2) 集石土壙

第1号集石土壙 (第23図)

集石土壙は、西尾根D-5区の土壙群の中で、1基検出された。平面形は梢円形で、規模は長径0.88m、短径0.70m、深さ0.12mである。礫は焼けしており、覆土に焼土粒や炭化物粒が少量含まれる。壁面等に被熱面は確認されなかった。遺構の時期を特定する土器は出土していない。

第1号集石土壙出土遺物 (第24図1~10)

第24図1~10は、集石土壙から出土した石器類である。いずれも砂岩製の磨石類である。遺構内から出土した礫も、ほとんどが砂岩であった。

また、被熱のため、赤色化や黒色化したものが多くの占めている。破碎したものが多く、小ぶりである1、2、7は完形で、8は表面に細かいひび割れが観察された。1~4は、表裏面に磨面が

観察され、1は右側面に平坦な磨面を持っている。

5、6は磨面の他、縁辺に敲打痕が観察された。5は上端に敲打が残るもので、破損した左側面の一部を、磨面として使用している。

6は長径方向に割れており、下端に敲打痕が残る。

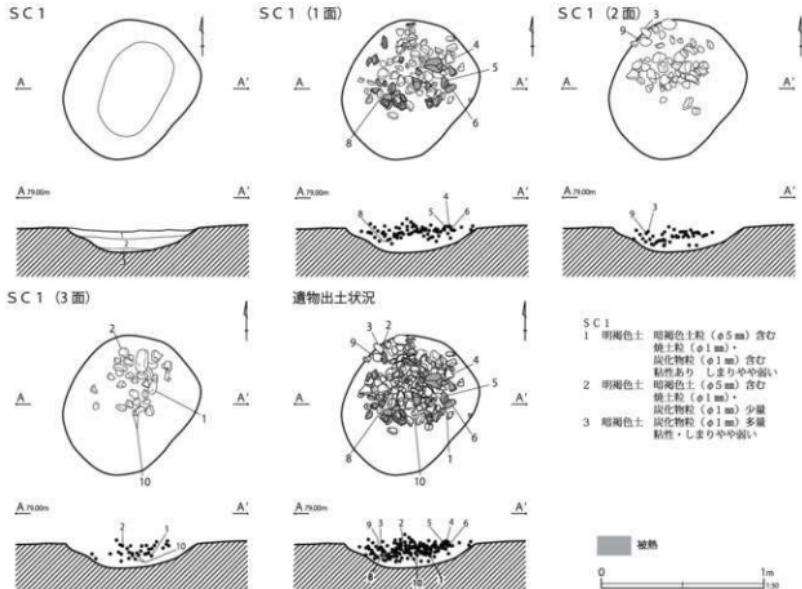
7~10は、磨面上に敲打による凹みが観察されたものである。

7は小型の磨石で、横断面が三角形状となるもので、三角の三面を磨面として使用している。平坦面となる裏面に敲打による凹みが認められる。

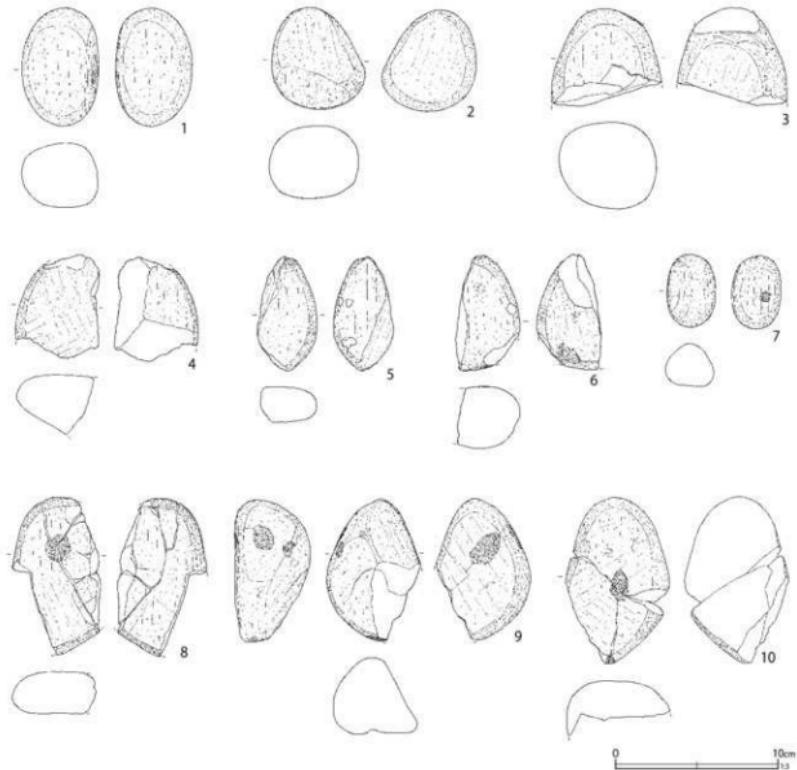
8は表面に敲打による凹みが認められる。

9は7と同様、横断面が三角形状となるもので、それぞれの面を磨面として使用している。敲打による凹みは側面と裏面に認められる。

10は表面中央に敲打による凹みが認められる。



第23図 第1号集石土壙



第24図 第1号集石土壤出土遺物

第4表 集石土壤出土石器観察表(第24図)

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	SC 1	磨石類	砂岩	7.3	4.7	4.1	195.4	No.149 一部赤色化
2	SC 1	磨石類	砂岩	6.3	5.8	4.6	197.4	No.136 一部赤色化・黒色化
3	SC 1	磨石類	砂岩	[6.0]	[6.8]	44212.0	256.6	No.88 赤色化 一部黒色化
4	SC 1	磨石類	砂岩	[6.4]	[5.1]	[3.7]	117.6	No.4 赤色化
5	SC 1	磨石類	砂岩	7.0	3.7	2.3	68.2	No.2 一部赤色化
6	SC 1	磨石類	砂岩	[7.1]	[4.0]	3.8	124.3	No.1
7	SC 1	磨石類	砂岩	4.5	3.0	2.8	50.1	二面 赤色化
8	SC 1	磨石類	砂岩	9.8	[5.5]	2.7	160.4	No.36 赤色化
9	SC 1	磨石類	砂岩	[8.7]	[5.8]	4.7	218.7	No.87 赤色化 一部黒色化
10	SC 1	磨石類	砂岩	[10.2]	[6.4]	[4.6]	225.0	No.155-159 一部赤色化・黒色化

(3) 土壙

縄文時代の土壙は、西尾根で第4、6、7、8、11、12、13号土壙の7基、南尾根で第1号土壙1基の、合計8基が検出された。

これらの土壙が遺構確認面からの掘り込みがごく浅いのは、他の遺構と同様に斜面に位置しており、土砂の流出による削平を受けているからと考えられる。

西尾根の端部や、南尾根の平坦面に多くの遺構が集中して残っているのは、これらの土砂の流出の影響を受ける割合が少なかったからであると推測される。

第1号土壙（第25図）

P-11グリッドに位置する。トレンチ調査によって確認されたが、平面形や規模は不明である。諸磯b式期の縄文土器片が出土している。

第1号土壙出土遺物（第26図1）

1は諸磯b式の沈線土器の胴部破片で、LR縄文地文上に、細い半截竹管を束ねた条線文で鋸歯状のモチーフを施文している。諸磯b3式であろう。

第4号土壙（第25図）

C-4グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.70m、深さ0.15mである。壙底は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第6号土壙（第25図）

D-3グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形で、規模は長軸1.10m、短軸0.60m、深さ0.15mである。壙底は皿状を呈する。

第6号土壙出土遺物（第26図2）

2は出土した磨石である。ごく一部分が残存している。丸みのあるもので、残存部では、磨面として全面を使用している。

第7号土壙（第25図）

D-4グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸1.50m、短軸1.25m、深さ

0.15mである。壙底は平坦面で、緩く壁が立ち上がる。時期を判別する遺物は、出土しなかった。

第8号土壙（第25図）

D-4グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.40m、短軸0.40m、深さ0.10mである。壙底は皿状を呈するが、北西側がピット状に深くなってしまっており、0.20mの深さがある。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第11号土壙（第25図）

D-3グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸2.00m、短軸1.90m、深さ0.10mである。壙底は皿状を呈し、底面直上から土器片や石器が複数出土している。

第11号土壙出土遺物（第26図3～7）

3は口縁が緩く開く小波状口縁の深鉢で、口縁部に蛇行する無加飾の貼付文を施文し、地文に単節LR縄文を施文する。波状口縁の右側の口唇部下に、横長の瘤状の貼付文が見られる。

4は細い単節LR縄文を横位施文し、5は非結束の羽状縄文を施文するもので、一部に異方向の縄文を施文している。

6、7は出土した石器である。いずれも被熱している。

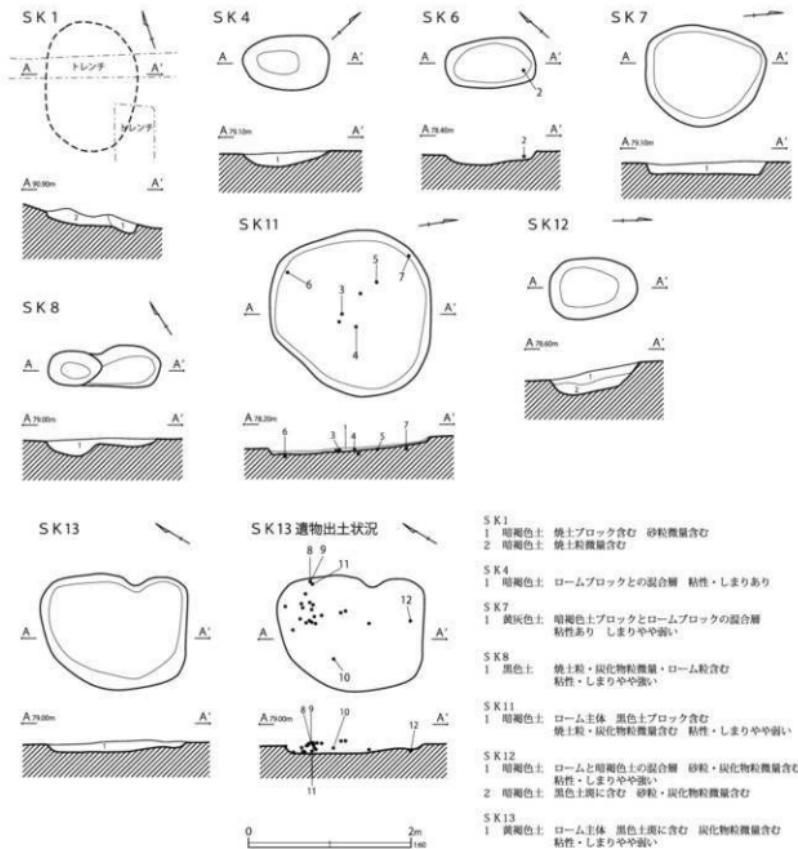
6は横長のスクレイパーである。剥片の端部に粗く調整を施して刃部としている。裏面には、原礫面が大きく残存している。

7は磨石で、ごく一部分が残存している。残存部から、断面が方形となっていたと推定される。磨面として使用された表面中央には、敲打痕が認められる。

第12号土壙（第25図）

E-5グリッドに位置する。平面形は楕円形で、規模は長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.25mである。壙底は平坦で、壁が緩く立ち上がり、椀型状となっている。時期を判別する、遺物は出土しなかった。

第13号土壙（第25図）



第25図 土壌

第5表 土壌一覧表

遺構番号	グリッド	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
SK1	P-11	—	(1.62)	(1.13)	0.18	N-17° -W		
SK4	C-4	橢円形	1.05	0.70	0.15	N-43° -E		
SK6	D-3	圓丸長方形	1.10	0.60	0.15	N-51° -W		
SK7	D-4	不整円形	1.50	1.25	0.15	N-4° -E		
SK8	D-4	不整形	1.40	0.40	0.20	N-59° -W		
SK11	D-3	不整円形	2.00	1.90	0.10	N-6° -E		
SK12	E-5	橢円形	1.05	0.75	0.25	N-2° -E		
SK13	D-4	不整形	1.90	1.30	0.10	N-6° -W		

D-4グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.90m、長軸1.30m、深さ0.10mである。墳底は皿状を呈する。遺構の北側から遺物が出土した。

第13号土壤出土遺物（第26図8～13）

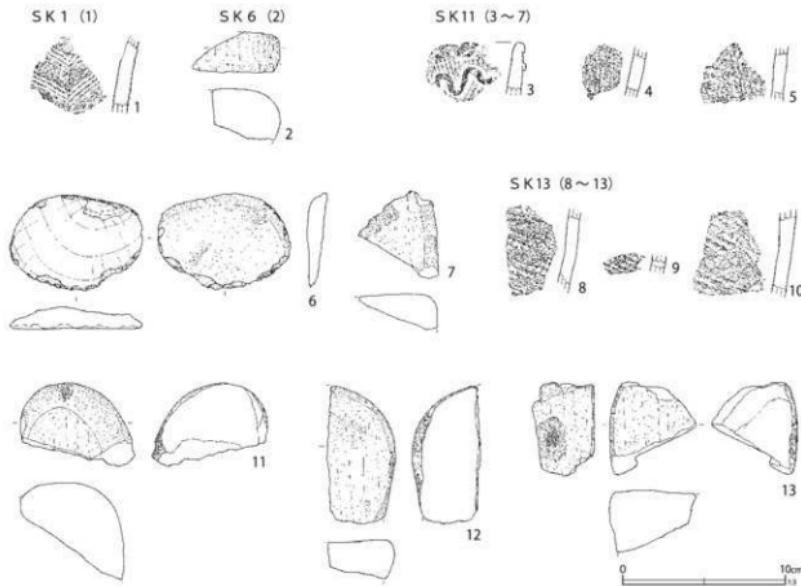
8～10は深鉢形土器の胴部破片で、同一個体である。胴部に単節R L繩文を横位施す。諸磯b式土器であろう。

11～13は出土した磨石類である。いずれも破損している。

11は厚みのある磨石で、表面の平坦面を磨面として使用している。裏面は破損している。側縁には敲打痕が認められる。

12は表面が平坦となっており、磨面として使用されている。わずかに残存する側縁には敲打痕が認められる。裏面は破損している。

13は磨石の中央破片で、残存する表面と側面が平坦となっており、磨面として使用されている。左側面の中央部分には、敲打による凹みが施されている。



第26図 土壤出土遺物

第6表 土壤出土石器観察表（第26図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
2	SK6	磨石類	砂岩	[2.5]	[5.4]	[3.2]	44.4	No.11
6	SK11	スクレイバー	砂岩	5.9	8.2	1.4	64.5	No.4 一部赤色化
7	SK11	磨石類	砂岩	[5.4]	[4.9]	[2.3]	46.9	No.7 赤色化
11	SK13	磨石類	砂岩	[5.1]	[7.1]	[6.3]	187.4	No.5 赤色化
12	SK13	磨石類	砂岩	[8.5]	[4.2]	[2.6]	113.8	No.21 一部赤色化
13	SK13	磨石類	安山岩	[5.7]	[5.3]	[3.8]	110.9	

(4) 焼土跡

被熱面が確認された遺構、もしくは、焼土粒子が一定量含まれていた遺構について、本遺跡では焼土跡とした。焼土跡は、合計25基検出され、そのうち第19・20・26号焼土跡の3基から、縄文土器片が出土した。いずれも、縄文時代の住居跡の周辺に分布する。

焼土跡は住居跡の炉跡、もしくは縄文時代早期の炉穴である可能性も想定された。しかし、調査区内より縄文時代早期の遺物は出土しているものの、焼土跡からの出土は認められなかった。

また、第6・12号焼土跡からは縄文時代以外の遺物等が出土しており、また遺物が出土しないものも多いため、時期や用途は不明であるが、焼土跡として一括して縄文時代の項にまとめて掲載することとした。

第1号焼土跡（第27図）

E-14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.25m、短軸0.40m、深さ0.18mである。底面は凹凸状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第2号焼土跡（第27図）

E-14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.60m、短軸0.66m、深さ0.25mである。底面は2段掘り状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第3号焼土跡（第27図）

G-15グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.62m、短軸0.50m、深さ0.18mである。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第4号焼土跡（第27図）

I-15グリッドに位置する。平面形は不整な楕円形で、規模は長軸3.84m、短軸2.30m、深さ0.25mである。6・7層は被熱により地山が変質した層と考えられる。1層と4層上面において赤褐色化および硬化が認められ、2段階の被熱が想定さ

れる。底面は波打っている。時期を判別する、遺物は出土していない。

第5号焼土跡（第27図）

M-14グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸0.90m、短軸0.42m、深さ0.19mである。明瞭な掘り込みは確認できなかつた。時期を判別する、遺物は出土していない。

第6号焼土跡（第27図）

M-13グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.90m、短軸1.40m、深さ0.25mである。底面は皿状を呈する。出土した炭化材1点の自然科学分析を行ったところ、平安時代前期～中期との年代が得られた。

第7号焼土跡（第27図）

M-12グリッドに位置する。北西側の一部が調査区外に位置する。平面形は楕円形と推測され、規模は長軸1.24m、短軸1.10m、深さ0.28mである。底面は平坦である。時期を判別する、遺物は出土していない。

第8号焼土跡（第27図）

M-12グリッドに位置する。平面形は隅丸長方形であろう。規模は、長軸0.78m、短軸0.65m、深さは0.30mである。底面は平坦で、壁が直に立ち上がる。時期を判別する、遺物は出土していない。

第9号焼土跡（第27図）

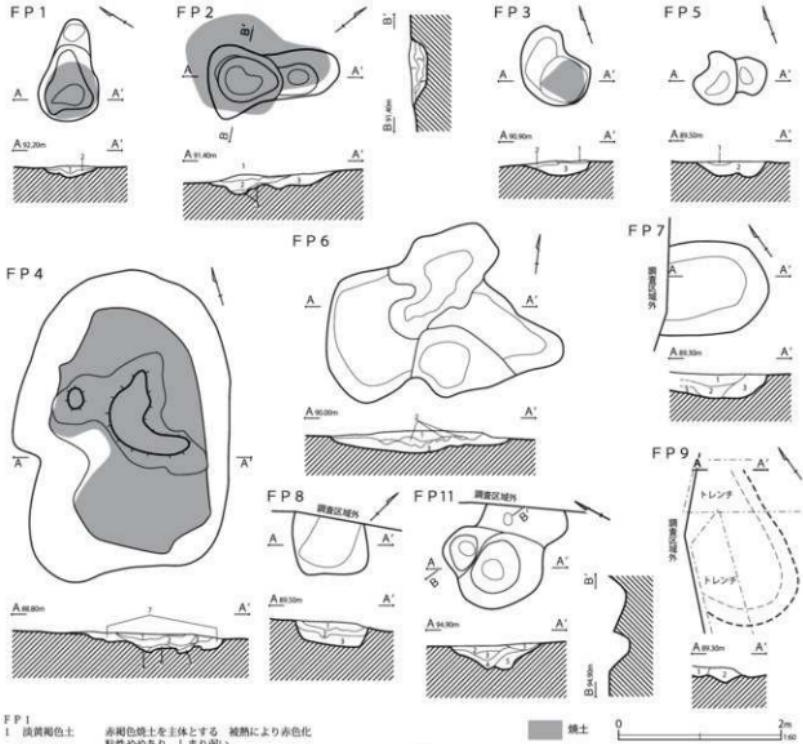
N-12グリッドに位置する。北西側の一部が調査区外に位置する。壁面の土層観察により存在が確認された。規模は、深さ0.30mである。時期を判別する、遺物は出土していない。

第11号焼土跡（第27図）

F-21グリッドに位置する。北東側の一部が調査区外に位置する。平面形態は不整形で、規模は長軸1.35m、短軸0.90m、深さ0.30mである。底面は凹凸があり、時期を判別する、遺物は出土していない。

第12号焼土跡（第28図）

F-20グリッドに位置する。第1号溝跡と重複



FP 1

1 淡黄褐色土
赤褐色土を主体とする 被熱により赤化
粘性ややあり しまり弱い
2 淡黄褐色土
被熱により一部赤化

FP 2

1 暗黄灰色土
被熱により赤褐色化 地山岩盤ブロック含む
炭化物粒微量 粘性わずか しまり弱い
2 暗黄灰色土
1層より被熱層、炭化物粒微量
岩盤粒分多量 炭化物粒、焼土粒少量
粘性やや強い しまりあり

FP 3

1 赤褐色土
被熱により赤褐色化
2 赤褐色土
1層より被熱やや弱い
3 赤褐色土
地山岩盤ブロック含む 被熱により赤褐色化

FP 4

1 にぶい赤褐色土
白色粒極めて多量 小石微量 被熱により硬化
粘性弱い しまり極めて弱い
2 赤褐色土
焼土ブロック、炭化物粒多量 白色粒中量 粘性・しまりあり
3 にぶい黄褐色土
白色粒 大量 粘性・しまりあり
4 赤褐色土
被熱により赤褐色化 炭化物粒微量 粘性・しまり弱い
5 にぶい黄褐色土
炭化物粒多量 ローム粒微量 粘性・しまりあり
6 明黄褐色土
焼土粒微量 粘性弱い しまりあり
7 灰黄褐色土
岩盤等のブロック多量 炭化物粒微量
粘性・しまりあり

FP 5

1 褐色土
被熱により赤褐色化 炭化物粒ごく微量
粘性やや弱い しまりあり
2 褐色土
ローム粒少量 烧土粒、炭化物粒ごく微量
粘性やや弱い しまりあり

FP 6

1 暗赤褐色土
炭化物・炭化物粒・焼土ブロック含む
粘性ややあり しまり弱い
2 暗灰褐色土
1層と2層土の接土層 粘性あり しまりややあり
3 暗黄褐色土
炭化物粒微量 烧土粒微量 粘性やや強い しまりやや弱い

FP 7

1 赤褐色土
燒土を主体とする 褐褐色土に含む 炭化物粒微量
粘性弱い しまりやや弱い
2 明褐色土
燒土ブロック含む 炭化物粒微量 粘性強い しまりやや弱い
3 明褐色土
燒土粒微量 粘性強い しまりやや弱い

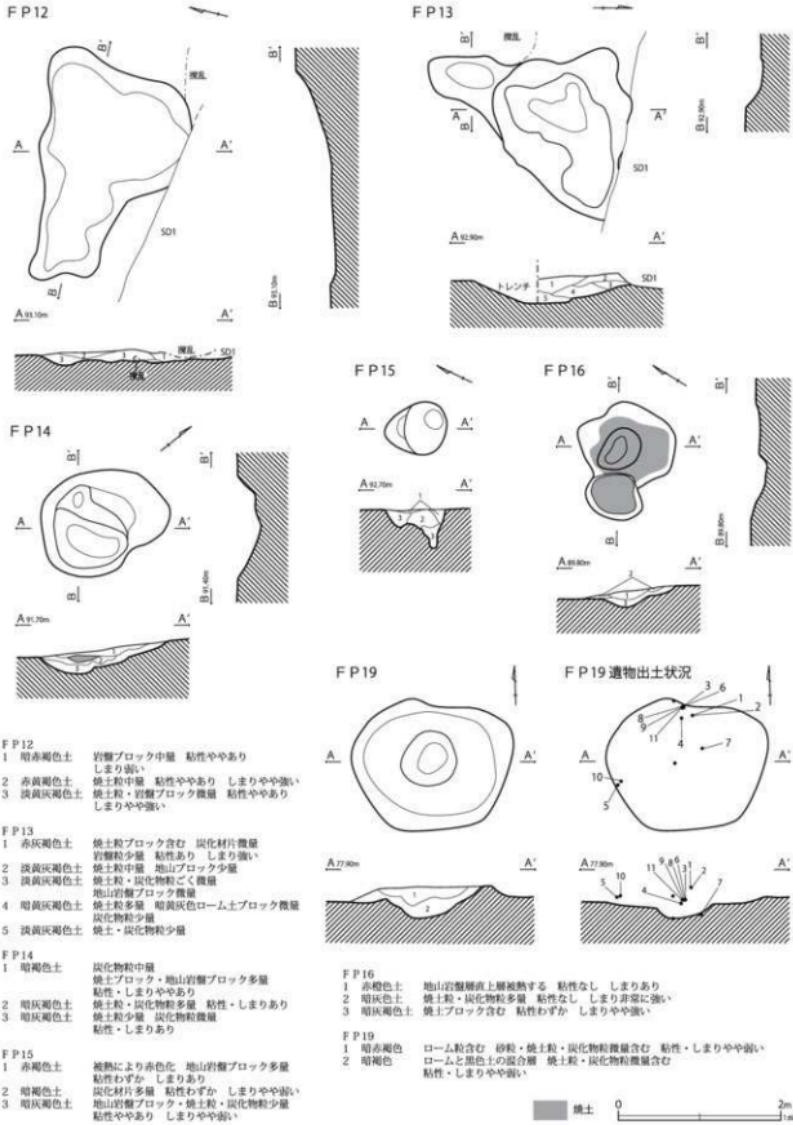
FP 8

1 明褐色土
As-Aが被覆する 烧土ブロック、炭化物粒少量
黄色土ブロック微量 As-A微量 粘性・しまりあり
2 暗褐色土
炭化物粒微量 烧土ブロック面に含む
3 黄褐色土
烧土粒・炭化物微量

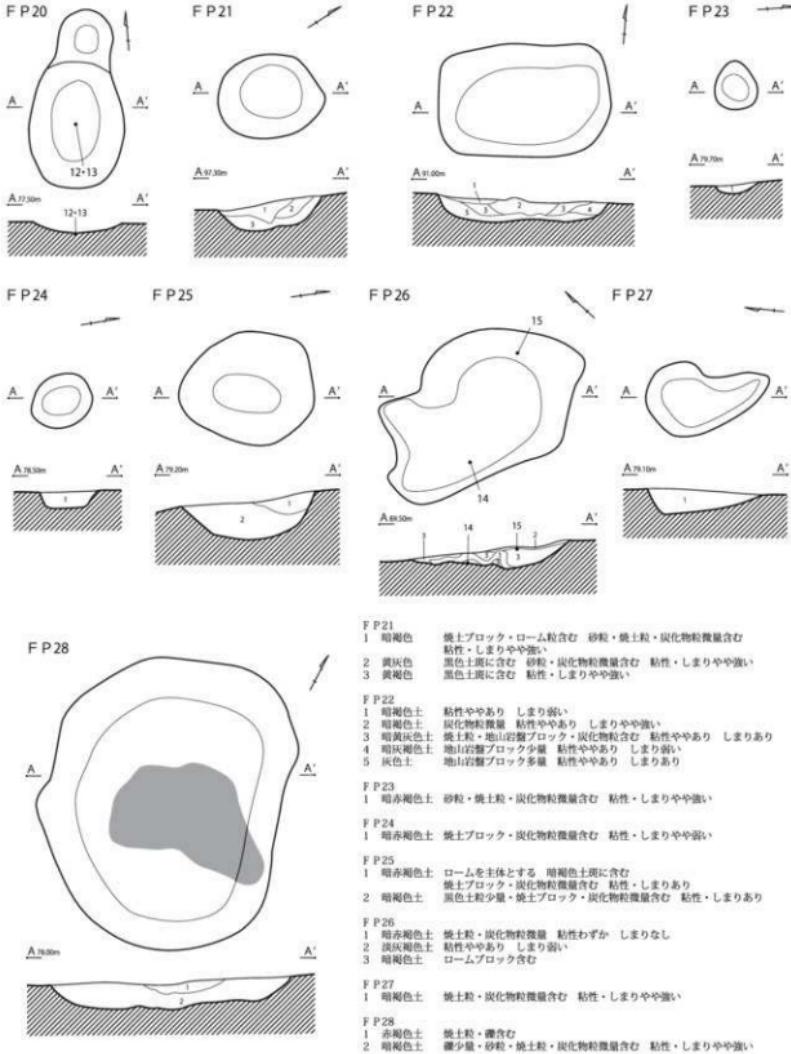
FP 9

1 明褐色土
燒土を主体とする 粘性・しまりあり
2 暗褐色土
燒土粒微量 粘性やや強い しまりやや弱い
3 暗褐色土
被熱により赤褐色 烧土粒多量 炭化物粒微量
粘性ややあり しまりやや強い
4 淡黄褐色土
焼土粒中量 炭化物粒微量 粘性ややあり しまりやや強い
5 暗黄灰褐色土
焼土粒子・炭化物粒微量 粘性あり しまりややあり

第27図 焼土跡（1）



第28図 焼土跡（2）



第29図 烧土跡 (3)

し、本遺構の方が古い。平面形は不整形で、規模は長軸2.87m、短軸0.60m、深さ0.31mである。底面は波打っている。近世の石材が出土している。遺物は中近世のグリッド遺物として掲載した。

第13号焼土跡（第28図）

F-20グリッドに位置する。第1号構跡と重複し、本遺構の方が古い。平面形は不整形で、規模は遺存値で長軸0.04m、短軸0.60m、深さ0.31mである。底面は緩い凹凸がある。時期を判別する、遺物は出土していない。

第14号焼土跡（第28図）

F-14グリッドに位置する。平面形はやや不整な円形で、規模は長軸1.60m、短軸1.25m、深さ0.25mである。底面は凹凸状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第15号焼土跡（第28図）

D-14グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸0.75m、短軸0.54m、深さ0.49mである。底面はピット状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第16号焼土跡（第28図）

C-12グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.45m、短軸0.72m、深さ0.20mである。底面は緩く窪む。時期を判別する、遺物は出土していない。

第19号焼土跡（第28図）

E-4グリッドに位置する。西尾根端部においてピットが多数分布する範囲からわずかに外れた、南に向かって傾斜する斜面上に立地する。平面形は不整円形で、規模は長径1.90m、短径1.50m、深さ0.37mである。底面は中央部に、浅いピット状の窪みを有する。覆土第1層に、焼土粒および炭化物粒が微量含まれていた。

出土遺物より、縄文時代前期後葉諸磯b式期に属するものと考えられる。

第19号焼土跡出土遺物（第30図1～11）

1は若干内湾して開く波状口縁を呈し、肥厚す

る口唇部に押圧状の刻みを施す。口縁部には波状に沿って4段の爪形文を施す。2～7は口縁部が開く深鉢形土器の胴部破片で、前期諸磯b式の爪形文土器である。8は口唇部が内側に変形する諸磯b3式であろう。10、11は縄文施文土器で、10は非結束の羽状縄文で、末端結節処理の回転文が施文される。11はR L縄文の横位施文である。

第20号焼土跡（第29図）

E-3グリッドに位置する。第19号焼土跡の南西方向に隣接する。西尾根端部の南に向かって傾斜する斜面上に立地する。平面形は不整形で、規模は長軸2.20m、短軸0.65m、深さ0.08mである。南北に長い梢円形の掘り込みの北側に円形でピット状の掘り込みがある。掘り込みの底面に被熱面は確認されなかった。

第20号焼土跡出土遺物（第30図12、13）

12は先細り状の口縁部が開き、口縁部に斜位の集合細沈線を施す。13はR L縄文を施文する。

第21号焼土跡（第29図）

D-5・6グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.30m、短軸1.03m、深さ0.31である。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第22号焼土跡（第29図）

Q-13グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、規模は長軸2.10m、短軸1.38m、深さ0.25mである。底面は皿状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第23号焼土跡（第29図）

D-5グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長軸0.60m、短軸0.50m、深さ0.10mである。底面は浅い窪み状を呈する。時期を判別する、遺物は出土していない。

第24号焼土跡（第29図）

D-3グリッドに位置する。平面形は梢円形で、規模は長軸0.80m、短軸0.65m、深さ0.20mである。底面は平坦である。時期を判別する、遺物

は出土していない。

第25号焼土跡（第29図）

D-4グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸1.65m、短軸1.40m、深さ0.45mである。底面は緩く窪む。時期を判別する、遺物は出土していない。

第26号焼土跡（第29図）

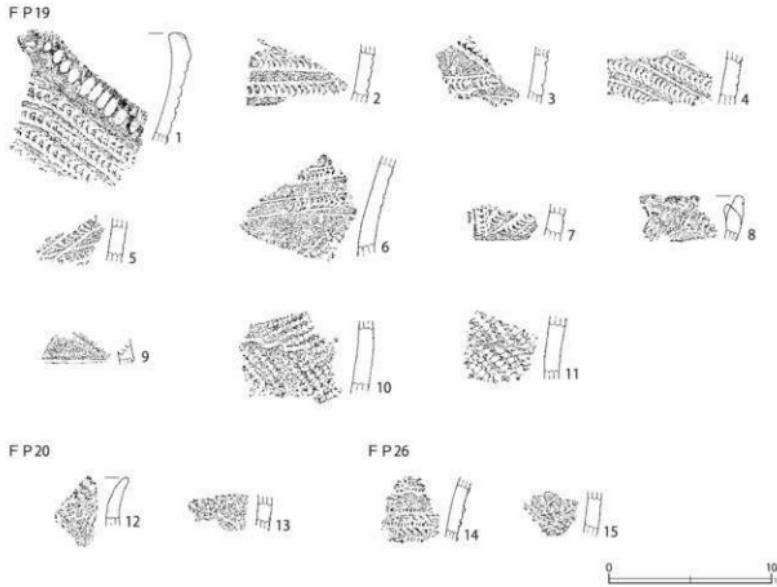
O-11グリッドに位置する。南尾根における

第2・5号住居跡の北西方向に位置し、西側に向かって傾斜する斜面上に立地する。周辺におけるピットの分布はごくわずかである。

平面形は不整形で、規模は長軸2.75m、短軸1.33m、深さ0.25mである。第3層中に焼土粒および炭化物粒がわずかに含まれていた。出土遺物より、縄文時代前期終末に属すると考えられる。

第7表 焼土跡一覧表

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
F P 1	E-14	1.25	0.40	0.18	F P 11	F-21	1.35	0.90	0.30	F P 21	D-6	1.30	1.03	0.31
F P 2	F-14	1.60	0.66	0.25	F P 12	F-20	2.87	0.78	0.27	F P 22	Q-13	2.10	1.38	0.25
F P 3	G-15	1.02	0.50	0.18	F P 13	F-20	(2.70)	0.60	0.31	F P 23	D-5	0.60	0.50	0.10
F P 4	H-I-15	3.84	2.30	0.25	F P 14	F-14	1.60	1.25	0.25	F P 24	D-3	0.80	0.65	0.20
F P 5	M-14	0.90	0.42	0.19	F P 15	D-14	0.75	0.54	0.49	F P 25	D-4	1.65	1.40	0.45
F P 6	M-13	2.90	1.40	0.25	F P 16	C-12	1.45	0.72	0.20	F P 26	O-11	2.75	1.33	0.25
F P 7	M-12	0.24	0.10	0.28	F P 19	E-4	1.90	1.50	0.37	F P 27	D-4	1.52	0.65	1.30
F P 8	M-12	0.78	0.65	0.30	F P 20	E-3	2.20	0.65	0.08	F P 28	E-6	3.66	2.87	0.32
F P 9	N-12	—	—	0.30										



第30図 焼土跡出土遺物

第26号焼土跡出土遺物（第30図14、15）

14は地文R L縄文に横位の結節浮線文を4本施文する十三菩提式土器である。15は単節R L縄文を横位施文する。

第27号焼土跡（第29図）

D-4グリッドに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.52m、短軸0.65m、深さ0.30mである。底面は、傾斜を持つ平坦面を呈する。時期を判断する、遺物は出土していない。

第28号焼土跡（第29図）

E-6グリッドに位置する。平面形は不整円形で、規模は長軸3.60m、短軸2.40m、深さ0.30mである。1層が被熱面に相当する。A-A'セクションラインより南側は搅乱によって壊されており、本遺構由来と思われる焼土ブロックや炭化物粒が二次堆積していた。

（5）遺物包含層

遺物包含層は、西尾根および南尾根において確認された。西尾根において確認されたものをA区遺物包含層、南尾根において確認されたものをB区遺物包含層とした。

A区遺物包含層は、西尾根端部の西側斜面と南側斜面に形成されていた（第31図）。両斜面の遺物の分布状況を比較すると、西側斜面はややまばらな状況であるのに対して、南側斜面は密に分布する状況である。特に、第19・20号焼土跡周辺への集中が著しく、調査当初住居跡の存在も検討されたが、住居跡とは認定できなかった。南側斜面に面して第3・4号住居跡が立地しており、遺物包含層にはこの住居跡より流出した遺物が含まれているものと想定された。

B区遺物包含層は、分布の濃淡はあるものの、南尾根を囲む斜面地全域に形成されていた（第32図）。南尾根先端部の南西側の斜面では遺物がまばらで、西側斜面と南東側斜面では密に分布していた。なかでも、①第2・5号住居跡の西から南

西部周辺と、②東西のTグリッドライン周辺に遺物の集中が確認できる。①については、第2・5号住居跡からの流出した遺物によって、遺物包含層が形成されたものと推察される。②については、周辺に住居跡等の遺構は確認できなかったが、かつては②周辺の頂部に縄文時代の遺構が存在した可能性に留意しておきたい。

A区遺物包含層出土縄文土器（第33～35図）

A区出土の縄文時代の土器群は、前期を主体にして早期から中期までが含まれている。時代で群分けし、型式を類別して説明を加える。

第I群土器（第33図1～11）

早期後葉の条痕文系土器群を一括する。胎土に纖維を少量含み、内外面に貝殻腹縁による条痕整形を施す土器群である。1は刺突文を施した低隆帶で口縁部文様帶を区画するもので、茅山下層の新しい段階から茅山上層式の古い段階に位置付けられよう。2～4は口縁部破片で、2、3の口唇部には刻みを施し、4は浅い沈線を巡らす。4は時期が古くなる可能性もある。5～10は胴部破片で、11は小さな平底を呈する底部破片である。

第II群土器（第33図12～54、第34図55～106、第35図107～139）

前期の土器群を一括する。

第1類（12～14）

前期中葉の纖維土器である、黒浜式土器を一括する。器壁に纖維をやや多めに含み、単節R L縄文を横位施文する。

第2類（15～23）

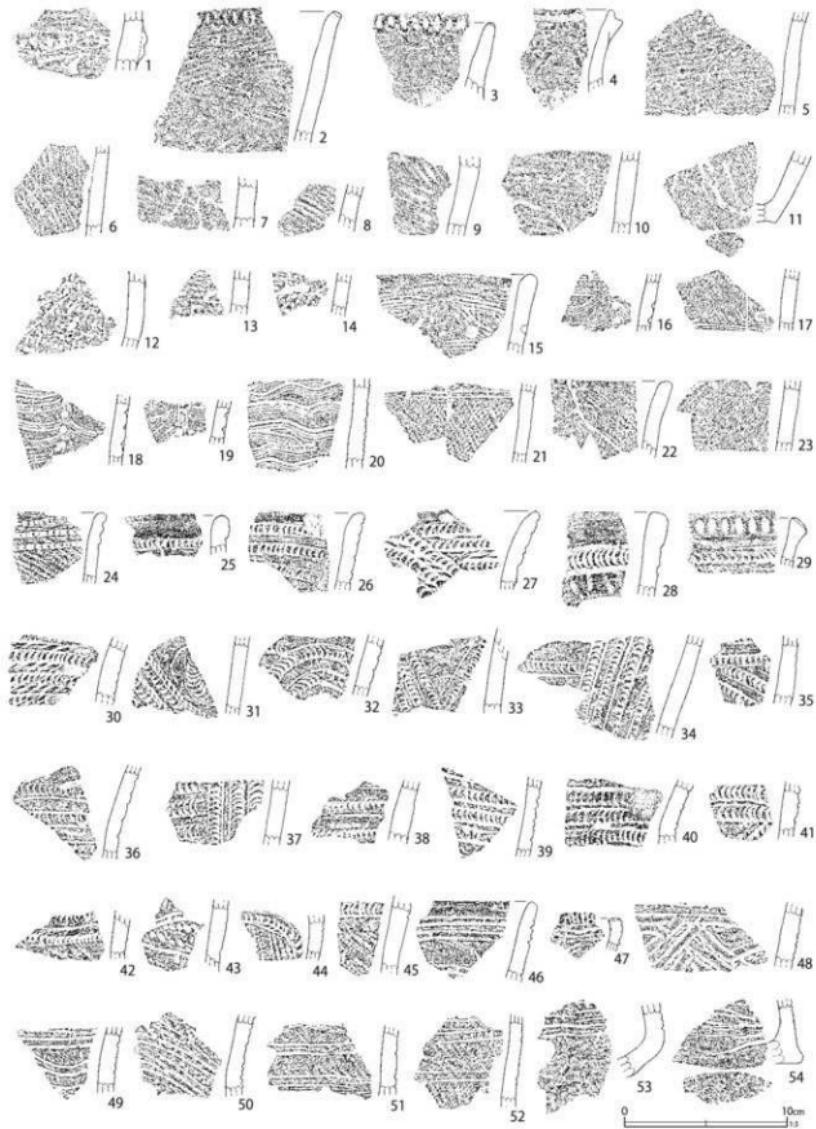
前期後半の無纖維土器である、諸磯a式土器を一括する。15～20は先端の潰れた纖維の茎状の施文具による条線文で、横位多段区画を施し、沈線間の円形刺突文や、円形刺突文列を垂下して文様帶を縦位区画し、肋骨文状のモチーフを施文する。15、20は縦位区画文が無いもので、横位展開のモチーフを施文する。15、17とも地文にR L縄文を施文し、17は「米」字状のモチーフを構成する



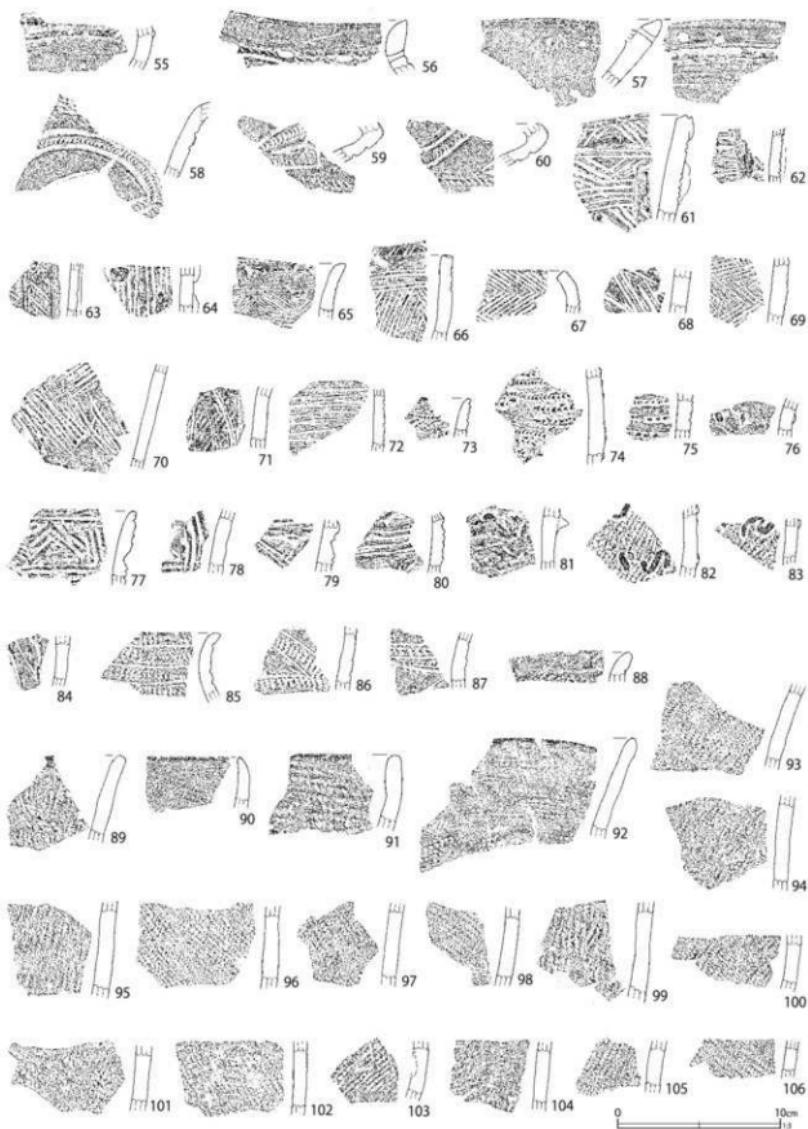
第31図 A区遺物包含層遺物出土状況



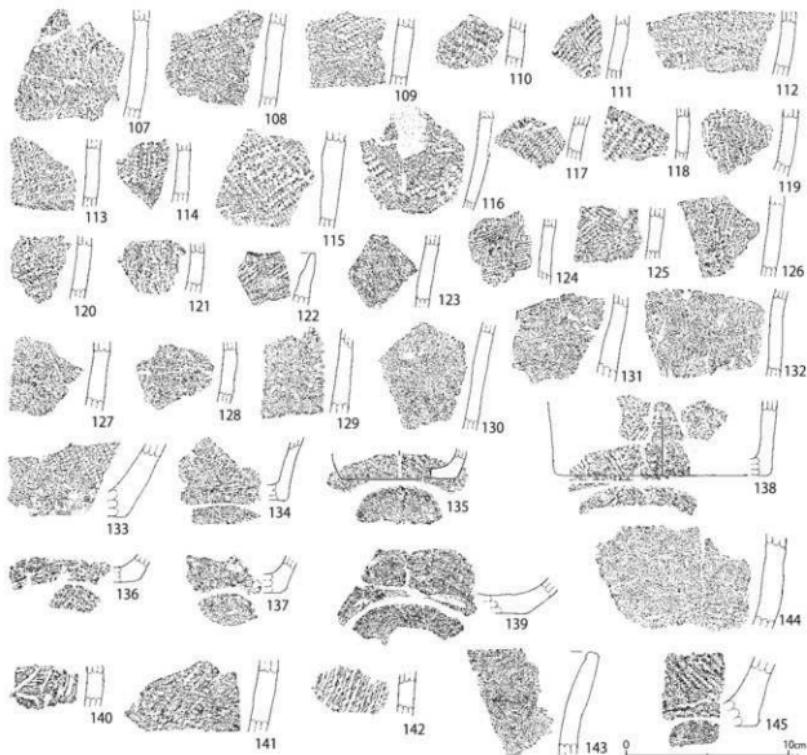
第32図 B区遺物包含層遺物出土状況



第33図 A区遺物包含層出土遺物（1）



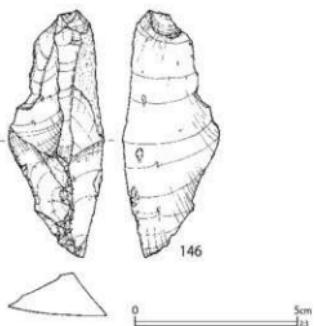
第34図 A区遺物包含層出土遺物（2）



第35図 A区遺物包含層出土遺物（3）

可能性もある。21は細い平行沈線で胴部を区画し、下半部に短節R L繩文を施す。原体は1段3本捺りの可能性が高い。22、23は細かな繩文を施すことから、諸磯a式の繩文土器と判断した。第3類（24~45）

諸磯b式を中心とした、諸磯式前半段階の爪形文土器を一括する。大半は口縁部が開く深鉢形土器で、胴部を区画して上半部に爪形文のモチーフ、下半部に繩文を施す土器群である。直線的に交わるモチーフと、曲線的な渦を巻くモチーフが組合っている。爪形文は比較的幅広で、押引状に平行沈線間に施すものである。24は口縁



第36図 A区遺物包含層出土遺物（4）

部に3条の細い爪形文を巡らしており、刺突文状の爪形文であることから諸磯a式からb1式にかけての時期に比定されよう。さらに、27、30は爪形文間に斜位の刻みを施しており、浮線文の前段階の様相を示していよう。また、56～60は脣部が大きく屈曲する円盤状の有孔浅鉢で、モチーフを区画する平行沈線内に爪形文を施す。

第4類 (46～54)

諸磯b式土器の沈線文土器を一括する。46は口縁部が開く深鉢形土器で、幅広平行沈線で口縁部を区画する。48も幅広の平行沈線で横帯区画内に鋸歯状や曲線のモチーフを施すものである。両者は爪形文土器と同時期のものと思われ、b1式からb2式にかけた土器群であろう。47は口部

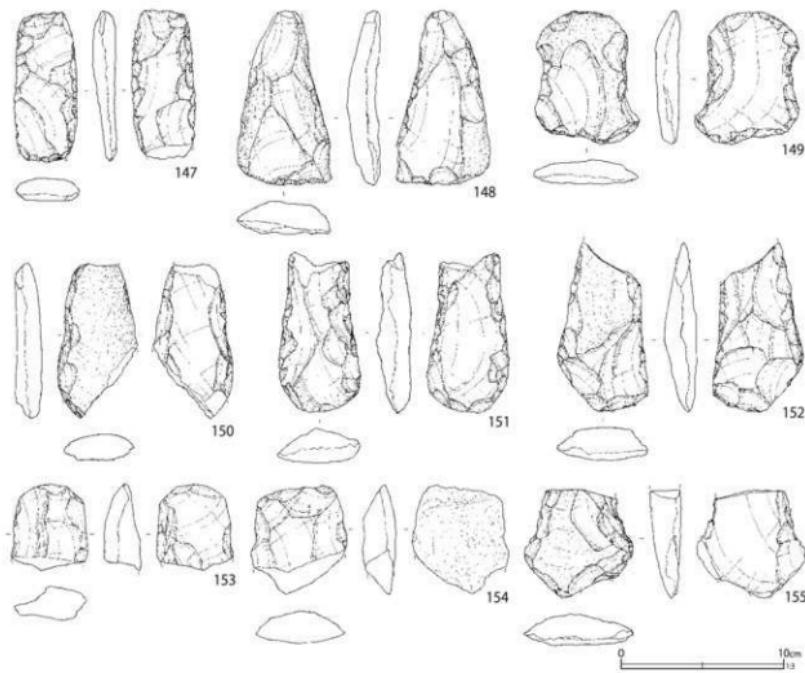
が内湾するキャリバー形土器で、口縁部に平行沈線で弧線文を描いている。口唇部上に刻みを施す諸磯b2式である。

49～54は脣部の地文網文上の横帯区画に49は弧状のモチーフ、50は斜行する平行沈線文を描いており、53は屈曲する底部、54は突出する底部に平行沈線を施す。諸磯b2式に比定されよう。

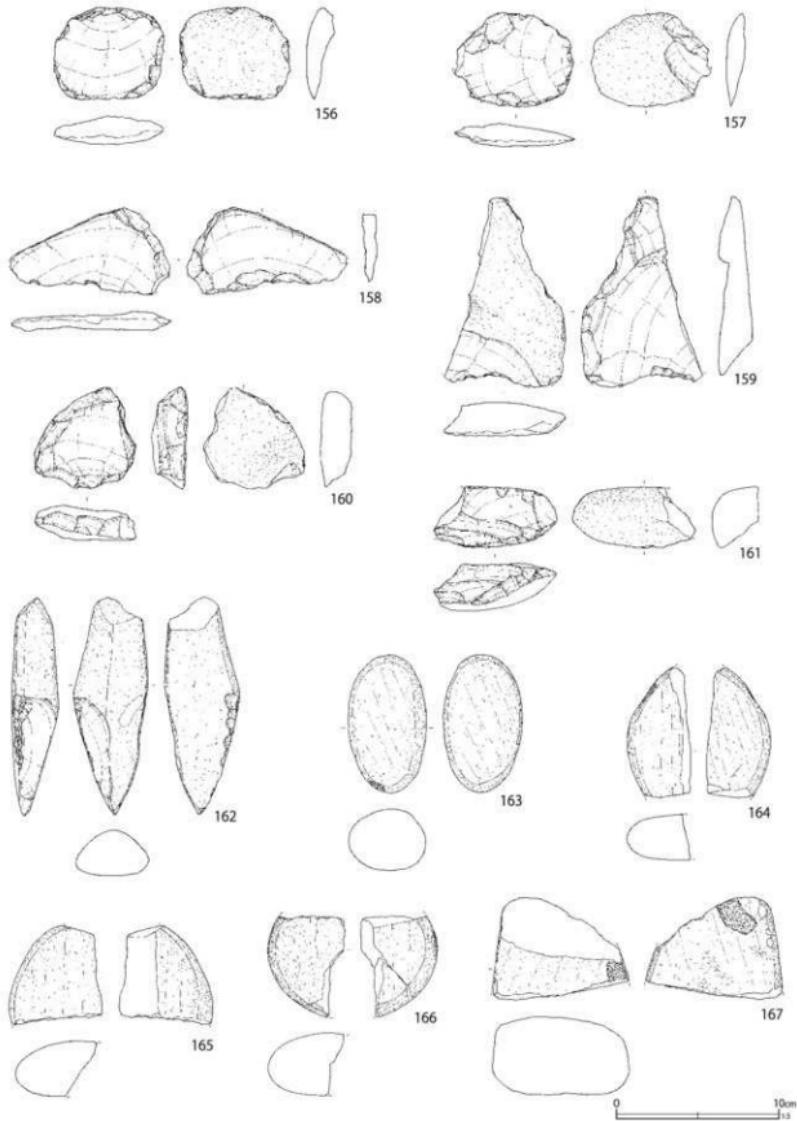
第5類 (55)

浮線文土器を一括する。1点のみの出土であるが53に類似する底部形態で、底部への移行部分に2本の浮線文を施す。浮線文上には斜位の刻みを施している。第4類と同時期で、諸磯b2式に比定されよう。

第6類 (61～72)



第37図 A区遺物包含層出土遺物（5）



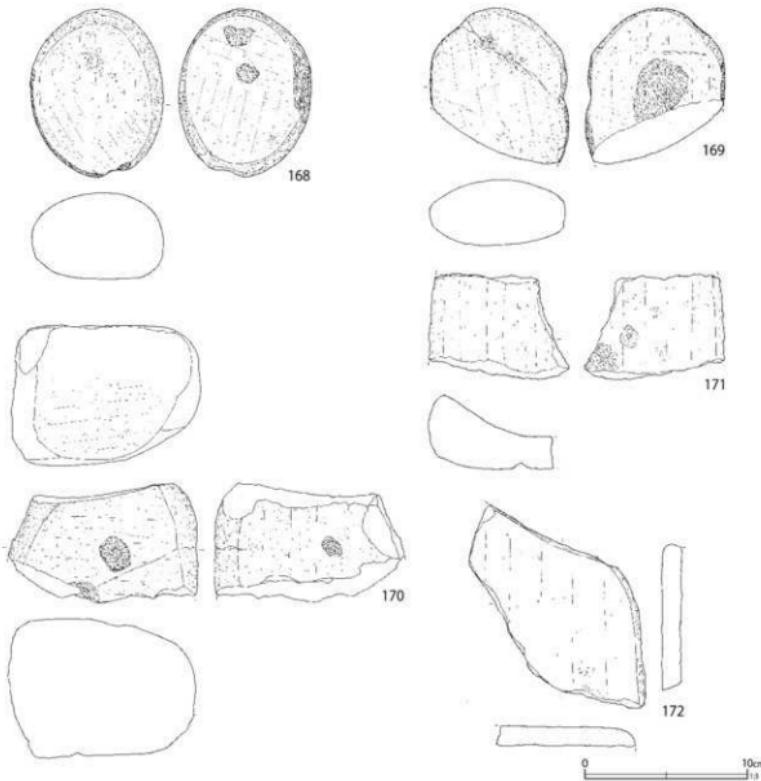
第38図 A区遺物包含出土遺物（6）

諸磯c式土器を一括する。61～64は貼付文土器である。61は口縁部の開く深鉢形土器で、口縁部が段帯状に肥厚し、鋸歯状の沈線文を施文する。胴部は平行沈線で幅狭な横帯区画を施し、鋸歯状文を描いている。また、横位の区画線上には縦位の瘤状貼付文を施文している。62、63は縦位棒状の貼付文を施文するもので、62は横位の沈線地文上に、63は斜位の沈線地文上に貼付している。64は縦位の平行沈線地文上に円形の貼付文をランダムに施文するものである。

65～72は沈線文の土器群である。65は外反する

口縁部に、66は若干内湾しながら開く口縁部に集合沈線で鋸歯状文を施文する。67は内湾する口縁部に、横羽状の集合沈線文を施文する。68～70は横羽状の沈線文を施文する胴部破片である。71は地文縄文上に紡錘文状の沈線文を垂下施文している。72は横位の条線文状の平行沈線文を施文するものである。

73、74は結節浮線文土器である。73は外反して開く口縁部に細かな結節浮線文を横位に施文して区画し、斜位の集合結節浮線文を組み合わせている。74は胴部破片で、途切れながらの横位多条の



第39図 A区遺物包含出土遺物（7）

第8表 A区遺物包含層出土石器観察表 (第36～39図)

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
146	A区	剥片	黒曜石	7.6	3.0	2.2	24.0	No.1402
147	A区	打製石斧	ホルンフェルス	[9.2]	3.9	1.4	52.6	No.1041 風化
148	A区	打製石斧	結晶片岩	[10.7]	5.8	2.1	143.4	No.1183 一部黒色化
149	A区 D-14	打製石斧	ホルンフェルス	8.2	6.4	1.5	84.9	
150	A区	打製石斧	頁岩	[9.5]	4.9	1.7	89.9	No.1150 黒色化
151	A区	打製石斧	ホルンフェルス	[9.8]	5.1	2.1	114.9	No.1229 一部黒色化
152	A区	打製石斧	ホルンフェルス	[10.4]	5.6	2.0	113.3	No.1057 赤色化 一部黒色化
153	A区 E-5	打製石斧	ホルンフェルス	[5.3]	4.7	2.3	56.4	一部黒色化 風化
154	A区	打製石斧	ホルンフェルス	[6.3]	6.2	2.2	93.9	No.1344 風化
155	A区 E-4	打製石斧	ホルンフェルス	[6.6]	6.7	[1.9]	96.4	
156	A区	スクレイパー	ホルンフェルス	5.7	6.8	1.7	72.1	No.1362
157	A区	スクレイバー	砂岩	5.8	7.4	1.4	54.9	No.1171
158	A区	スクレイバー	ホルンフェルス	5.4	[9.8]	1.2	57.1	No.1210 風化
159	A区	スクレイバー	ホルンフェルス	[11.7]	[7.5]	2.1	151.5	No.1296 風化
160	A区	礫器	ホルンフェルス	6.2	6.3	2.2	101.9	No.1257 風化
161	A区	礫器	ホルンフェルス	3.7	[7.6]	2.9	94.7	No.1400
162	A区	礫器	緑色岩	[13.4]	4.6	2.8	190.5	No.1111
163	A区	磨石	安山岩	8.5	4.9	3.9	220.3	No.1082
164	A区 E-5	磨石	砂岩	[8.0]	[3.9]	2.9	121.7	赤色化
165	A区	磨石	砂岩	[6.1]	[5.8]	3.4	132.4	No.1439
166	A区 D-2	磨石	砂岩	[6.2]	[4.7]	3.9	106.9	赤色化
167	A区	磨石	砂岩	[6.3]	[8.5]	[4.9]	313.5	No.1112 赤色化
168	A区	磨石	閃錐岩	10.3	8.2	5.5	683.1	No.1442
169	A区	磨石	砂岩	[9.6]	8.6	4.1	440.7	No.1211
170	A区	磨石	安山岩	[7.4]	[11.7]	[8.7]	1107.9	No.1212 赤色化
171	A区	石皿	安山岩	[6.5]	[8.7]	4.6	266.4	No.1246 赤色化 黒色化
172	A区	石皿	隕石片岩	[12.6]	[10.9]	[1.3]	224.3	No.1415

結節浮線を施文するものである。いずれも刺突文の幅が浮線文よりも狭いことから、諸磯c式～十三菩提式にかけての時期に位置付けられるであろう。

第7類(75～80)

前期終末の十三菩提式土器を一括する。75は結節沈線文土器である。やや間隔を空けた押引結節沈線文を施文するもので、地文は無文である。

76は爪形文で表面を摘まみだし、豆粒状の貼付文を作出するものである。「ハ」字状ではなく、單方向の押引文状に施文を行っている。

77～80は沈線文のモチーフ間を印刻で刻る土器群である。77～80は同一個体と思われる。77は口縁部が外反気味に開く器形で、口縁部に横位の沈線で幅狭な横帯区画を施し、鋸歯状区画と縦位区画を組み合わせたモチーフを構成し、区画内を浅く抉っている。78～80は胴部破片で、78は縱位区画部分、79は三角区画部分、80は横位区画部分で

ある。

第8類 (81～83)

東北地方の大木5式相当の土器群である。81はやや断面三角形状の太い隆带を摘んで、波状文を構成するものである。地文に単節R L綿文を横位施文する。十三菩提式に伴う在地系の大木5b式土器であろう。82、83は同一個体で、地文L R綿文上に、断面の丸い浮線文を施文するものである。諸磯b式の新しい段階から諸磯c式にかけて並行する、大木4式から大木5式に比定されよう。

第9類 (84)

東関東地方の浮島式系の土器群である。84は、工具は不明であるが、ロッキング文を施文するもので、諸磯b式に伴う浮島式系土器である。

第10類 (85～88)

東関東地方の興津式系土器である。平行沈線間に、貝殻腹縁ではなく、細い半截竹管状工具を2

本束ねた施文具で、連続押引刺突文を施文するものである。85は口縁部が外反して開き、胴部が張る器形になるものと思われる。88は有段状の口縁部破片である。LR縄文を施文する。

第11類（89～139）

前期の文様が施文されない土器群を一括する。89～114は横位施文の斜縄文を施文する土器群で、大半は諸磯b式であろう。91、92は横走縄文を施文しており、諸磯b式の新しい段階か、諸磯c式に伴うものであろう。115～118は羽状縄文を施文するもので、原本末端の結節部の回転文が施文されている。122～126は前期終末の土器群で、無節の斜縄文や無節の結束羽状縄文を施文するもので、126は無節の結束縄文の縦位施文土器である。127～132は前期後半の無文土器である。133～139は底部破片で、138は結束羽状縄文の縦位施文で、前期終末に位置付けられよう。

第Ⅲ群土器（第35図140～144）

中期の土器群である。140は勝坂式土器、141はRL縄文の縦位施文、142は撚糸文L、145は0段多条RL縄文の縦位施文、143、144は、無文土器である。いずれも勝坂式に位置付けられよう。

A区遺物包含層出土石器（第36～39図）

第36図146、第37図147～155、第38図156～167、第39図168～172は出土した石器である。

146は黒曜石製の剥片である。質の良い石材を使用している。使用の痕跡は認められなかつた。

147～155は打製石斧である。大部分が破損品である。149は完形品であるが、刃部側の欠損後に刃部を再加工したと考えられる。

156～159はスクレイバーである。つまみ部を有するなど精緻なものはなく、剥片の一部を加工して刃部を作り出している。

160～162は礫器である。自然礫を加工して刃部を作り出すものを礫器とした。162は縦長の礫を利用したものである。

163～170は磨石類で、磨面の他敲打痕や、敲打

による凹みを有するものをここに含めた。そのほとんどが、破損しており被熱しているものが多くを占めている。

172、173は石皿である。ごく一部のみが残存している。172は裏面に漏斗状の凹みと、敲打痕が認められる。

B区出土縄文土器（第40～43図）

B区からは、A区と同様に前期の諸磯式土器を中心として、早期から後期初頭にかけての土器群が出土している（第40～43図1～187）。

第I群土器（第40図1～13）

早期後葉の条痕文系土器群である。器壁に少量の織維を含み、貝殻腹縁を引きずって器面調整を行った条痕文を残す土器群である。1は有文土器で、太い凹線状の沈線で襷状の区画を施し、さらに異方向の集合沈線を区画内に充填施文するものである。野島式に比定される。2～10は条痕文土器の胴部破片で、11、12は底部付近の破片、13は尖底部の破片である。

第II群土器（第40図14～51、第41図52～96、第42図97～144）

前期の土器群を一括する。

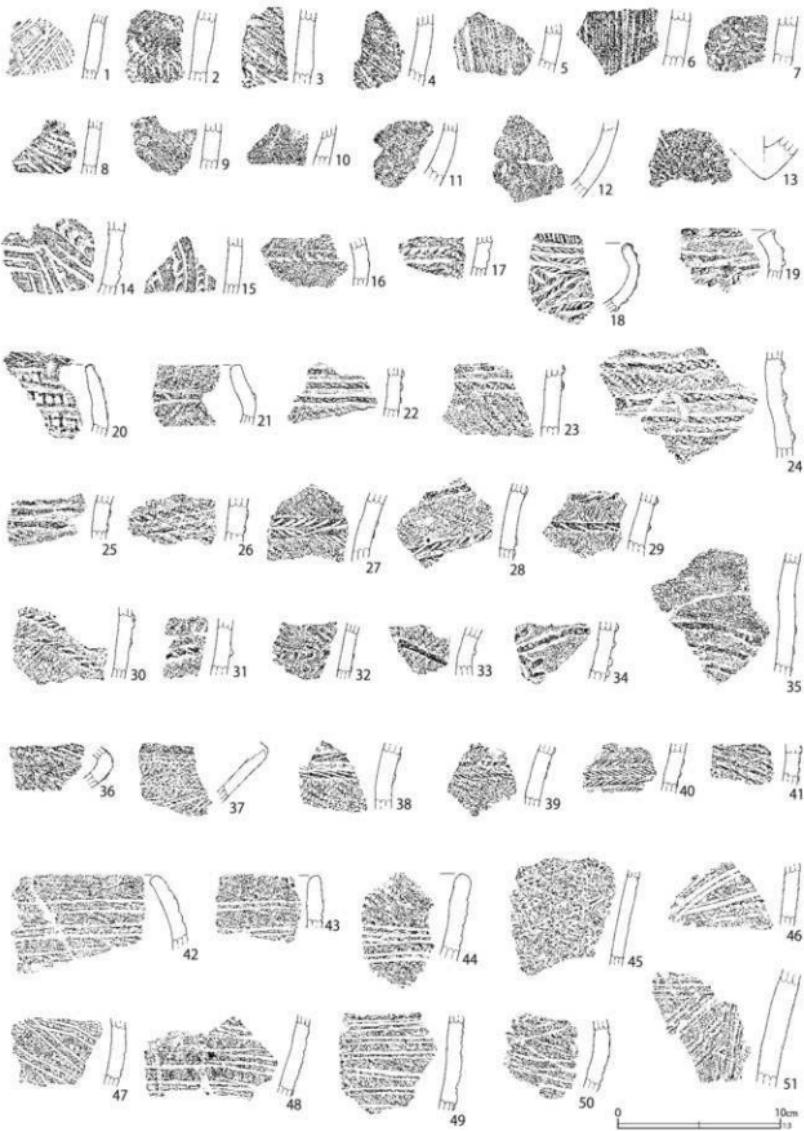
第1類（14～17、89～94）

諸磯b式の爪形文土器を一括する。14は平行沈線と爪形文を施文する。15、16は爪形文、17は地文RL縄文上に爪形文を施文する。諸磯b1式末からb2式の古段階に位置付けられる。

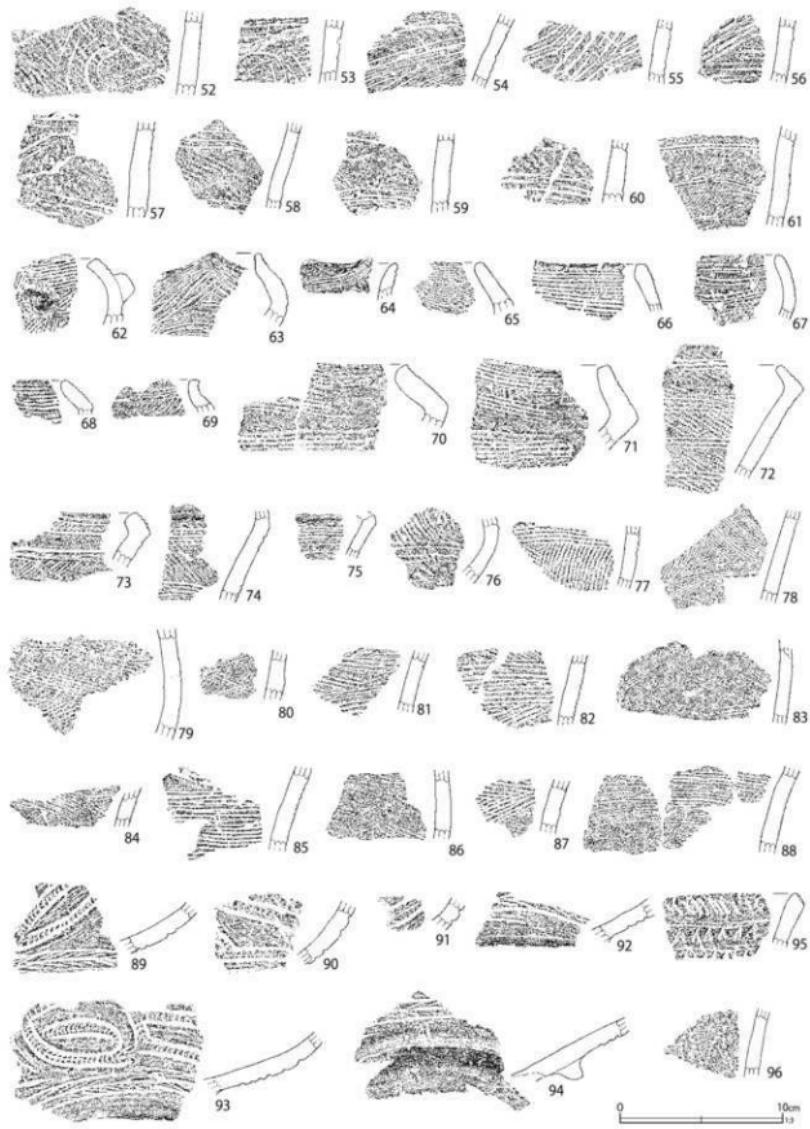
89～94は扁平な円盤形をした浅鉢で、変形木葉文や渦巻文を爪形文で施文する。有孔浅鉢の可能性がある。

第2類（18～41）

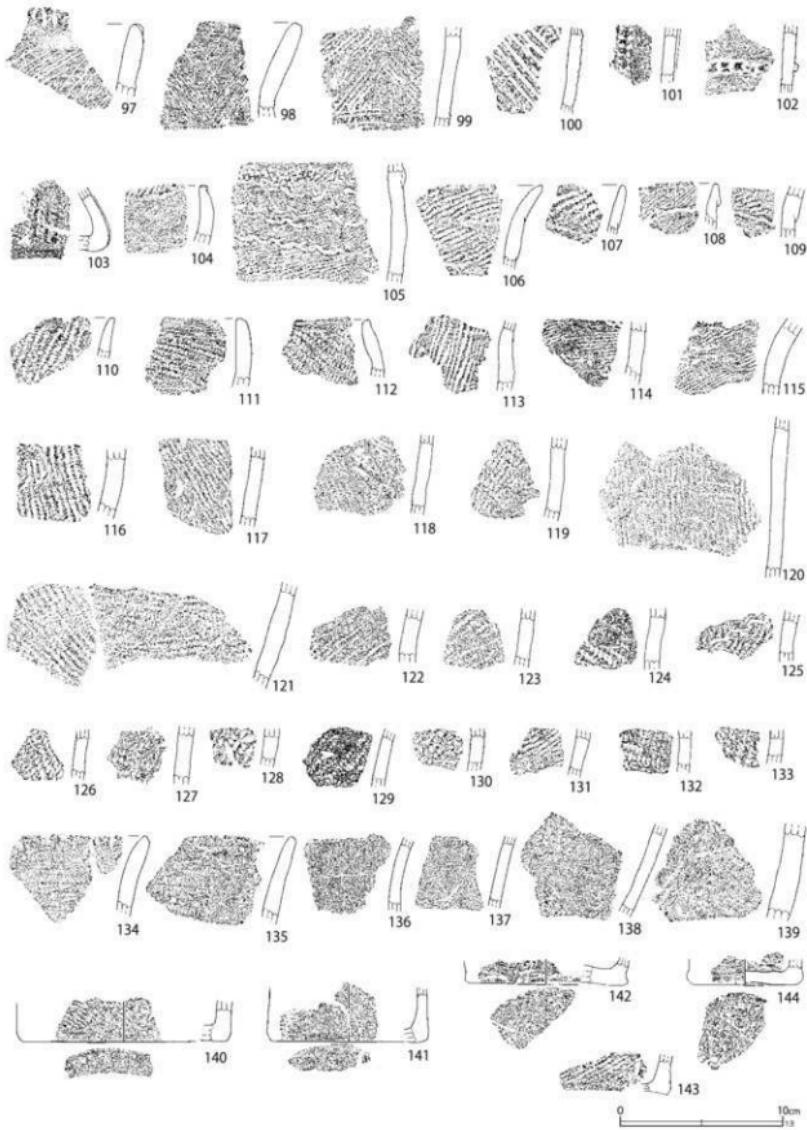
諸磯b式の浮線文土器を一括する。①やや太めの浮線文に斜位の刻みを施すもの（18、21、27～32）、②浮線文上に縄文を施文するもの（19、22～26）、③加工を施さない浮線文（20、33～35）のもの、④非常に扁平な浮線文に細かな斜位の刻みを施すもの（36～41）がある。概ね、①、②は



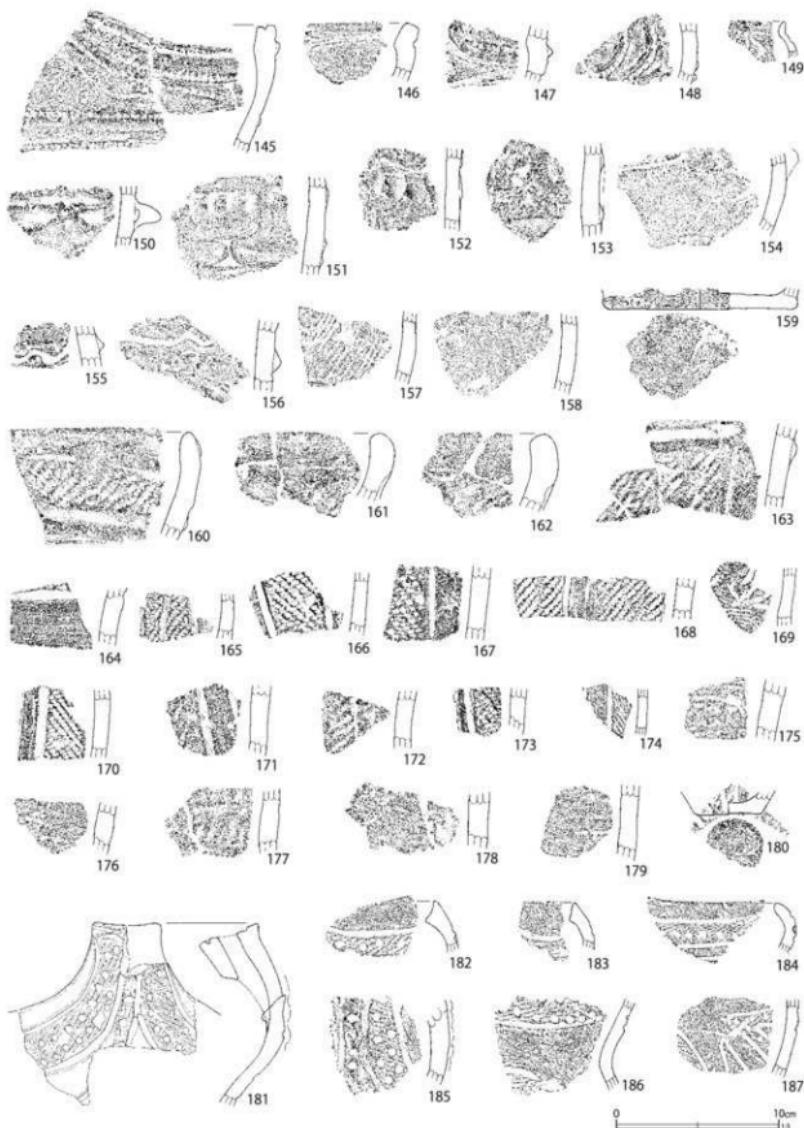
第40図 B区遺物包含層出土遺物（1）



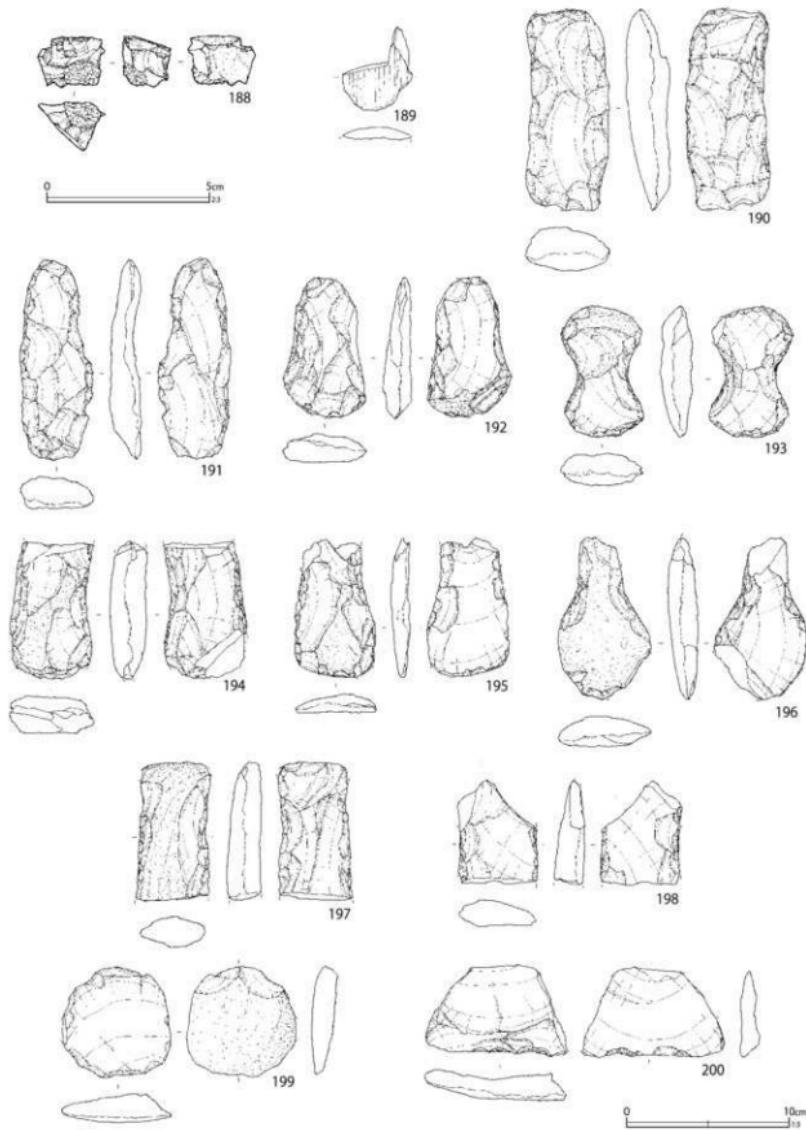
第41図 B区遺物包含層出土遺物（2）



第42図 B区遺物包含層出土遺物（3）



第43図 B区遺物包含層出土遺物（4）



第44図 B区遺物包含層出土遺物（5）

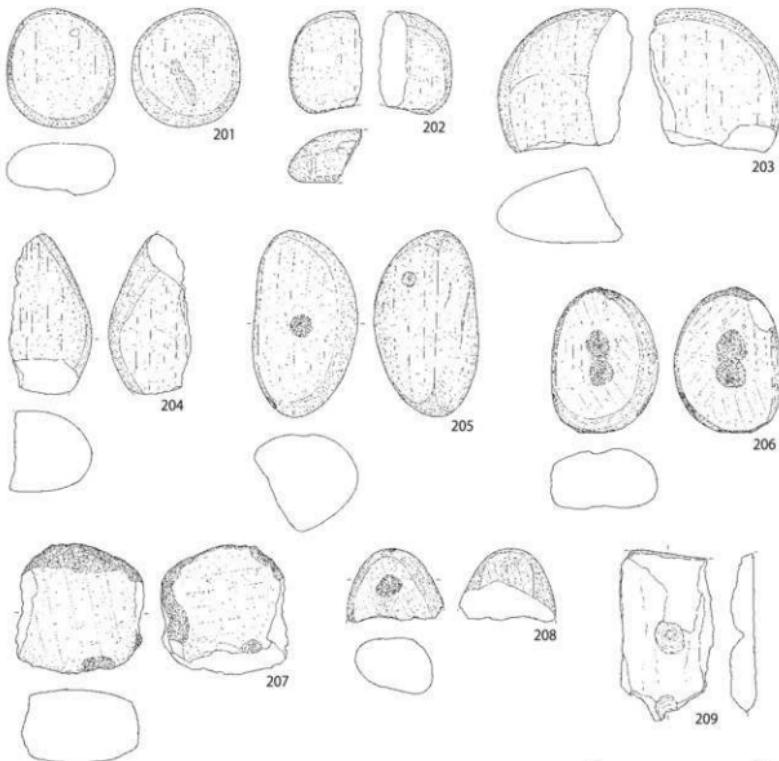
諸磯 b 2 式古段階、③は諸磯 b 2 式新段階、④は諸磯 b 3 式に比定されよう。

18、19、21は口縁部が内湾するキャリバー形深鉢で、18、19は横位連結の渦巻文を施文するものと思われ、21は1本の浮線文で口縁部を区画する。20は口縁部の内湾が弱く、刻みを施さないソーメン状の細い浮線で梯子状文を施文する。b 2 式のもつとも新しい段階の土器であろう。36～41はb 3 式に比定される土器であるが、36は屈曲の強い口縁部に、色違いの白色浮線文でモチーフを施文するものである。37は細い浮線状を呈する平行沈

線文間に細かな刻みを施すものである。屈曲する口縁部が剥落している。

第3類 (42～88)

諸磯 b 式の沈線文土器を一括する。地文縄文上に平行沈線でモチーフを描く土器群である。本遺跡の土器群は平行沈線文構成の土器が多く、モチーフを描く土器群は少ない。口縁部は、42が緩く内湾し、43、44は直線的に開く器形である。46、47は曲線的なモチーフを描くものと思われ、45は器面の荒れが著しく不明瞭であるが、斜行格子目文を施文している可能性もある。52、53は平行沈



第45図 B 区遺物包含層出土遺物 (6)

第9表 B区遺物包含層出土石器観察表（第44・45図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
188	B区	石核	黒曜石	1.6	2.1	1.5	3.6	No.101
189	B区	磨製石斧	緑色岩	[5.2]	[4.3]	0.8	15.4	No.538 一部赤色化・黒色化
190	B区	打製石斧	ホルンフェルス	12.4	5.2	2.7	207.8	No.421 風化
191	B区	打製石斧	ホルンフェルス	12.3	4.5	2.0	111.3	No.404 風化
192	B区	打製石斧	ホルンフェルス	8.7	5.2	1.8	79.3	No.491 やや風化
193	B区	打製石斧	ホルンフェルス	8.1	5.2	2.0	88.1	No.248
194	B区	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	5.2	2.3	142.1	No.443 風化
195	B区	打製石斧	砂岩	[8.6]	5.0	1.2	51.7	No.527 一部黒色化
196	B区	打製石斧	砂岩	[10.0]	5.7	1.9	102.9	No.516
197	B区	打製石斧	ホルンフェルス	[8.5]	[4.6]	2.1	114.3	No.90 風化
198	B区	打製石斧	ホルンフェルス	[6.4]	5.0	[1.9]	68.6	No.134 風化
199	B区	スクレイパー	ホルンフェルス	6.8	6.7	1.8	79.2	No.448 風化
200	B区	スクレイパー	ホルンフェルス	5.6	8.7	1.7	67.6	No.290 やや風化
201	B区	磨石	砂岩	7.3	6.7	3.8	230.9	No.25 赤色化
202	B区	磨石	砂岩	6.3	[4.5]	[3.3]	111.2	No.22 赤色化
203	B区	磨石	砂岩	[8.8]	[8.3]	[4.7]	409.6	No.319 赤色化
204	B区	磨石	砂岩	[9.9]	[5.1]	6.0	298.6	No.259 赤色化
205	B区	磨石	砂岩	11.4	6.5	6.0	546.3	No.30
206	B区	磨石	閃緑岩	8.9	6.6	3.7	336.9	No.422 赤色化
207	B区	磨石	閃緑岩	[8.0]	[7.9]	4.7	456.6	No.252 一部赤色化
208	B区	磨石	砂岩	[4.5]	[6.0]	[3.8]	108.3	No.16 赤色化
209	B区	石皿	緑泥片岩	[10.5]	[5.8]	[2.0]	157.0	No.500

線で渦巻文状の曲線文を描いており、54～56は集合沈線で鋸歯状のモチーフを構成するものと思われる。48、51、54～56のような平行沈線の集合沈線を施文するものや、61のような細い平行沈線文を施文する土器群は、浮線文③に組成するb 2式でも新しい段階の土器群であろう。

62～88は条線文のような集合平行沈線文でモチーフを描く土器群であり、浮線文④と組み合うb 3式に比定される。62～73は短い口縁部が大きく内湾もしくは内折し、65は波頂部が内側に押し込まれて花弁状を呈し、内湾する部分に獸面把手から変化したと思われる円形貼付文を施文している。口縁部はいずれも緩い波状を呈するものと思われるが、短く内折するものは平縁の可能性もある。集合沈線文では弧線文(67)や入組み状の対弧線文(76、78)、菱形状文(79～87)等を施文する。80は菱形状文と小さな渦巻文の組み合わざるモチーフを施文している。

第4類(95、96)

浮島式系の土器群を一括する。95は外削状に肥厚する口縁部が外反して開く器形を呈し、口唇部には押圧状の斜位の刻みを施している。口縁部に単沈線で幅狭の横帶区画を施し、沈線間に振幅の小さいロッキング文を施文している。他の破片と比較して、胎土にやや多めの砂粒を含んでいる。

96は貝殻腹縁、もしくはそれに類する先割れ状工具を束ねた施文具によるロッキング文を施文するもので、振幅が大きい。内面を良く磨いている。第5類(97～109)

十三菩提式土器を中心とする、前期終末の土器群を一括する。97～100は平行沈線で鋸歯状文を描くものである。97は口唇上に1段Lの側面圧痕を刻み状に施文する。98は切り込むような細沈線で左右対称の鋸歯状文を描き、中央部に小さな三角形文を施文している。100は平行沈線と結節沈線文で鋸歯状文を構成するものと思われるが、結節沈線脇に抉りを伴う幅広の沈線を施文する。以上の沈線文土器は、97が大木6式の影響を受けて

いるものと思われ、98は類例に乏しく型式比定は難しいが、器形から東関東系の興津式以降の土器群の可能性もある。100は十三苦提式である。

101、102は太い隆帯に結節刺突文を施す十三苦提式古段階の土器群で、103は地文縄文上にソーメン状の結節浮線文を垂下する扇平式系の底部破片である。

104~109は前期終末の土器群と思われもので、104は無文の口縁が内湾する深鉢である。105は胴部の区画隆带上に波状の結節刺突文を施し、地文に原体の末端処理の結節回転文を伴う無節Lを施文している。106~109は外反する先細りの折返し状口縁である。いずれも、諸磯c式以降から十三苦提式に位置付けられよう。

第6類 (110~144)

前期の文様が施文されない無文土器を一括する。整然とした横位の斜行縄文を施文するものは、諸磯b式でも比較的古段階のもので、口唇部が先細り状の110や、細かな縄文の114、115、縱走縄文状の120などは前期終末の可能性が高い。

134~139は無文土器である。134、135はやや外削状の口縁部が外反しながら開く器形で、諸磯b式でも新しい段階であろうか。

140~144は底部破片で、140は単節R L、143は単節LR縄文が横位施文されている。

第III群土器 (第41図145~180)

中期の土器群を一括する。

第1類 (145~159)

中期中葉の阿玉台式土器を一括する。145~149は口縁部破片で、隆帯脇に1条の角押文を施文する阿玉台I b式に比定される。145は波状口縁を呈し、角頭状を呈する口唇部上にも1列の角押文を巡らせる。146は口縁部区画に、147、148は隆帯の曲線状モチーフに沿って角押文を1列施文する。149はミニチュアの壺形土器である。150は胴部の幅狭楕円区画文の合わせ目に沈線の渦巻文を持つ貼付文を施文している。151は幅狭楕円区画

文と襞状整形文、152~154は低隆帯のモチーフと襞状整形文を施している。155、156は隆帯脇に押引状の沈線文を施文する。167はR L縄文の横位施文、158は無文土器で、159は底部破片である。いずれも雲母を含んでおり、阿玉台 I b式古段階に位置付けられよう。

第2類 (160~180)

中期末葉の磨消懸垂文を持つ加曾利E III式土器である。160~162は口縁部破片で、163~175は2本沈線間を磨り消す磨消懸垂文である。180は磨消懸垂文を垂下する径の小さな底部破片である。

176~179は無文土器であるが、器面の荒れが著しいものである。第1類の破片も含まれよう。

第IV群土器 (第43図181~187)

後期初頭の称名寺式土器を一括する。181は筒形の把手を持つ波状口縁を呈し、波頂部から刻み隆帯が垂下して胴部を縦位分割する。

182・183・185・186は、縄文間に1~2列の円形刺突文を施文する同一個体と思われる。称名寺式の中段階あたりに位置付けられよう。

B区遺物包含層出土石器 (第44、45図)

第44図188~200、第45図201~209は出土した石器である。

188は黒曜石製の石核である。夾雜物が大きく含まれている。

189は磨製石斧表面の一部である。破片全体が被熱しており、被熱のため破碎したと考えられる。

190~198は打製石斧である。6はいわゆる分銅形の打製石斧である。

199、200はスクレイバーである。剥片の一部を加工し、刃部を作り出している。

201~208は磨石類で、磨面の他敲打痕や、敲打による凹みを有するものをここに含めた。19は表裏面中央に2箇所ずつ、敲打による凹みが残存している。

209は石皿の小破片である。漏斗状の凹みが2箇所認められる。

2 古代の遺構と遺物

(1) 住居跡

第1号住居跡（第46、47図）

平安時代の住居跡は、B区南尾根端部の平坦面において1軒のみ検出された。T・U-9グリッドに位置する。GP166と重複し、これに壊されている。

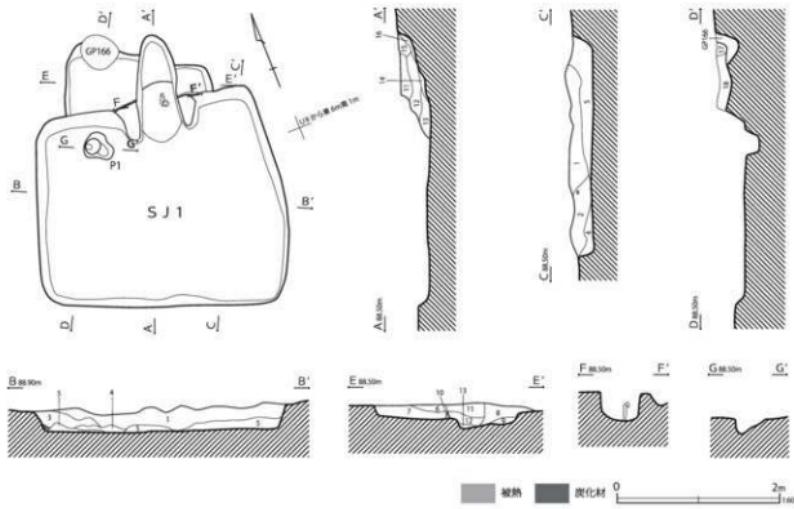
平面形態は、やや不整な方形を呈する。規模は、主軸長3.35m、副軸長3.03m、深さ0.30～0.40mである。主軸方位はN-20°-Eである。

カマドは、北側の壁面に1基設けられており、カマドからは支脚に使用したと思われる縁泥片岩が直立した状態で出土した。カマドの底面には灰が堆積しており、天井の崩落土と考えられる焼土

ブロックを多量に含む土によって埋没していた。ただし、焚口部や住居の床面に灰の堆積は認められなかった。精査後、住居跡の北側に深さ0.25mの掘り込みが検出された。カマドを中心とした非対称な掘り込みで、住居跡に付帯した棚状施設の可能性がある。

ピットは、住居跡の北西隅より1基検出されたのみであり、柱穴や貯蔵穴とするにはやや浅い。

住居跡の床面上からは、炭化材片がまばらに確認された。これらの炭化材について、自然科学分析による樹種同定を行った。その結果、炭化材の樹種は、クヌギ節、カエデ属、ミズキ属であることが分かった。いずれも堅硬な樹種である。住居



5 J 1	
1	褐色土 塗土粒・炭化物粒多量
2	白色土 1層より灰化物粒多い
3	褐色土 塗土・ブロック・炭化物・ブロック少量 層下面被熱する部分あり
4	3層よりやや色濃い
5	黒褐色土 炭化物・炭化材多量 桃土粒・桃土ブロック多量
6	褐色土 塗土粒少量
7	暗褐色土 塗土粒微量 土器片含む
8	暗褐色土 塗土粒微量
9	暗褐色土 塗土粒少量
10	褐色土 一部被熱
11	褐色土 墓褐色土ブロック多量 焼土粒少量 黏性強い カマド天井崩落土
12	赤褐色土 烧土ブロックを主体とする カマド天井崩落土
13	黒色土 灰層・墓褐色土含む
14	褐色土 黑色土少量 桃土粒多量
15	赤褐色土 墓褐色土含む カマド天井崩落土
16	褐色土 焼土粒・墓褐色土粒少量 流入土か
17	黒色土
18	暗褐色土 焼土・炭化物少量

第46図 第1号住居跡

の部材、あるいは、カマドの燃料として使用されたものであろう。

遺物は、住居跡の中央部にややまとまって出土し、カマドや棚状施設からの出土はわずかであつた。袋状鉄斧は、このまとまりのなかから出土している。また、住居跡南西隅より、紡錘車2点が出土した。

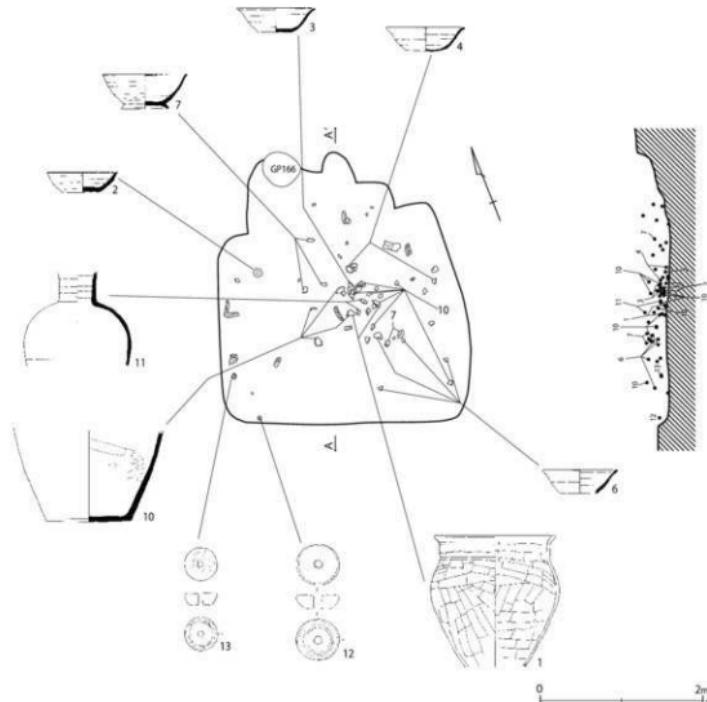
後述する第48図10には、住居跡の南側斜面より出土した破片との接合関係が認められた。このことから、住居跡の遺物の一部は斜面側に流出していることがうかがわれる。

出土遺物より、住居跡は9世紀の中頃から後半に属するものと考えられる。

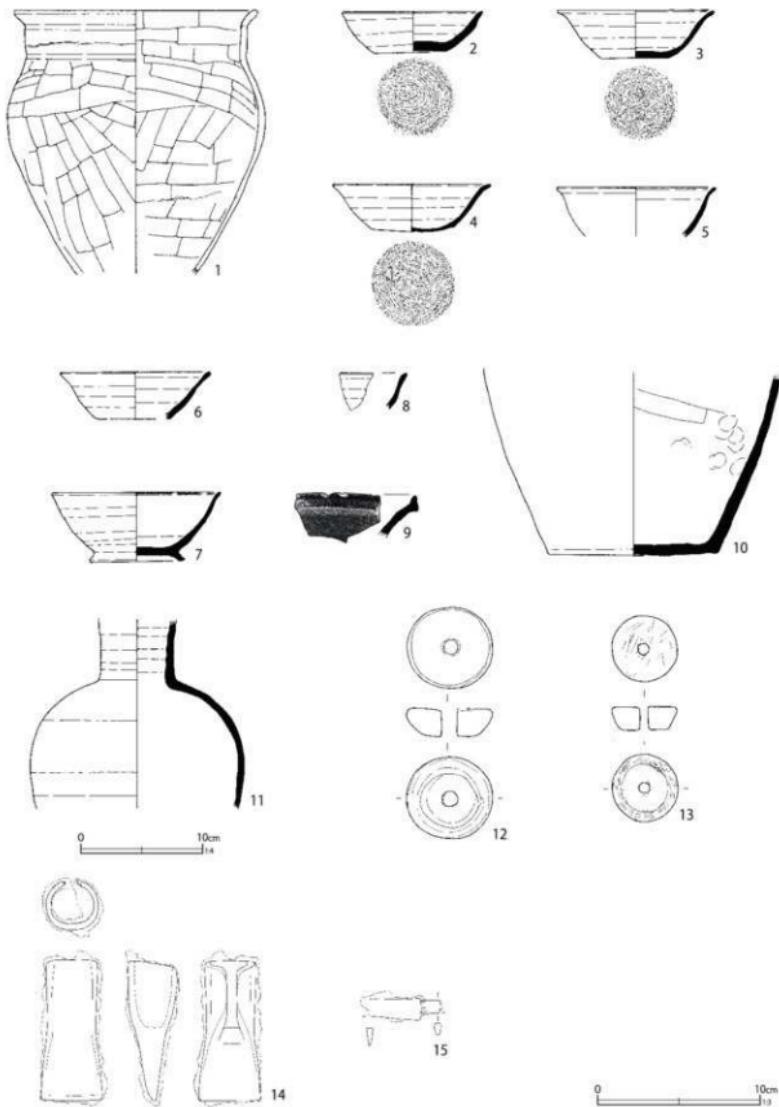
第1号住居跡出土遺物（第48図）

1は、土師器の甕である。胴部の器壁は薄手であり、口縁部はいわゆるコの字状を呈する。出土した土師器片について、非掲載となったものも含めてほとんどが1と同一個体と考えられる。

2～6は須恵器の壺である。いずれも胎土が粗く粒の大きな含有物が目立つのが特徴であり、生産地が同一であるものと想定される。7は須恵器の高台付塊である。2～6と胎土の特徴が類似しており、共通の生産地である可能性が高い。8は、須恵器の壺と思われる小破片である。胎土は緻密で、白色針状物質を含むことから南比企産と考えられる。9は、高台付塊である。胎土が内



第47図 第1号住居跡遺物出土状況



第48図 第1号住居跡出土遺物

第10表 第1号住居跡出土遺物観察表（第48図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	土器	甕	(20.0)	[21.6]	—	E G I K	40	普通	明赤褐	No.25・57	31-1
2	須恵器	壺	11.6	3.3	5.6	E I J	100	良好	黄灰	No.11 底部回転糸切り	31-2
3	須恵器	壺	12.7	3.9	5.5	H I K	70	不良	にぶい黄橙	No.32・34・37 底部回転糸切り	31-3
4	須恵器	壺	13.0	3.9	7.0	I K	98	普通	黄灰	No.42・46 底部回転糸切り	31-4
5	須恵器	壺	13.0	[4.0]	—	I K	5	普通	褐灰	No.382	32-3
6	須恵器	壺	12.4	3.8	(6.0)	H I J K	70	普通	灰白	No.16・20・21・49	
7	須恵器	高台付壺	13.8	5.7	7.5	H K	90	普通	褐灰	No.13・17・18・41・43・64・381 底部回転糸切り	31-7
8	須恵器	壺	—	[3.0]	—	H J K	5	普通	灰白	南比企産	32-3
9	須恵器	甕	—	[3.5]	—	I	5	良好	灰褐	No.371 内外面自然釉 10と同一個体か	32-3
10	須恵器	甕	—	[25.0]	(27.0)	I	25	良好	灰褐	No.14・15・23・25～27・29・33・35・39・50 内外面自然釉 9と同一個体か	31-6
11	須恵器	長頸甕	—	24.5	—	I K	21	普通	にぶい黄橙	No.24・30・334・386 外面自然釉	31-11
12	土製品	紡錘車	径5.3	厚さ1.7	重さ45.8					No.10	32-1
13	石製品	紡錘車	径4.1	厚さ1.4	重さ37.2	片岩				No.9	32-2
14	鉄製品	鉄斧	長さ8.6	刃幅3.3	袋部3×3.0	厚さ0.4	重さ157.8			No.53 袋部円形	33-1
15	鉄製品	刀子	長さ[5.31]	刃長[3.7]	背幅0.4	刃幅1.1	重さ6.7			No.54 切先・茎先欠損 茎部表面に柄木痕跡あり	33-1

面が磨滅しているもの多かった。

10は須恵器の甕である。底部を含めた全面に自然釉が付着し、外面は黒色を呈する。器壁は厚手である。9の口縁部と同一個体と考えられる。11は須恵器の長頸甕である。外面に薄く自然釉が付着する。頸部は厚く、内面のロクロ目が顕著である。東金子産と考えられる。

12・13は紡錘車である。12は土製であり、13は石製である。13の石材は、片岩と考えられる。いずれも、表面に使用に伴う細かな擦痕が認められる。14・15は鉄製品である。14は、袋状鉄斧である。袋状鉄斧は小型の斧であり、木材の製品加工等に使われたものと推察される。また、住居跡からは離れるものの、M-13グリッドからは、似た形態の袋状鉄斧が出土している点が留意される。15は、刀子である。切先と茎先を欠損する。茎部の表面には、柄木痕が認められる。本住居跡からは、糸をつむぐための紡錘車や、木材の加工に用いたものと推察される袋状鉄斧など生産にかかわる遺物が出土している点が特徴であり、住居跡の性格を知るうえで貴重な資料と考えられる。

(2) 炭焼窯跡

炭焼窯跡は、西尾根・南尾根からそれぞれ1基ずつ、合計2基が検出された。規模や形態はそれぞれ異なるが、いずれも斜面に面した位置に立地する。

第1号炭焼窯跡（第49図）

S-9グリッドに位置する。第3号土壙・P173～P175と重複し、これを壊している。規模は、遺存値で、長軸4.72m、短軸1.65m、深さ0.37m、主軸方位は、N-41°～Wである。底面は、北西方向の斜面向かって緩やかに傾斜している。

底面の南西側半分に溝状の掘り込みを有し、北東半分よりも20cmほど深く掘り込まれている。

覆土の中位に被熱面があり、少なくとも2回の操業の可能性があるが、底面においては被熱面が確認されなかった。

時期を特定する遺物が出土しなかつたため、炭化材1点の自然科学分析を行い、平安時代中期～鎌倉時代に相当する年代値が得られた。このことから、第1号炭焼窯跡は、第1号住居跡の北側に隣接するものの、住居跡よりは操業時期は新しい

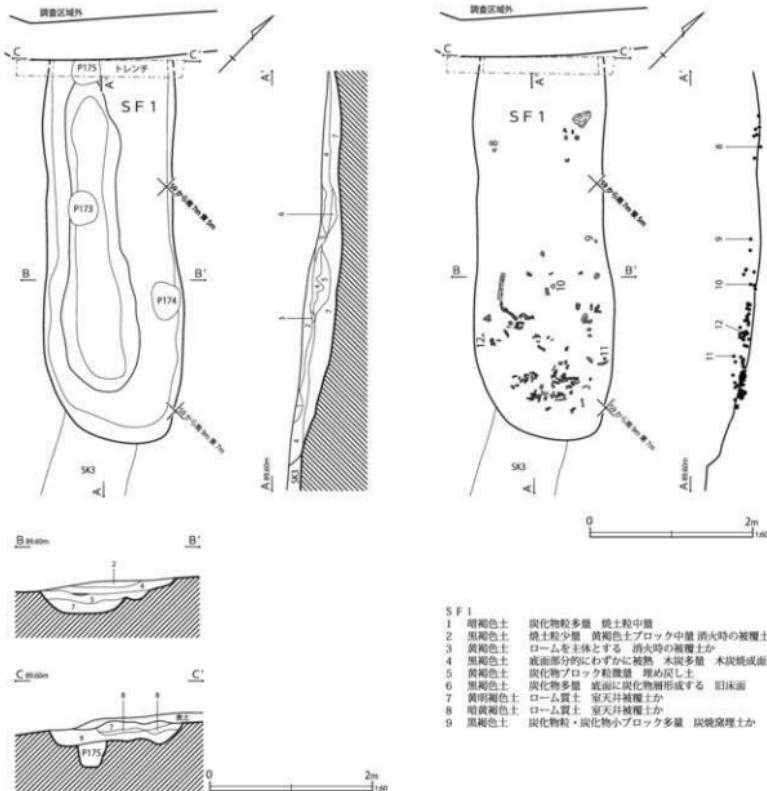
と想定される。自然科学分析から得られた年代に並行する時期の遺構・遺物は、今回の調査においては確認されなかった。

また、併せて行った炭化材の樹種同定では、炭化材の樹種はクヌギ節であることが判明した。クヌギ節は燃料材としての火力は高くないが長時間燃焼する特徴をもつ木材である。第1号炭焼窯跡においては、燃料材もしくは炭材として利用されたものと考えられる。

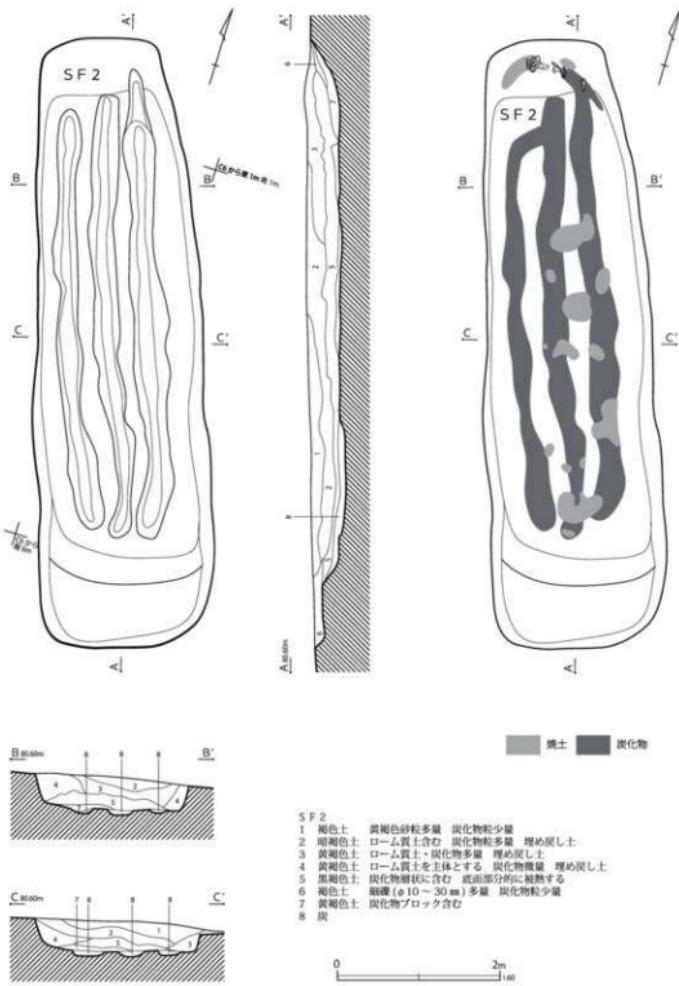
第2号炭焼窯跡（第50・51図）

C-5・6グリッドに位置する。南に向かって傾斜する斜面を臨む尾根上に築造されている。規模は、長軸7.50m、短軸2.0m、深さ0.50mであり、主軸方位はN-20°-Wである。第1号炭焼窯跡より、規模は大きい。

長軸の南側およそ6.20mの位置で一段高くなり、およそ0.70mのテラス状の施設を有する。焚口、あるいは作業場と推察されるが、やや狭い点が気



第49図 第1号炭焼窯跡



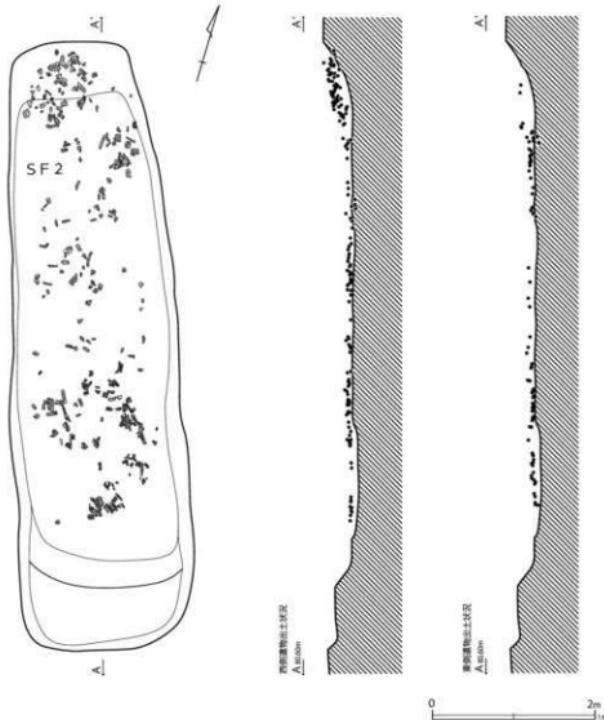
第50図 第2号炭焼窯跡(1)

にかかる。底面には、長軸方向に沿って3条の溝状の施設が掘削されていた。

覆土の堆積状況を確認すると、底面および溝状の施設には灰が堆積しており、また、炭化材の分布も認められる。さらに灰層の上に堆積する第4層の上にも炭化材の分布が認められることから、少なくとも2回の操業が想定されるが、どの面においても明瞭な被熱面は確認できなかった。

本遺構でも遺物の出土がなかったため、第1号炭焼窯跡と同様に、出土した炭化材4点に対して自然科学分析による年代測定と炭化材の樹種同定を行った。その結果、炭化材3点で11世紀前半～12世紀後半の平安時代中期から後期の年代が得ら

れ、1点で11世紀中頃～13世紀前半の平安時代中期から鎌倉時代の年代が得られた。よって、本遺構は、第1号炭焼窯跡と並行する時期か、やや新しい時期のものと想定される。また、炭化材の樹種はすべてアカガシ亜属であった。アカガシ亜属の材は非常に硬質で、火持ちがよいことが特徴である。第1号炭焼窯跡のクヌギ節の材とは対照的な木材である。木炭は、樹種によって生成される木炭の特徴が異なり、用途によって使い分けられる。例えば製鉄には、硬質で火持ちの良い木炭が使用される。このことから、第1・2号炭焼窯跡で焼成された木炭は、それぞれ用途によって、異なる供給先があった可能性が想定できる。



第51図 第2号炭焼窯跡（2）

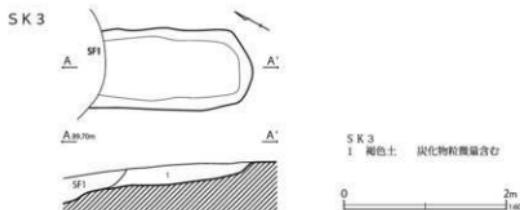
(3) 土壙

検出された土壙のうち、当該時期に属するものは1基のみである。B区に位置する。平面形態と覆土から、古代のものと認定した。

第3号土壙（第52図）

S・T-9グリッドに位置する。平安～鎌倉時

代に比定される第1号炭焼窯跡と重複し、これに壊されている。平面形態は、隅丸方形を呈するものと考えられる。規模は、遺存値で、長軸1.80m、短軸1.00m、深さ0.25mである。第1号炭焼窯跡の一部と思われたが、断面観察によって重複関係が認められたため、土壙とした。



第52図 土壙

第11表 土壙一覧表

遺構番号	グリッド	形状	長軸(m)	短軸(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
SK 3	S・T-9	楕円形	1.80	1.00	0.25	N-29°-W	SF1より古	

(4) グリッド出土遺物

第53図1～3は、鉄製品である。1は、M-13グリッドより出土した袋状鉄斧である。第1号住居跡より出土したものと異なり袋部は方形である。

2は、鎌である。柄装着部の破片である。3は、楕形滓である。本調査区からは、鍛冶遺構は検出されなかつたが、周辺遺跡における鍛冶遺構の存在が想定される。



第53図 グリッド出土遺物

第12表 グリッド出土遺物観察表（第53図）

番号	出土位置	器種	法量	備考
1	M-13	袋状鉄斧	長さ8.7 刃幅3.9 袋部3.4×1.8 厚さ0.4 重さ123.9	No.487 袋部分方形
2	—	鎌	刃長[4.7] 刃幅4.0 背幅0.2 重さ20.2	No.337 柄装着部の破片
3	—	楕形滓	長さ[4.9] 幅[4.6] 厚さ2.2 重さ66.5	No.297 磁着極めて弱い

3 中・近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

溝跡は、A区から2条、B区から1条、合計で3条検出された。第1・2号溝跡は東尾根に位置し、第3号溝跡は中央から南への尾根を分断している。

第1・2号溝跡は、細く浅く尾根沿いを走っており、第1・2号溝跡の間に位置する第1号道路跡と一連のものと考えられる。

第1号溝跡（第54図）

F-18・19・20・21グリッドに位置する。第12号焼土跡と重複し、これを壊している。また、第13号焼土跡と重複し、これに壊されている。規模は、長さ15.06m、幅0.74m、深さ0.26m、走行方向N-88°-Wである。断面形態は、U字状を呈する。底面には段を有しており、溝掘削時の掘削単位とも思われる。

東尾根を斜めに横断するように、南東方向から北西方向に走る溝である。遺物は出土していないため時期は不明であるが、並行して走る第2号溝跡と、隣接する第1号道路と一連のものと考えられる。第1号道路は、硬化面の上層に浅間A輕石の混入が認められることから、近世の道路跡と考えられる。よって、本溝跡も近世に属する可能性が高い。

第2号溝跡（第54図）

F-21グリッドに位置する。第1号道路跡と重複し、これに壊されている。規模は、長さ6.25m、幅0.45m、深さ0.10m、走行方向N-85°-Wである。断面形態は、U字状を呈する。

第1号溝跡と並行して、南東方向から北西方向に走る溝であるが、溝跡の深さや幅は、第2号溝跡が細く浅い。南東側は調査区外へと続くものと想定される。遺物は出土していない。

第1号溝跡および第1号道路跡と一連のものと

考えられる。前述のとおり、第1号道路跡は近世の道路跡と考えられ、これと一連のものと考えられる本溝跡も近世に属する可能性が高い。

第3号溝跡（第55図）

K-14・15グリッドに位置する。

規模は、長さ5.78m、幅3.10m、深さ0.50m、走行方向N-80°-Wである。断面形態は、碗形を呈する。

尾根に直行して、東方向から西方向へ走る溝跡である。両端とも斜面となるため、調査した長さが溝跡の全長と思われる。当初、中世の尾根切り溝の可能性を考えたが、後述する覆土の状況から、中世の遺構とするには疑問が残る。

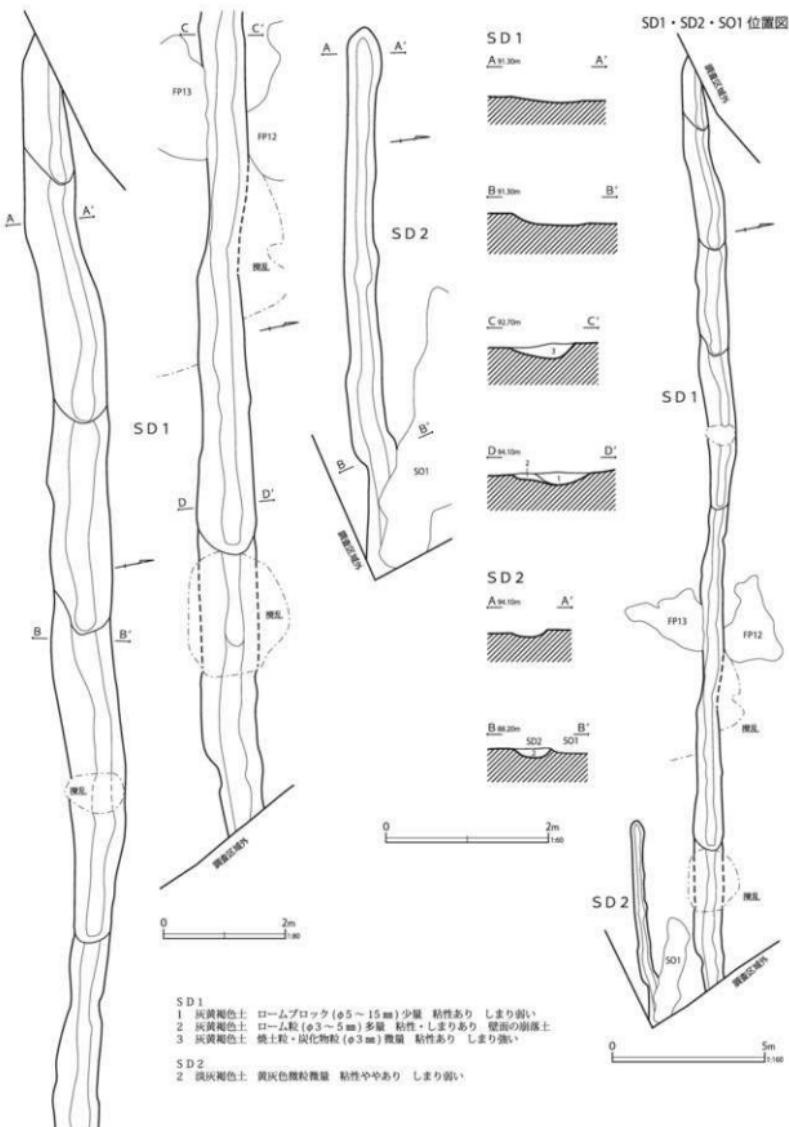
遺物は出土していないため、時期は不明であるが、覆土の堆積状況を確認すると、最も新しい表土層が堆積した際、溝はわずかにくぼんでいたことが分かる。他の遺構が、埋没したのち上部を削平された状態で検出されていることを考えると、相対的に新しい時期の遺構である可能性が高い。

(2) 道路跡

道路跡は、7条検出された。①第1・4・5・6号道路、②第2・3号道路、③第7号道路のまとまりに大別できる。いずれも硬化面のみが確認された。第56図に硬化面の位置を示した。網掛けをした部分が硬化面である。硬化面の厚さは、第1号道路跡において確認した。

ほとんどが、尾根沿いを走る道路である。①は西尾根と東尾根を結ぶ東西方向、②は中央尾根と南尾根を結ぶ南北方向、③は斜面に直行して南北方向に走る。

第7号道路跡を除いた硬化面上層より浅間A輕石が検出され、特に第1・2・3号道路跡で顕著であった。このことから、硬化面の最新の形成年



第54図 第1・2号溝跡

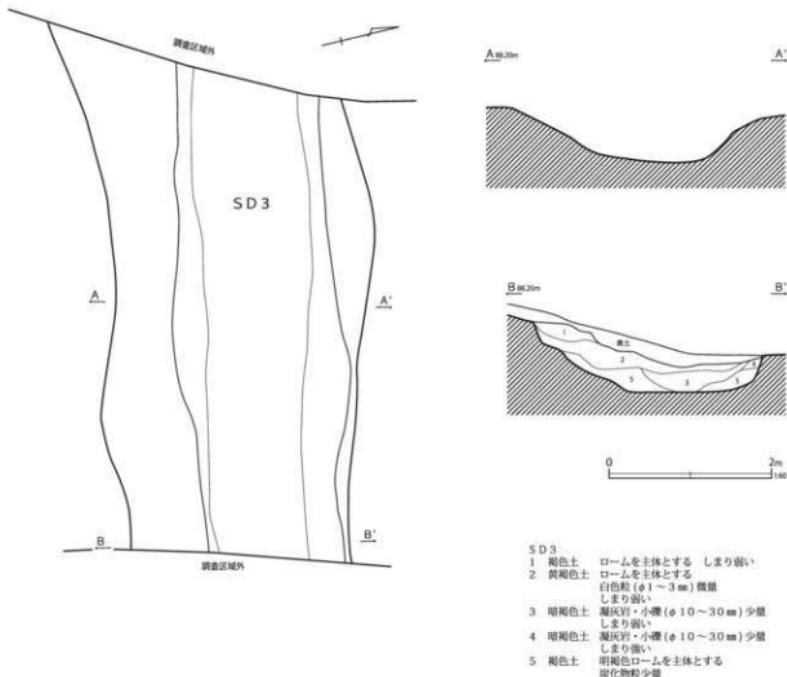
代は、1783年前後と想定される。

第1号道路跡（第56図）

F-21グリッドに位置する。規模は、長さ3.40m、幅0.64mである。走行方位は、N-68°-Wである。硬化面の厚さは、0.06mである。尾根に

沿って走る道路であり、東側の調査区外へと続く可能性が高い。また、中央尾根に位置する第4・5・6号道路跡に続くものと想定される。

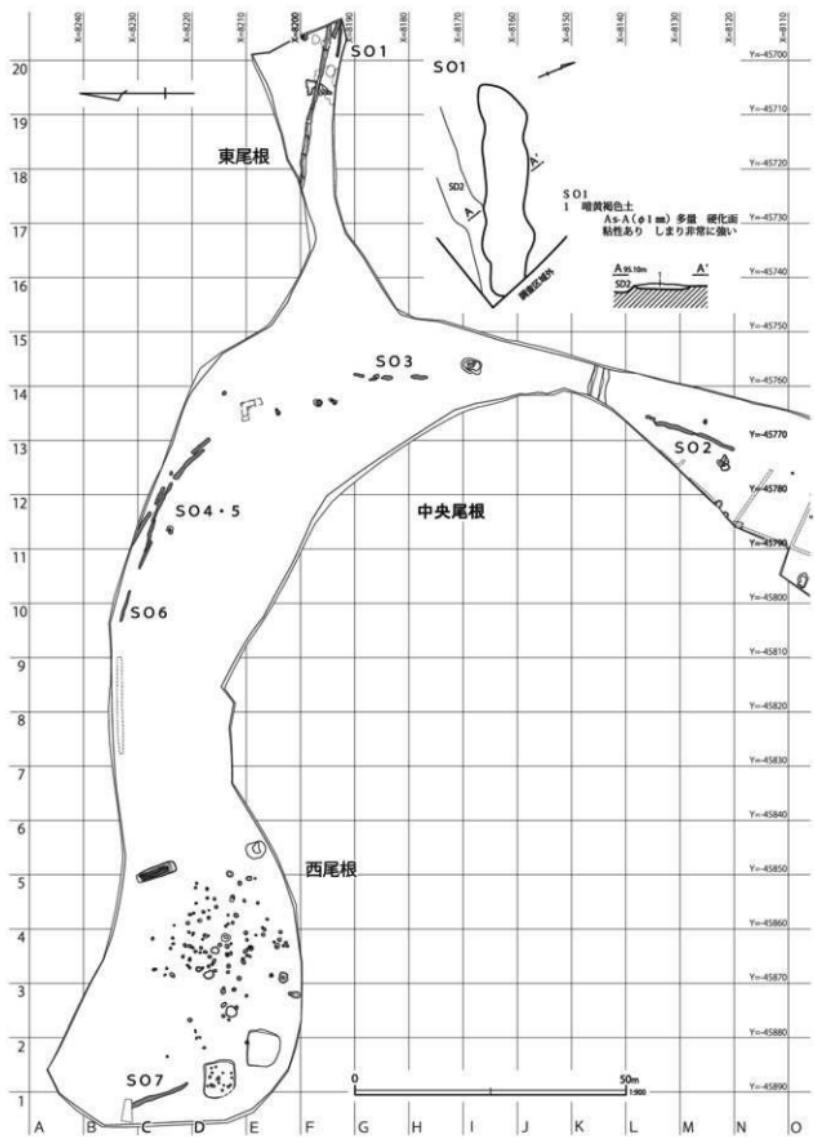
本道路跡の両側に位置する、第1・2号溝跡と一連のものと考えられる。



第55図 第3号溝跡

第13表 溝跡一覧表

造溝番号	グリッド	断面形態	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	長軸方位	重複関係	備考
SD 1	F-18～21	U字状	15.06	0.74	0.26	N-88°-W	FP12より新	FP13上り古
SD 2	F-21	U字状	6.25	0.45	0.10	N-85°-W	S01より古	
SD 3	K-14・15	碗形	5.78	3.10	0.50	N-80°-W		



第56図 道路跡位置図

第2号道路跡（第56図）

L-14グリッド、M-13・14グリッドに位置する。規模は、長さ17.28m、幅0.80mである。走行方位は、N-16°-Eである。

硬化面の表層には、浅間A軽石の混入が顕著に認められた。

南尾根に沿って南北方向に走る道路であり、第3号道路跡に接続するものと考えられる。

第3号道路跡（第56図）

G・H-15グリッドに位置する。規模は、長さ13.56m、幅0.8mである。走行方位は、N-4°-Wである。南尾根に沿って中央尾根へと走る道路で、第2号道路跡に接続するものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間A軽石の混入が顕著に認められた。

第4号道路跡（第56図）

B-12グリッド、C-12・13グリッドに位置する。規模は、長さ24.00m、幅0.60mである。走行方位は、N-60°-Wである。

中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する、第5・6号道路跡、走行方位が近い第1号道路跡と一体のものと考えられる。第5号道路跡が尾根沿いで西尾根に向かうに対し、本道路跡は斜面を下る道であるものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間A軽石の混入が認められた。

第5号道路跡（第56図）

C-11・12グリッドに位置する。規模は、長さ24.60m、幅0.66mである。走行方位は、N-75°-Wである。

中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する第4・6号道路跡、走行方位が近い第1号道路跡と一体のものと考えられる。

硬化面の表層には、浅間A軽石の混入が認められた。

第6号道路跡（第56図）

B-11グリッドに位置する。規模は、長さ6.00

m、幅0.38mである。走行方位は、N-74°-Wである。硬化面の上層には、浅間A軽石の混入がわずかに認められた。中央尾根から西尾根に沿って走る道路跡である。近接する、第4・5号道路跡、走行方位が近い第1号道路跡と一体のものと考えられる。

第7号道路跡（第56図）

B-1グリッド、C-1・2グリッドに位置する。規模は、長さ11.04m、幅0.88mである。走行方位は、N-20°-Wである。第1～6号溝跡と比較して、硬化面はやや薄く、また、浅間A軽石の混入は認められなかった。

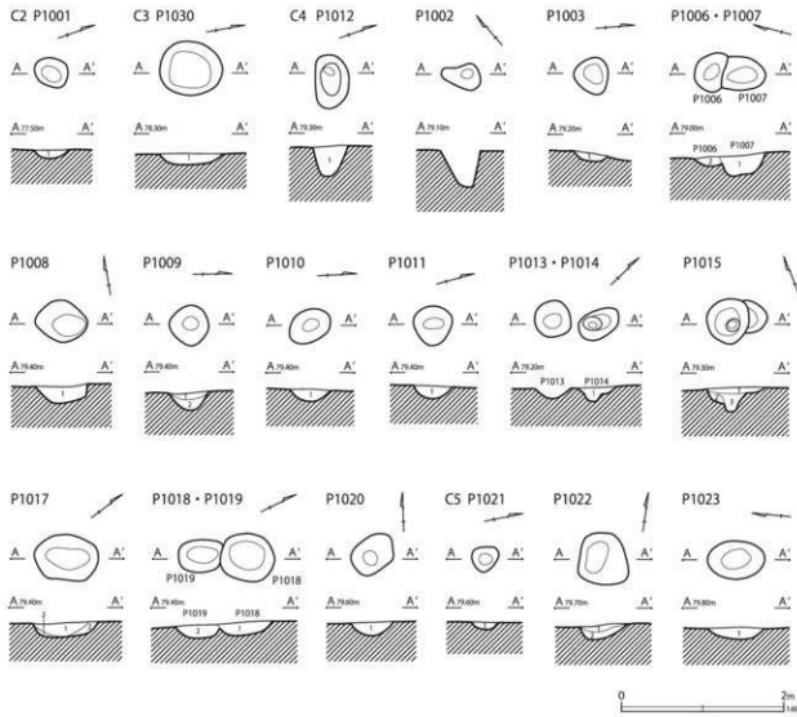
(3) ピット（第57～67図）

ピットは、A区で94基、B区で130基、合計224基が検出された。その多くが、他の遺構と同様に西尾根と南尾根端部の平場に分布する。住居跡の柱穴の可能性もあるが、断面観察で柱穴と認められたものはごくわずかである。

遺物が出土したものも少なく、遺物はすべて縄文時代のものであった。

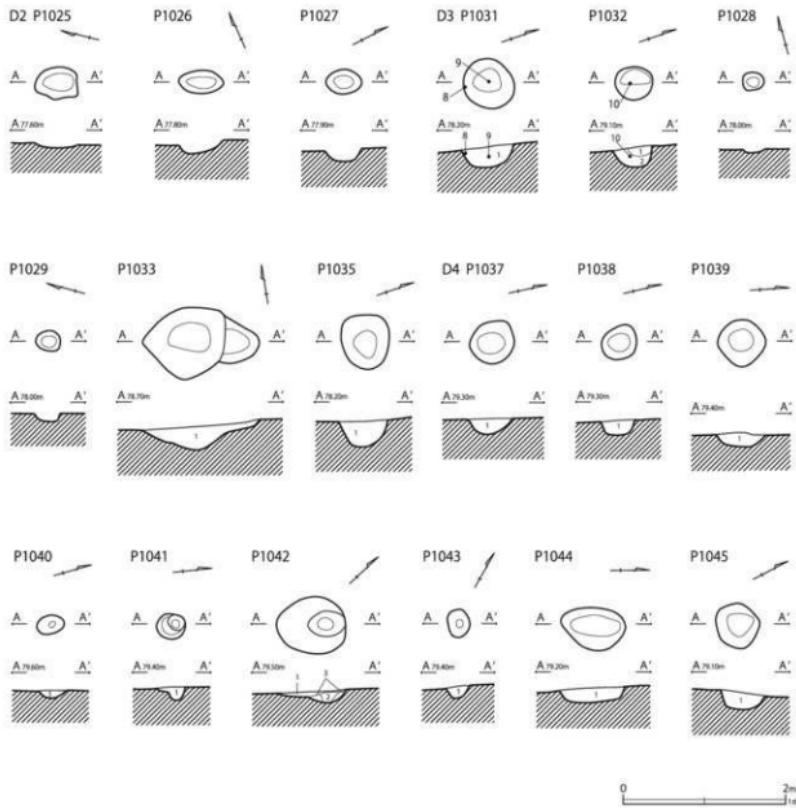
ピット出土遺物（第68図1～11）

1はP5出土の中期中葉の阿玉台式土器で、裝状整形痕を残す胴部破片である。砂粒を多く含み、少量の雲母を含む。2はP120出土の阿玉台式土器で、胴部の屈曲部を隆帯で区画している。器面が荒れていて不明瞭であるが、隆帯に沿ってやや幅広の角押文もしくはキャタピラ文の痕跡が残っている。砂粒を多く、雲母を少量含む。3はP120出土の前期後葉の諸磧b式土器であろう。不明瞭であるが地文縄文上に、斜位の集合平行沈線文を施文する。4はP134出土の前期末の諸磧c式土器であろう。垂下するやや幅広の隆帯に、半截竹管状工具による叉状の連続押引刺突文を施文する。地文は無文である。5はP162出土の諸磧b式土器である。胴部の単節R L縄文上に、灰白色の低平面浮線文を3本施文し、交互に異方向の斜位



- C2 P1001**
1 黑褐色土. 黒土主体 ローム混 含化物粒微量
- C3 P1030**
1 黄褐色土 ローム主体 黑色土含む 黏性・しまりやや強い
- C4 P1012**
1 黑褐色土 ロームブロックと黒色土ブロックの混合層 含化物粒微量 黏性・しまりやや強い
- C4 P1003**
1 黄褐色土 黑色土ブロック少量・砂粒・含化物粒微量含む 黏性・しまりややあり
- C4 P1007**
1 黑褐色土 黃土粒・含化物粒微量 黏性・しまりやや強い
2 黄褐色土 ローム主体 黄土粒・含化物粒微量 黏性・しまりやや強い
- C4 P1008**
1 黑褐色土 ロームブロックと黒色ブロックの混合層 砂粒微量 黏性・しまりやや強い
- C4 P1009**
1 黑褐色土 砂粒・黄土粒・含化物粒微量 黏性・しまりやや強い
2 黄褐色土 黑色ブロック斑状に少量含む 黏性・しまりやや強い
- C4 P1010 + P1011 + P1020**
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量 黑褐色ブロック少量 黏性・しまりやや強い
- C4 P1014**
1 黄褐色土 黄褐色土表面に含む 砂粒微量 黏性・しまりあり
- C4 P1015**
1 黄褐色土 砂粒・含化物粒微量 ローム粒少量含む
2 黄褐色土 黄褐色粒微量含む 黏性・しまりやや強い
3 黄褐色土 黏性・しまりあり
- C4 P1017**
1 黑褐色土 ロームブロックと黑色ブロックの混合層 烧土粒微量
2 黄褐色土 ロームブロックと黒色ブロックの混合層 1層より黒色ブロック少ない 含化物粒微量
 黏性・しまりやや強い
- C4 P1018 + P1019**
1 黄褐色土 黄褐色土表面に含む 烧土粒微量 黏性・しまりやや強い
- C5 P1021**
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 数量 黑褐色ブロック少量
 黏性・しまりやや強い
- C5 P1022**
1 黄褐色土 ロームブロック主体 黑色ブロック少量・烧土粒微量
 黏性・やや強い、しまり強い
2 黄褐色土 黄褐色土ブロック少量 黏性・やや強い、しまり強い
- C5 P1023**
1 赤褐色土 As-A微量 黑褐色ブロック少量
 黏性・しまりやや強い

第57図 A区ピット (1)



D3 P1031
1 黄褐色土 ローム主体 黒色土斑に含む

D3 P1032
1 黄褐色土
2 喻褐色土 ローム主体 黒色土斑に含む
ロームと褐色土の混合層 炭化物粒微量
粘性・しまりやや弱い。

D3 P1033
1 喻褐色土 ロームブロックが斑状に入る 炭化物粒微量
粘性・しまりやや弱い。

D3 P1035
1 喻褐色土 ロームブロックと喻褐色土の混合層 炭化物粒微量
粘性・しまりやや弱い。

D4 P1037, P1038
1 喻褐色土 黒色土斑状に含む 烧土粒微量 粘性・しまりやや弱い

D4 P1039
1 黑褐色土 白色粒・燒土粒微量 粘性・しまりやや弱い

D4 P1040
1 喻褐色土 中央にアタリ状にくぼみあり 柱穴か

D4 P1041
1 喻褐色土 ローム少量含む 烧土粒・炭化物粒微量

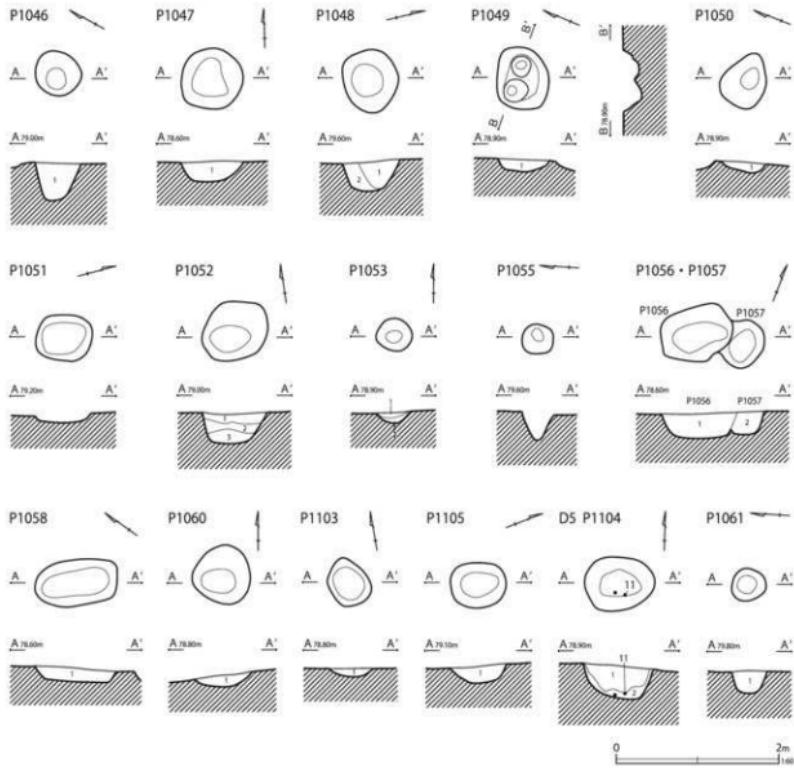
D4 P1042
1 黄灰土 粘性あり しまりやや弱い
2 黄灰土 白色粒微量 粘性あり しまりやや弱い
3 黄灰土 ローム主体 白色粒微量含む

D4 P1043
1 喻褐色土 ローム少量 烧土粒・炭化物粒微量含む

D4 P1044
1 黄灰土 ロームブロックと喻褐色土ブロックの混合層
烧色粒・As A微量 粘性・しまりあり

D4 P1045
1 黄褐色土 黑色土少量 粘性あり しまりやや弱い

第58図 A区ピット (2)



D4 P1046 (柱穴)

- 1 黒褐色土 ローム主体 黒色土塊にふくむ
2 暗褐色土 ローム主体 黒色土塊にふくむ

D4 P1047

- 1 黄褐色土 ローム主体 黒色土塊に含む 炭化物粒微量 粘性・しまりあり

D4 P1048

- 1 黑褐色土 砂粒・桃土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い
2 黑褐色土 黑色土塊に含む ローム粒含む 粘性・しまりやや強い

D4 P1049

- 1 黑褐色土 白色粒・桃土粒・炭化物粒微量・ローム粒含む
粘性あり しまり強い

D4 P1050

- 1 黑褐色土 黑色土ブロック含む 粘性・しまりやや強い

D4 P1052

- 1 黑褐色土 As-A 粒群 粘性・しまりやや強い

2 暗褐色土 As-A 微量

- 3 黑褐色土 砂粒・As-A 粒群 粘性・しまりやや強い

D4 P1053

- 1 黑褐色土 ローム主体 黑色土含む 土團粒・桃土粒・炭化物粒微量

- 粘性・しまりやや強い

2 黑褐色土 填土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

D4 P1056・P1057

- 1 黄褐色土 ローム主体 黑褐色土を斑に含む 炭化物粒微量
粘性・しまりあり

D4 P1058

- 1 暗褐色土 砂粒・桃土粒・炭化物粒微量

- 粘性・しまりやや強い

D4 P1060

- 1 暗褐色土 砂粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

D4 P1063

- 1 暗褐色土 ロームブロック・黒色土ブロック含む

- 砂粒・炭化物粒微量

D4 P1065

- 1 黄褐色土 ローム主体 黑色土ブロック・砂粒・炭化物粒微量

- 粘性・しまりやや弱い

D5 P1104

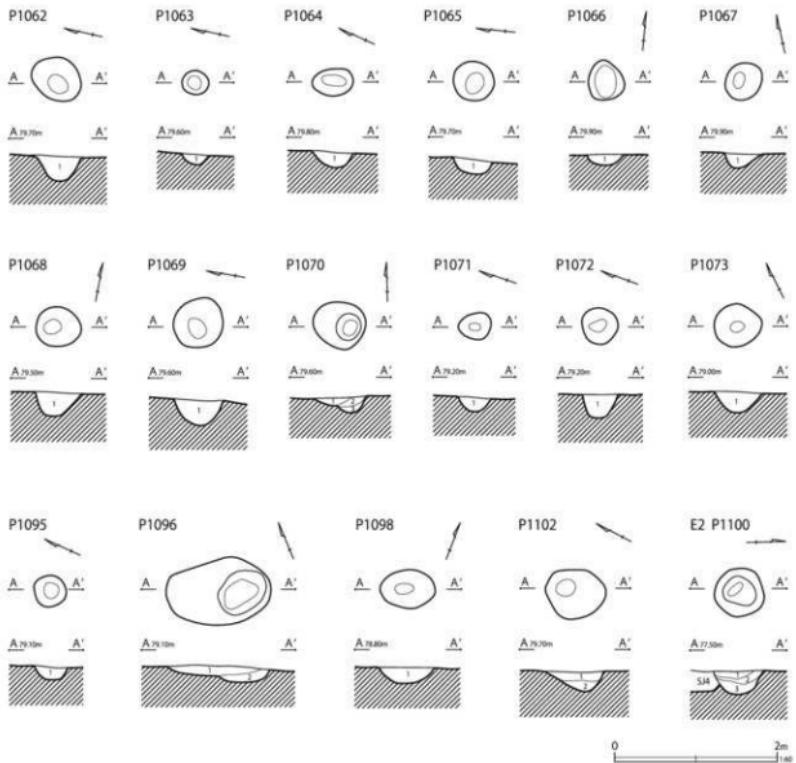
- 1 暗褐色土 黑色土塊に含む 砂粒・炭化物粒微量

- 粘性・しまり弱い

D5 P1106

- 1 黄褐色土 ロームと暗褐色土の混合層 炭化物粒・砂粒微量

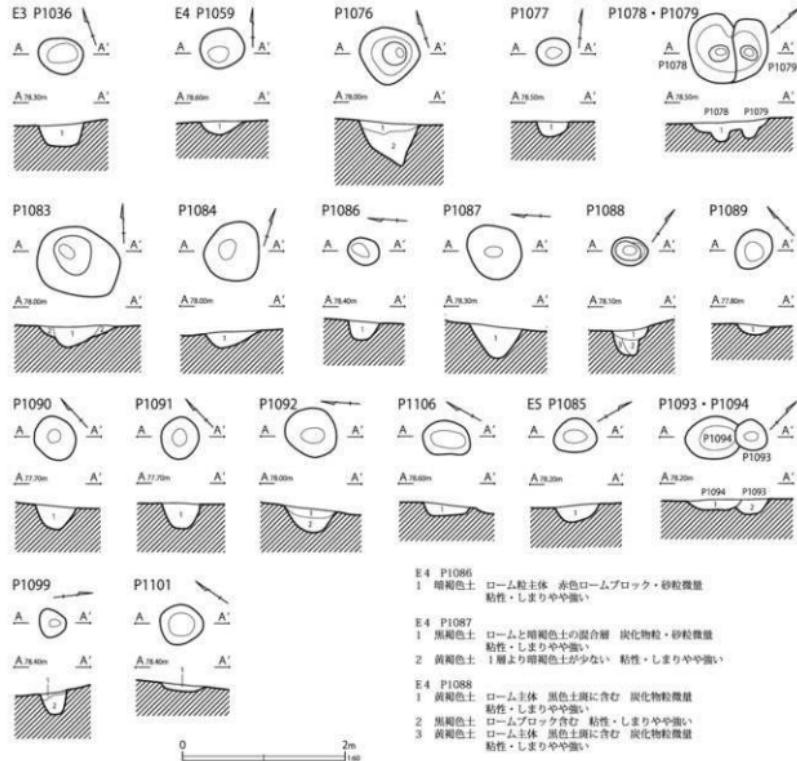
- 粘性あり しまりやや弱い



- D5 P1062
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・黒褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1063
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) ローム粒微量・褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1064
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1065・P1066・P1067・P1068
1 黒褐色土 黒色土面に含む 砂粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い
- D5 P1069
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・黒褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1070
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・黒褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1071
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・黒褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1072
1 赤褐色土 白色微粒 (As-Aか) 微量・黒褐色ブロック少量
粘性・しまりやや強い
- E2 P1100
1 赤褐色土 白色ローム粒微量・砂粒・焼土粒微量
粘性・しまりやや強い

- D5 P1071
1 喀赤褐色土 ローム主体 黑色土面に含む 砂粒・焼土粒微量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1072・P1073
1 喀褐色土 ローム主体 黑色土面に含む 砂粒・焼土粒微量
粘性・しまりやや強い
2 黄褐色土 黑色土面に含む 粘性・しまりやや強い
- D5 P1095
1 喀褐色土 ローム粒主体 色赤ロームブロック・砂粒微量
粘性・しまりやや強い
- D5 P1096
1 喀褐色土 砂粒・焼土粒微量 粘性・しまりやや強い
2 喀褐色土 1層に見えるがやや暗色味が強い
- D5 P1098
1 喀褐色土 黑色土面に含む 砂粒・焼土粒微量
- D5 P1102
1 喀褐色土 黑色土・砂粒微量 粘性・しまりやや強い
2 喀褐色土 黄褐色土少量
- D5 P1100
1 喀褐色土 炭化物粒・凝灰岩片少量
粘性あり しまり弱い

第60図 A区ピット (4)



E3 P1036
1 單褐色土 ロームと黒色土の混合層 炭化物粒微量 粘性・しまりやや弱い

E4 P1059
1 單褐色土 砂粒・壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1076
1 赤褐色土 ローム主体 黑色土層に含む 粘性・しまりやや弱い

2 赤褐色土 ロームブロックと黒色土ブロックの混合層 砂粒微量
粘性・しまりやや弱い

E4 P1077
1 單褐色土 ロームブロックと黑色土の混合層 壤土粒・炭化物粒微量
粘性・しまりやや強い 細粒六分

E4 P1078 + P1079
1 單褐色土 ローム主体 黑色土層に含む 砂粒・炭化物粒微量
粘性・しまりやや強い 粗粒

E4 P1083
1 赤褐色土 ローム主体 黑色土層に含む 粘性・しまりやや強い
2 黑褐色土 砂粒・壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや弱い

E4 P1084
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや弱い

E4 P1086
1 單褐色土 黒褐色土層に含む 砂粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1087
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや弱い

E4 P1088
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1089
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや弱い

E4 P1090
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

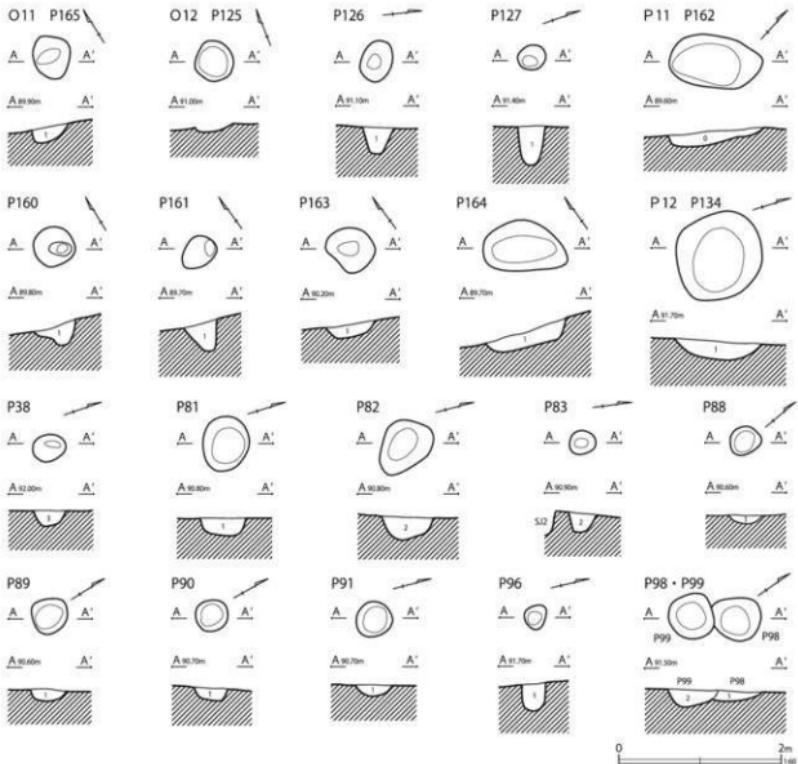
E4 P1091
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1092
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1093 + P1094
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

E4 P1099
1 單褐色土 黑色土層に含む 壤土粒・炭化物粒微量 粘性・しまりやや強い

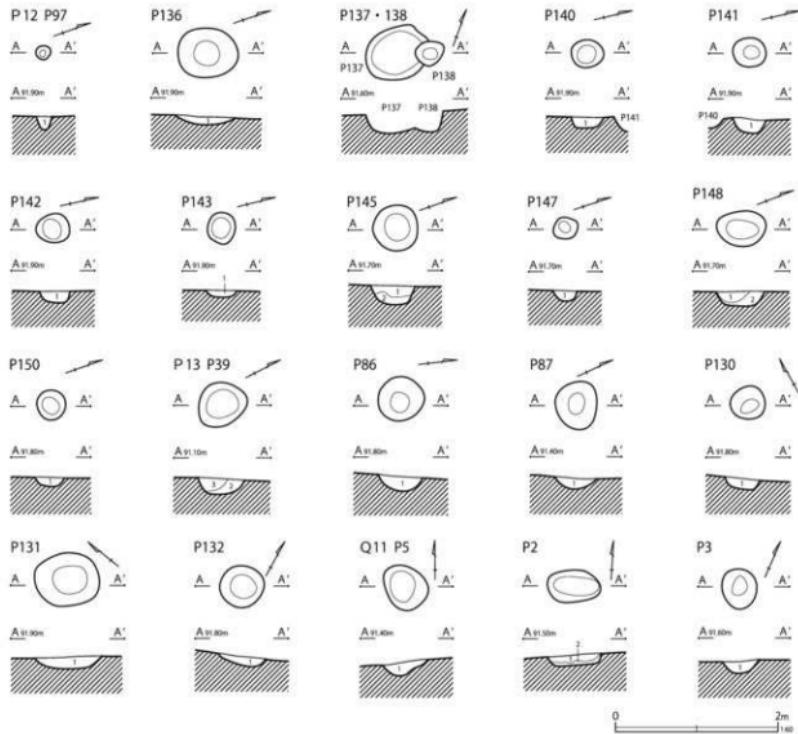
第61図 A区ピット (5)



- O11 P165
1 喀斯特色土 硫化物粒・雲母片・小礫片微量 黏性・しまりややあり
- O12 P126
1 黒褐色土 磷少量
- O12 P127
1 喀斯特色土 砂粒・礫微量 黏性・しまりやや強い
- P11 P162
0 開闢色土 黏性・しまりややあり
- P11 P160 + P161 + P163
1 喀斯特色土・明開闢色土粘微量 黏性ややあり しまりなし
- P11 P164
1 喀斯特色土 廉化物粒・統土粒中量
- P12 P134
1 喀斯特色土を含む 磷微量 硫化物粒・統土粒極微量
- P12 P91
1 喀斯特色土 黒灰褐色土を含む 磷微量 硫化物粒・統土粒極微量 黏性あり しまりやや強い

- P12 P82 + P83
1 黒褐色土 磷微量 硫化物粒極微量 黏性あり しまりやや強い
- P12 P88 + P99
1 黒褐色土 黑色土ブロック少量 砂粒微量 純土・廉化物粒極微量
- P12 P89
1 喀斯特色土 黑色土ブロック少量 砂粒微量
- P12 P90
1 喀斯特色土 黑色土ブロック少量 砂粒微量 純土・廉化物粒極微量
- P12 P91
1 喀斯特色土 黑色土ブロック少量 硫化物粒極微量 黏性・しまりやや強い
- P12 P96
1 喀斯特色土 砂粒微量
- P12 P98 + P99
1 喀斯特色土 黑色土・砂粒微量 纯土・廉化物粒極微量 黏性・しまりやや強い

第62図 B区ピット(1)



P12 P97
1 褐褐色土 黑褐色色・砂粒少量 硬化物粒微量
粘性・しまりあり

P12 P136
1 黑褐色土 砂粒微量 硬化微量
粘性・しまりやや強い

P12 P140 ~ P143
1 褐色土 砂粒含む 粘性あり しまりやや弱い

P12 P145
1 褐褐色土 粘土・砂粒少量 硬化物粒微量
2 黑褐色土 砂粒含む 粘性やや弱い

P12 P147
1 褐色土 砂粒含む しまり弱い

P12 P148
1 褐色土 黑褐色土含む 粘性ややあり
2 褐色土 硬多量

P12 P150
1 海色土 砂粒少量 しまり弱い

P13 P39
2 褐褐色土と黒色土の混土 硬・硬化物微量
3 黑褐色土と黒色土の混土 2と3の境は漸移的 杜穴

P13 P86
1 褐褐色土 硬微量 硬化物粒微量
粘性・しまりやや強い

P13 P87
1 褐褐色土 黑色土ブロック・硬化ロームブロック・砂粒微量
硬土・硬化物粒微量

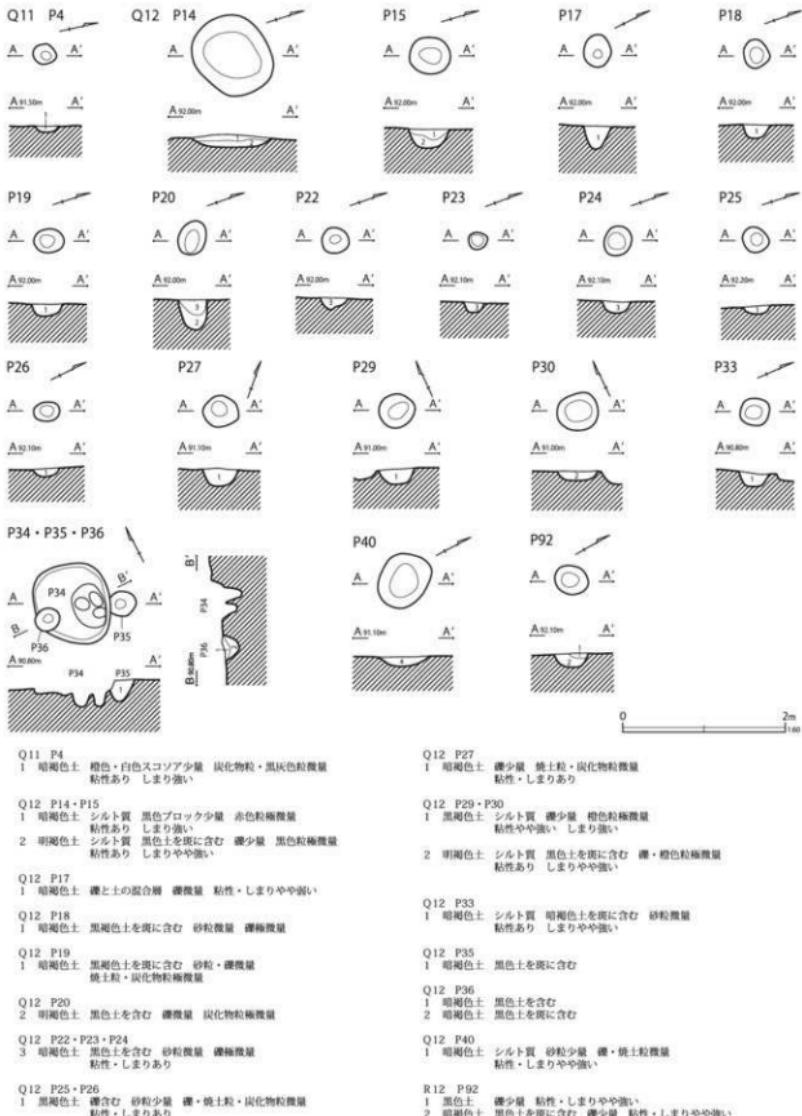
P13 P130
1 褐黃褐色土 硬微量 硬化物粒微量

P13 P131・P132
1 褐褐色土 硬微量 しまり・粘性やや弱い

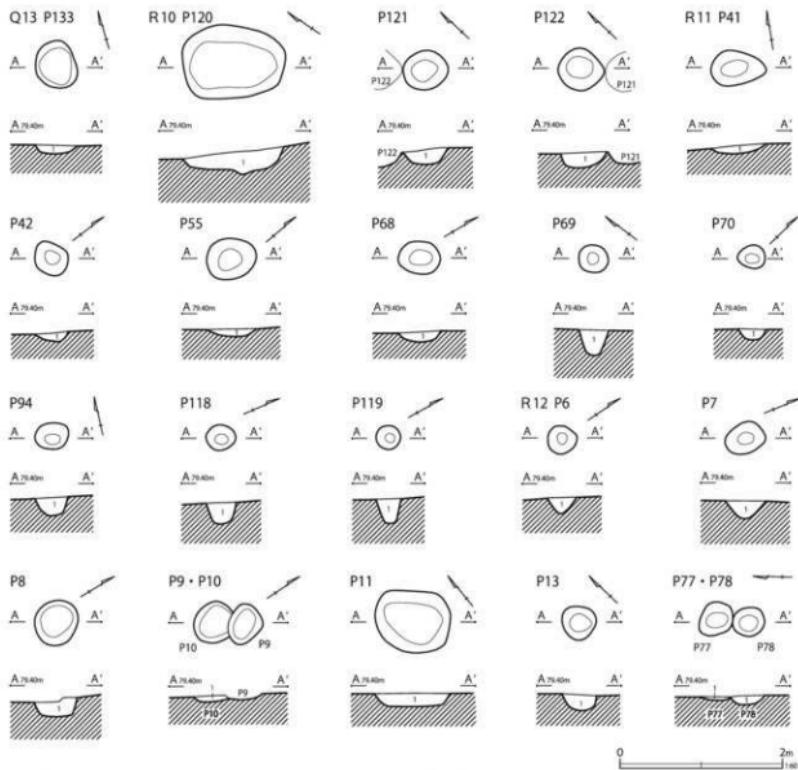
Q11 P5
1 褐褐色土 白色粒微量 硬化物粒微量
粘性あり しまり弱い

Q12 P2・P3
1 褐褐色土 岩盤破片少量 粘性ややあり しまり弱い

第63図 B区ピット (2)



第64図 B区ピット (3)



Q13 P133
1 暗褐色土 粘少量 粘性・しまりあり

R10 P120
1 黒褐色土 粘微量 粘性・しまりやや強い

R10 P121
1 暗褐色土 硬塑微量 粘性・しまりやや強い

R10 P122
1 暗褐色土 黑色土を斑に含む 硬塑微量 粘性・しまりやや強い

R11 P41
1 暗褐色土 烧土粒・炭化物粒・硬微量

R11 P42
1 黑褐色土 砂粒少量 炭化物粒・赤色粘微量

R11 P55
1 暗褐色土 砂粒微量

R11 P68
1 暗褐色土 粘微量 碳化物粒微量 粘性・しまりやや強い

R11 P69
1 暗褐色土 粘微量 碳化物粒微量

R11 P70
1 暗褐色土 黑色土ブロック含む 砂粒少量 烧土粒微量

R11 P94
1 暗褐色土 黑色土を斑に含む 碳化物粒微量 砂粒微量

R11 P118
1 暗褐色土 砂粒・燒土粒・硬微量 粘性・しまりやや強い

R11 P119
1 暗褐色土 シルト質 烧土粒含む 砂粒微量

R12 P6
1 暗褐色土 硬砂粒微量 烧土粒微量 粘性・しまりやや強い

R12 P7
1 暗褐色土 硬微量 しまり・粘性あり

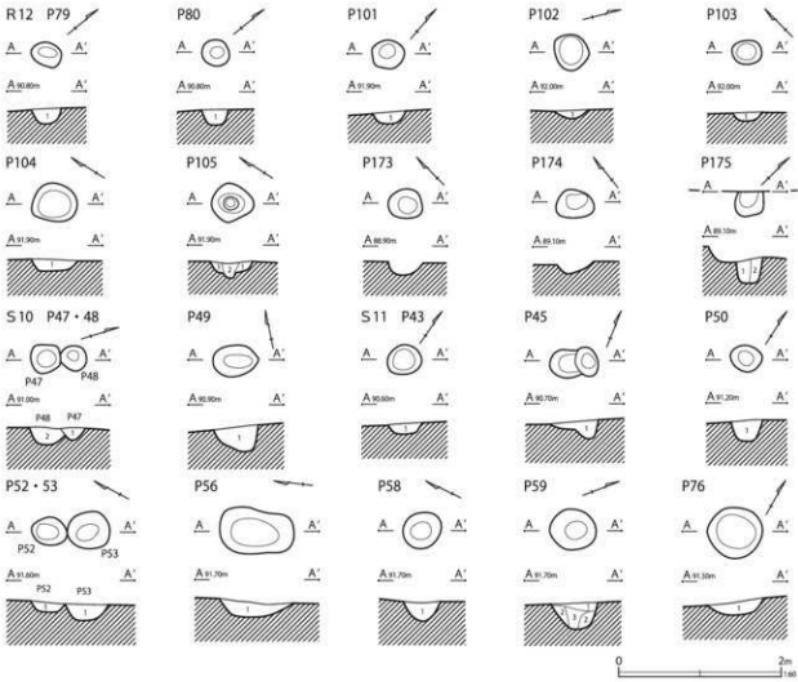
R12 P10
1 黑褐色土 硬砂粒微量 烧土粒微量 粘性・しまりやや強い

R12 P11
1 暗褐色土 硬含む 硬 ($\phi 1\text{ mm}$) 微量 碳化物粒・烧土粒微量

R12 P13
1 暗褐色土 硬微量 しまり・粘性あり

R12 P77 + P78
1 黑褐色土 砂粒少量

第65図 B区ピット (4)



R12 P79
1 喻褐色土 黒褐色土を含む 繪少量

R12 P80
1 黒褐色土 砂粒少量

R12 P101
1 喻褐色土 繪微量 粘性・やや強い しまりあり

R12 P102
1 喻褐色土 粘性・しまりやや強い

R12 P103
1 喻褐色土 黒色土を含む 繪微量 粘性・しまりやや強い

R12 P104
1 喻褐色土 黒色土を含む 砂粒・続土粒微量 繪微量 粘性・しまりやや強い

R12 P105
1 喻褐色土 黒色土を含む 砂粒・続土粒微量 粘性・しまりやや強い
2 喻褐色土 砂粒微量 純化物粒微量 粘性・しまりやや強い

R12 P175
1 黒色土
2 喻褐色土

S10 P47+48
1 喻褐色土 黒色土を含む 繪合む 粘性あり しまりやや強い
2 明赤褐色土を含む

S10 P49
1 喻褐色土

S11 P43
1 喻褐色土 黒色土を斑に含む 繪微量 赤色粒・続土粒微量 粘性あり しまりやや強い

S11 P45
1 黒褐色土 砂粒少量 純化物粒・赤色粒微量

S11 P50
1 喻褐色土 黒色土を含む 繪少量

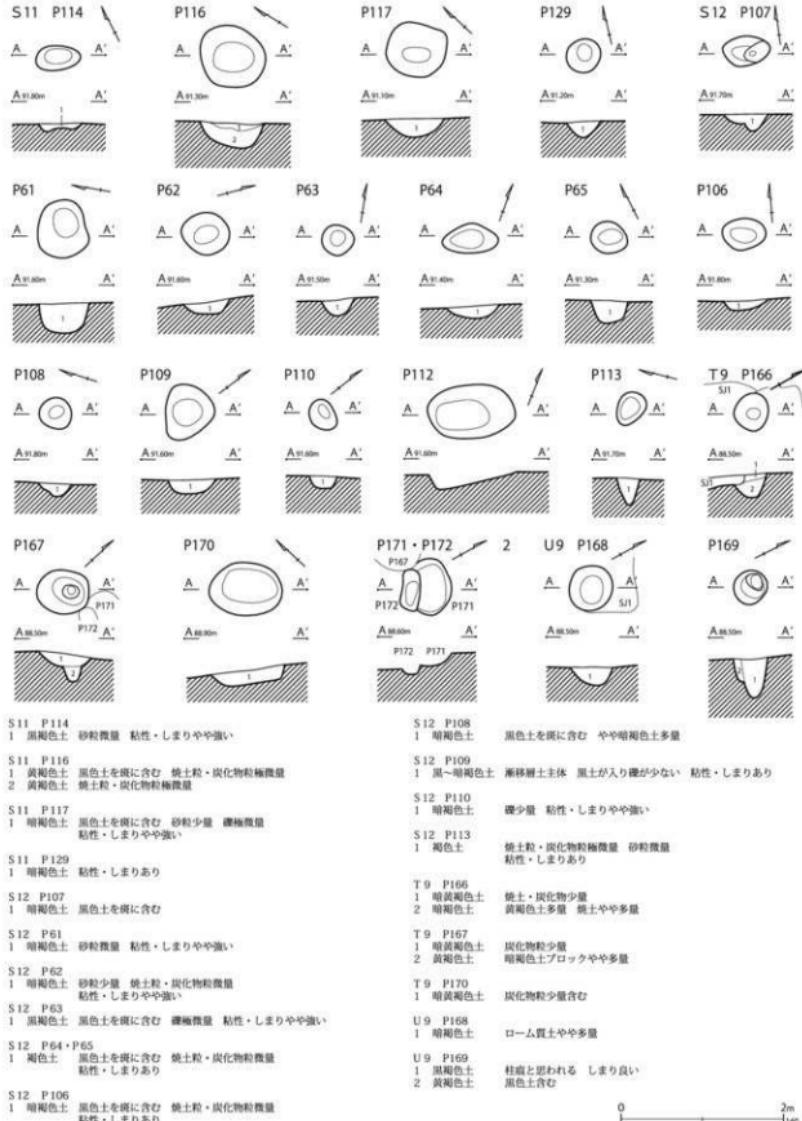
S11 P52
1 喻褐色土 砂粒少量 続土粒微量 粘性・しまりやや強い
2 喻褐色土 繪合む 純化物粒・続土粒微量 粘性・しまりやや強い

S11 P56
1 喻褐色土 黒土が斑状に入る 繪微量 灰・続土粒微量 粘性・しまりやや強い

S11 P58
1 喻~黒褐色土 純土粒・純化物粒微量 繪微量 粘性・しまりやや強い

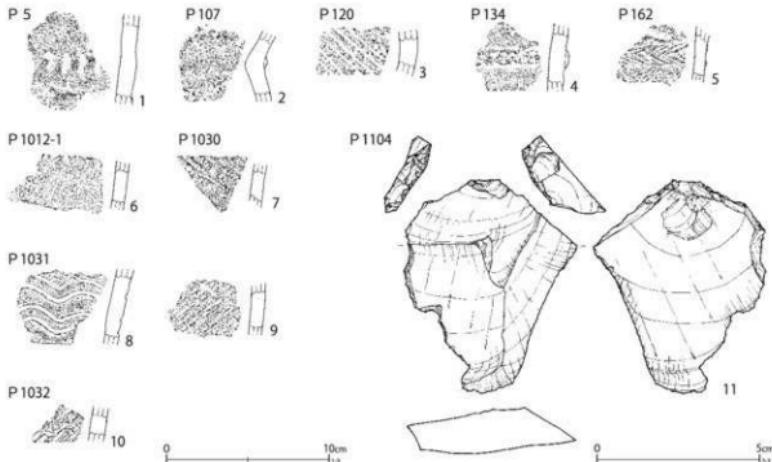
S11 P59
1 喻褐色土 砂粒微量
2 喻褐色土 砂粒微量
3 喻褐色土 繪少量

S11 P76
1 喻褐色土 黒色土を斑に含む 繫微量 赤色粒・続土粒微量 粘性あり しまりやや強い



第67図 B区ピット (6)

番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)	番号	グリッド	長径(m)	短径(m)	深さ(m)
P63	S-12	0.40	0.38	0.18	P103	R-12	0.36	0.30	0.10	P137	P-12	0.76	0.64	0.22
P64	S-12	0.70	0.36	0.16	P104	R-12	0.36	0.26	0.14	P138	P-12	0.34	0.28	0.24
P65	S-12	0.46	0.38	0.28	P105	R-12	0.52	0.46	0.18	P140	P-12	0.40	0.34	0.14
P68	R-11	0.52	0.40	0.12	P106	S-12	0.54	0.40	0.12	P141	P-12	0.40	0.34	0.14
P69	R-11	0.36	0.34	0.30	P107	S-12	0.58	0.38	0.20	P142	P-12	0.42	0.36	0.14
P70	R-11	0.34	0.28	0.12	P108	S-12	0.40	0.38	0.16	P143	P-12	0.38	0.36	0.08
P76	S-11	0.74	0.62	0.16	P109	S-12	0.70	0.58	0.20	P145	P-12	0.56	0.56	0.24
P77	R-12	0.46	0.38	0.04	P110	S-12	0.40	0.30	0.14	P147	P-12	0.32	0.26	0.12
P78	R-12	0.38	0.36	0.12	P112	S-12	1.00	0.66	0.19	P148	P-12	0.60	0.44	0.18
P79	R-12	0.38	0.30	0.18	P113	S-12	0.44	0.32	0.32	P150	P-12	0.36	0.34	0.10
P80	R-12	0.34	0.32	0.18	P114	S-11	0.54	0.30	0.08	P160	P-11	0.52	0.48	0.26
P81	P-12	0.68	0.56	0.22	P116	S-11	0.84	0.74	0.30	P161	P-11	0.46	0.34	0.36
P82	P-12	0.76	0.58	0.28	P117	S-11	0.72	0.64	0.22	P162	P-11	1.14	0.64	0.16
P83	P-12	0.32	0.28	0.22	P118	R-11	0.36	0.32	0.26	P163	P-11	0.60	0.56	0.14
P86	P-13	0.55	0.55	0.16	P119	R-11	0.30	0.30	0.30	P164	P-11	1.04	0.62	0.18
P87	P-13	0.60	0.50	0.14	P120	R-10	1.26	0.90	0.28	P165	O-11	0.50	0.46	0.09
P88	P-12	0.38	0.32	0.10	P121	R-10	0.54	0.48	0.18	P166	T-9	0.46	0.42	0.26
P89	P-12	0.46	0.44	0.14	P122	R-10	0.56	0.52	0.18	P167	T-9	0.64	0.52	0.34
P90	P-12	0.40	0.38	0.14	P125	O-12	0.50	0.46	0.32	P168	U-9	0.54	0.58	0.22
P91	P-12	0.44	0.40	0.14	P126	O-12	0.52	0.38	0.06	P169	U-9	0.42	0.40	0.48
P92	Q-12	0.42	0.34	0.16	P127	O-12	0.34	0.30	0.48	P170	T+U-9	0.90	0.74	0.16
P94	R-11	0.38	0.38	0.22	P129	S-11	0.42	0.40	0.20	P171	T-9	0.70	(0.38)	0.14
P96	P-12	0.30	0.26	0.32	P130	P-13	0.54	0.50	0.12	P172	T-9	0.50	0.22	0.44
P97	P-12	0.18	0.16	0.16	P131	P-13	0.80	0.66	0.14	P173	S-9	0.42	0.36	0.16
P98	P-12	(0.58)	0.52	0.12	P132	P-13	0.54	0.52	0.12	P174	S-9	0.46	0.34	0.14
P99	P-12	0.54	0.54	0.22	P133	Q-13	0.58	0.48	0.10	P175	S-9	0.34	(0.32)	0.30
P101	R-12	0.40	0.30	0.14	P134	P-11	1.18	1.06	0.22					
P102	R-12	0.44	0.40	0.10	P136	P-12	0.74	0.60	0.10					



第68図 ピット出土遺物

の刻みを施している。6はP1012出土の縄文施文の胴部破片で、細かなR L縄文を施文することから諸磯b式の古い段階に位置付けられよう。7はP1031出土の縄文施文土器で、R Lの細い縄文上にR Lの太い縄文を施文しているものと思われる。8、9はP1031出土の諸磯b式土器で、8は無地

文上に半截竹管の平行波状文を施文している。文様帶下端部を沈線で区画しており諸磯b式に比定されようか。9は単節LRを施文する胴部破片である。10はP1032出土の撚り戻し状の無節LR縄文を施文する胴部破片で諸磯b式に比定されよう。

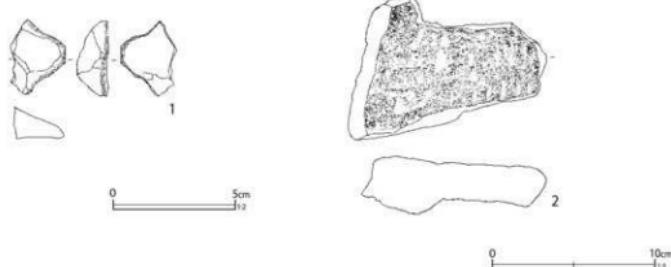
第16表 A区ピット出土石器観察表（第68図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
11	A区P1104	剥片	黒曜石	6.6	5.4	1.7	34.1	No.1

(4) グリッド出土遺物

中・近世のグリッド出土遺物は、陶磁器片などがわずかに確認されたのみで、いずれも小破片であった。そのため、ここでは、2点のみ図示した。

第69図1は、石英製の火打石である。2は、用途不明の石材である。第12号焼土跡の上層より出土しているが、流れ込みの可能性が高い。表面には工具痕が複数認められ被熱により赤色化している。



第69図 グリッド出土遺物

第17表 グリッド出土遺物観察表（第69図）

番号	出土位置	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
1	V-9	火打石	石英	3.1	2.3	1.3	7.4	No.508
2	F-20	不明	砂岩	[8.8]	[12.3]	[4.2]	343.1	No.1 赤色化 工具痕のある石材

V 自然科学分析

1 出土炭化材の樹種同定（1）

1はじめに

埼玉県嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、一部の試料について放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

試料は、時期不明の第6号焼土跡から出土した炭化材1点、平安時代の第1号炭焼窓跡から出土した炭化材1点、9世紀中頃～後半の第1号住居跡から出土した炭化材4点の、計6点である。なお、放射性炭素年代測定の結果、第6号焼土跡の試料No. 1は平安時代前期～中期、第1号炭焼窓跡の試料No. 2は平安時代中期～鎌倉時代の暦年代を示した。

各試料について、復元直径と残存半径、残存年輪数の計測を行なった。復元直径は、1cm刻みの同心円に試料を当てて求めた。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を数えた。

樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VE-9800）にて検鏡および写真撮影を行なった。

3 結果

同定の結果、広葉樹のコナラ属クヌギ節（以下、クヌギ節）とブナ科、カエデ属、ミズキ属の、計4分類群がみられた。クヌギ節とカエデ属が各2点、ブナ科とミズキ属が各1点であった。同定結果を第18表に、一覧を第19表に示す。以

第18表 樹種同定一覧

樹種	時期	平安時代	9世紀中頃	平安時代中期	合計
		前期～中期	～後半	～鎌倉時代	
種類	FP6	SJ1	SF1		
	コナラ属クヌギ節		1	1	2
	ブナ科	1			1
	カエデ属		2		2
	ミズキ属		1		1
	合計	1	4	1	6

下に同定された材の特徴を記載し、第72・73図に走査型電子顕微鏡写真を示す。

(1) コナラ属クヌギ節 *Quercus sect. Aegilops* ブナ科

第70図 1a-1c (No. 2), 2a-2c (No. 6)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

(2) ブナ科 *Quercus*

第70図 3a-3c (No. 1)

年輪のはじめに道管が並ぶ環孔材であるが、節部のため横断面の形状が不明瞭であった。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。

以上の特徴により、ブナ科までの同定に留めた。

(3) カエデ属 *Acer* ムクロジ科

第71図 4a-4c (No. 4), 5a-5c (No. 5)

小型の道管が単独ないし2～3個複合してやや疎らに散在する散孔材である。木部纖維の壁の厚さの違いで、木口面に雲紋状の文様がみられる。

道管は単穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は同性で、幅1~6列となる。

カエデ属にはイタヤカエデやウリハダカエデなどがあり、代表的なイタヤカエデは各地に普通にみられる落葉高木の広葉樹である。材はやや重硬で、切削加工はやや困難である。

(4) ミズキ属 *Swida* ミズキ科

第71図 6 a~6 c(No. 3)

小型の道管がほぼ単独で散在する散孔材である。晩材部では、道管の径が減じる傾向がみられる。道管は20~40段程度の階段穿孔を有する。放射組織は上下端1~3列が直立ないし方形となる異性で、幅4~8列となる。

ミズキ属にはミズキやクマノミズキなどがあり、丘陵地や平地に分布する落葉中高木の広葉樹である。代表的なミズキの材は、やや硬いが、切削加工は容易である。

4まとめ

第6号焼土跡の炭化材は、ブナ科であった。試料は燃料材として利用されていたと考えられる。ブナ科の木材は、全般的に火力は高くないが、

長時間燃焼するという材質をもつ（伊東ほか, 2011）。

9世紀中頃～後半の住居跡である第1号住居跡の炭化材は、クヌギ節とカエデ属、ミズキ属であった。試料はいずれも焼けた建築材と考えられる。クヌギ節とカエデ属、ミズキ属は、いずれも堅硬な部類の樹種であり（伊東ほか, 2011）、堅硬な樹種を建築材として利用していたと考えられる。埼玉県内で確認されている平安時代の堅穴住居跡の建築材では、クリやクヌギ節、コナラ節を中心とした堅硬な広葉樹が多くみられる（伊東ほか, 2012）。

第1号炭焼窯跡の平安時代中期～鎌倉時代の炭化材は、クヌギ節であった。試料は燃料材もしくは焼成した炭製品と考えられる。復元直径は2.0cmであった。クヌギ節は、燃料材としてみると火力は高くないが、長時間燃焼するという材質をもち、現在でも薪炭材として多く利用されている（伊東ほか, 2011）。埼玉県内で確認されている平安時代頃の炭窯跡の炭化材では、クヌギ節およびコナラ節が多く確認されており（伊東・山田編, 2012）、傾向は一致する

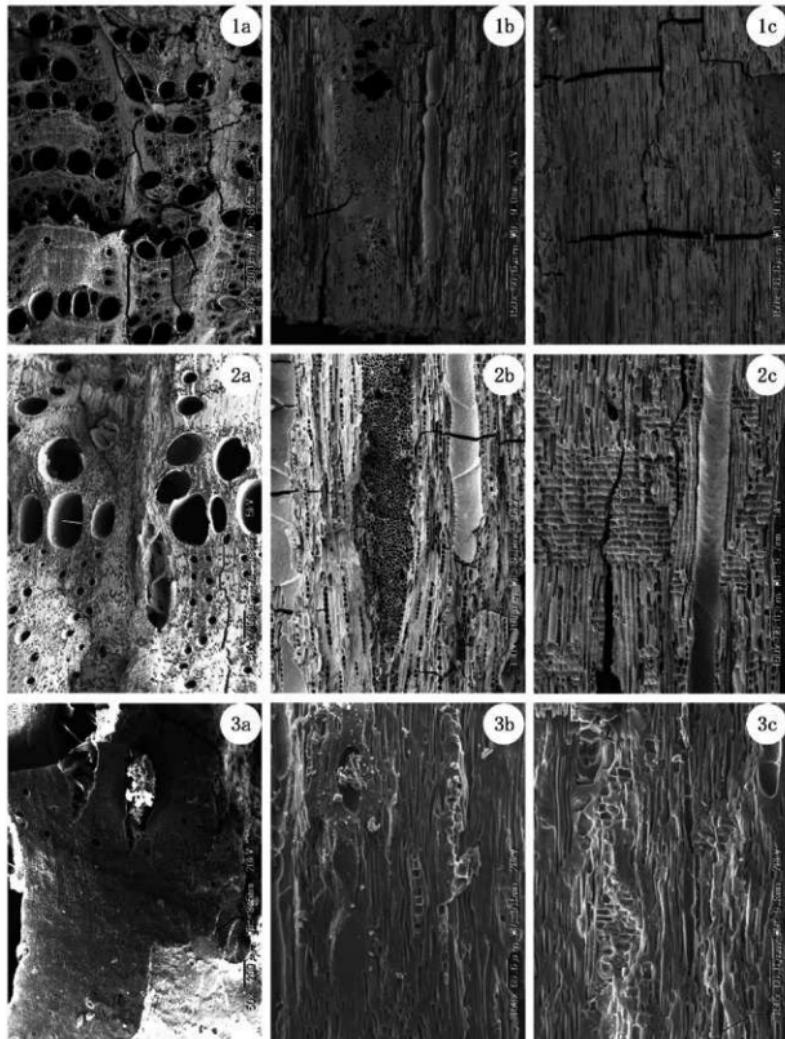
引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和徳（2011）日本有用樹木誌、238p, 海青社。

伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p, 海青社。

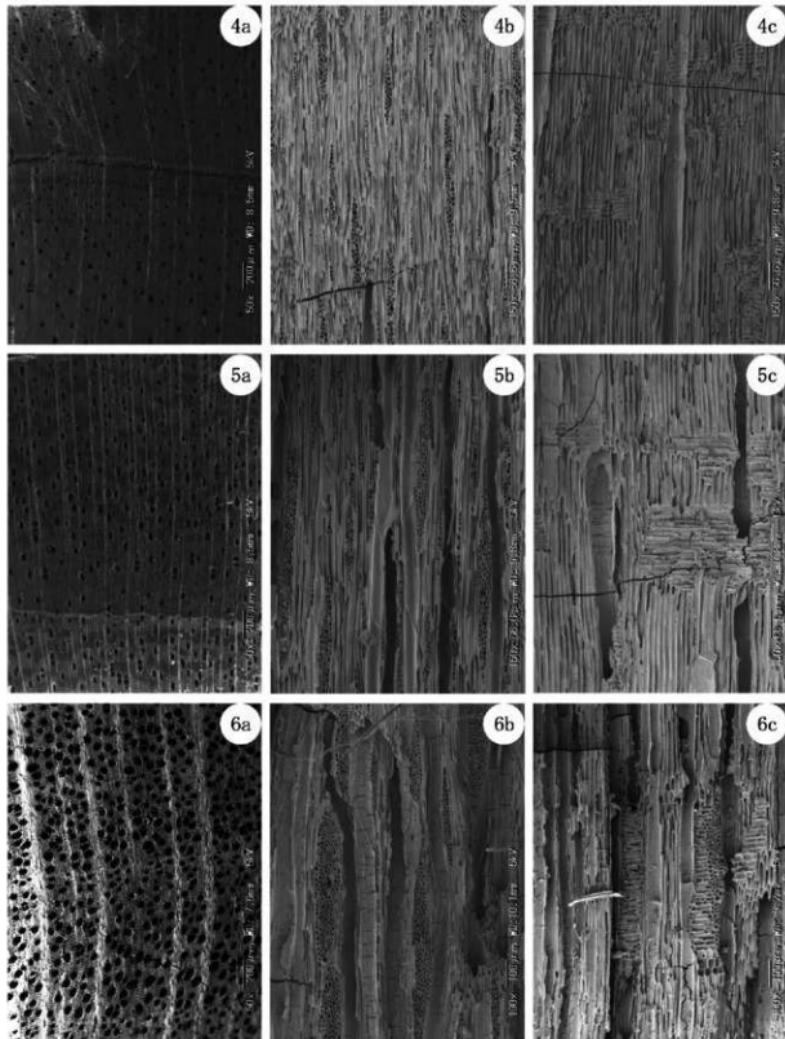
第19表 炭化材の樹種同定結果一覧

試料No.	調査区	遺構名	遺物No.	器種	樹種	残存半径 (cm)	残存 年輪数	復元 直径 (cm)	遺構の 推定時期	年代測定 による時期	年代 測定番号
1	B区	FP6		炭化材	ブナ科	-	-	-	時期不明	平安時代前期 ～中期	P L D - 38858
2		SF1	4	炭化材	コナラ属 クヌギ節	1.0	15	2.0	平安時代	平安時代中期 ～鎌倉時代	P L D - 38859
3		SJ1	3	炭化材	ミズキ属	2.0	9	4.0	9世紀中頃～後半	-	
4		SJ1	4	炭化材	カエデ属	3.0	15	6.0	9世紀中頃～後半	-	
5		SJ1	5	炭化材	カエデ属	4.5	19	9.0	9世紀中頃～後半	-	
6		SJ1	6	炭化材	コナラ属 クヌギ節	4.0	9	10.0	9世紀中頃～後半	-	



1a-1c. コナラ属クスギ節 (No. 2)、2a-2c. コナラ属クスギ節 (No. 6)、3a-3c. ブナ科 (No. 1)
a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第70図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (1)



4a-4c. カエデ属 (No. 4)、5a-5c. カエデ属 (No. 5)、6a-6c. ミズキ属 (No. 3)

a:横断面、b:接線断面、c:放射断面

第71図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真 (2)

2 出土炭化材の樹種同定（2）

1はじめに

比企郡嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材の樹種同定を行った。なお、同じ試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

2 試料と方法

試料は、第2号炭焼窯跡から出土した炭化材4点である。調査所見による推定時期は平安時代である。

樹種同定に先立ち、肉眼観察と実体顕微鏡観察による形状の確認と、残存年輪数および残存径の計測を行った。その後、カミソリまたは手で3断面（横断面・接線断面・放射断面）を割り出し、試料台に試料を両面テープで固定した。次に、イオンスパッタで金コーティングを施し、走査型電子顕微鏡（KEYENCE社製 VHX-D510）を用いて樹種の同定と写真撮影を行った。

3 結果

樹種同定の結果、4点ともコナラ属アカガシ亜属であった。

以下に、同定根拠となった木材組織の特徴を記載し、走査型電子顕微鏡写真を第72図に示す。

（1）コナラ属アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科 第72図 1a-1c

引用文献

- 平井信二（1996）木の大百科、394p、朝倉書店。
伊東隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学—出土木製品用材データベースー、449p、海青社。
伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、海青社。

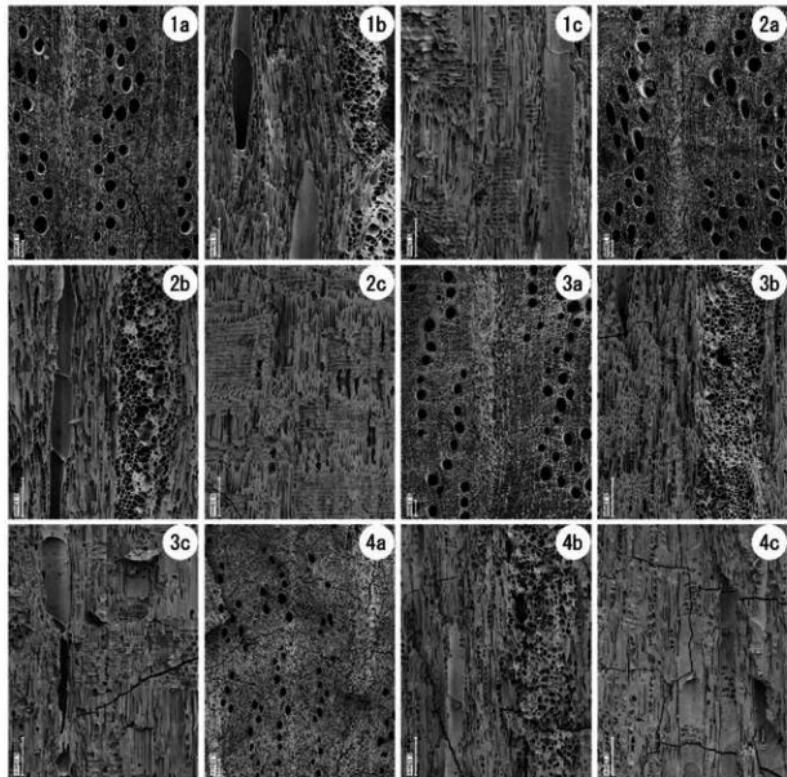
（分析No. 1）、2a-2c（分析No. 2）、3a-3c（分析No. 3）、4a-4c（分析No. 4）

円形でやや大型の道管が、単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管の穿孔は單一である。放射組織は同性で、單列と広放射組織がある。

アカガシ亜属は主に暖帯に分布する常緑高木で、アカガシやシラカシ、ツクバネガシ、アラカシなど8種がある。イチイガシ以外は木材組織からは識別困難なため、イチイガシを除いたアカガシ亜属とする。材は、きわめて堅硬および強韌で、水湿に強い。

4 考察

第2号炭焼窯跡から出土した炭化材4点は、いずれもアカガシ亜属であった。なお、同じ第2号炭焼窯跡出土の炭化材で、今回は分析対象外となった試料も、実体顕微鏡で観察したところ、アカガシ亜属のみが確認された。アカガシ亜属の材は非常に重硬で、燃料材にすると火持ちが良い（伊東ほか、2011）。関東地方では、薪炭材にはクヌギ節が多用される傾向があるが、埼玉県内の遺跡では、鳩山窯跡群の古墳時代末期～平安時代前期の窯跡出土炭化材で、クヌギ節やクリとともにアカガシ亜属が確認されている（伊東・山田編、2012）。



1a-1c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 1) 、2a-2c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 2) 、3a-3c. コナラ属
アカガシ亜属 (No. 3) 、4a-4c. コナラ属アカガシ亜属 (No. 4)

a : 横断面、b : 接線断面、c : 放射断面

第72図 炭化材の走査型電子顕微鏡写真

3 放射性炭素年代測定（1）

1はじめに

埼玉県比企郡嵐山町に所在する油面遺跡より検出された試料について、加速器質量分析法(AMS法)による放射性炭素年代測定を行った。なお、同一試料を用いて樹種同定も行われている。

2 試料と方法

測定試料は、遺構の性格や時期が不明な第6号焼土跡から採取された炭化材1点(PLD-38858)と、平安時代の遺構と推測されている第1号焼窯跡から採取された炭化材1点(PLD-38859)の計2点である。測定試料の情報、調製データを第20表に示す。なお、樹種同定の結果、PLD-38858はブナ科、PLD-38859はコナラ属クヌギ節とされている（樹種同定の項参照）。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

第21表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比($\delta^{13}\text{C}$)、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、第73図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁

を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代(yrBP)の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差($\pm 1\sigma$)は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCal4.3（較正曲線データ：IntCal13）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCa1の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

第20表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-38858	遺構：FP6 遺物：Na4	種類：炭化材（ブナ科） 試料の性状：最終形成年輪以外部位不明	超音波洗浄処理 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2ml/l、水酸化ナトリウム：1.0ml/l）
PLD-38859	遺構：SF1 遺物：Na4	種類：炭化材（コナラ属クヌギ節） 試料の性状：最終形成年輪	超音波洗浄処理 有機溶剤処理：アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2ml/l、水酸化ナトリウム：1.0ml/l）

第21表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-38858	-22.75 ± 0.18	1077 ± 22	1075 ± 20	903–919 cal AD (16. 3%)	897–925 cal AD (22. 3%)
				965–998 cal AD (46. 8%)	943–1018 cal AD (73. 1%)
				1005–1012 cal AD (5. 1%)	
PLD-38859	-26.39 ± 0.23	889 ± 23	890 ± 25	1052–1081 cal AD (24. 9%)	1045–1095 cal AD (32. 7%)
				1152–1192 cal AD (38. 4%)	1119–1215 cal AD (62. 7%)
				1198–1205 cal AD (4. 9%)	

4まとめ

各測定試料の暦年較正結果のうち、 2σ 暦年範囲（確率95.4%）に着目すると、第6号焼土跡から採取された炭化材（PLD-38858）は、897–925 cal AD (22.3%)および943–1018 cal AD (73.1%)の年代値が得られた。この年代値は、平安時代前期～中期に相当する。

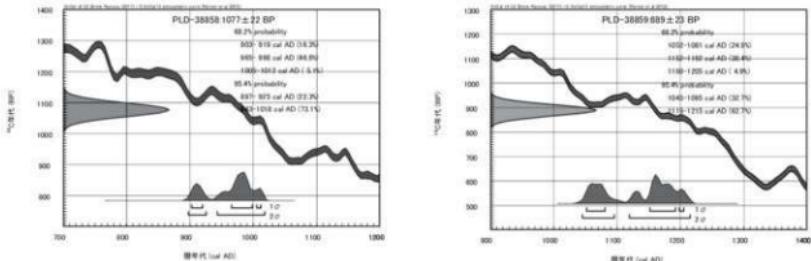
一方、第1号炭焼窯跡から採取された炭化材（PLD-38859）で、1045–1095 cal AD (32.7%)および1119–1215 cal AD (62.7%)の年代値が得られた。この年代値は、平安時代中期～鎌倉時代に相当する。発掘調査所見では、第1号炭焼窯跡は平安時代の遺構と推測されており、炭化材（PLD-38859）の年代値は調査所見に対し

て整合的である。

なお、木材の年代測定を行う場合、最終形成年輪部分を測定すると枯死もしくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の焼土跡FP6出土の炭化材（PLD-38858）は、最終形成年輪が残存しておらず、残存している最外年輪のさらに外側にも年輪が存在していたはずである。したがって、木材が実際に枯死もしくは伐採されたのは、測定結果の年代よりもやや新しい時期であった可能性がある。一方の第1号炭焼窯跡の炭化材（PLD-38859）は、最終形成年輪が残存していたため、測定結果は枯死もしくは伐採された年代を示していると考えられる。

参考文献

- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.
- 中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3–20, 日本第四紀学会.
- Reimer, P.J., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Hatte, C., Heaton, T.J., Hoffmann, D.L., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., Manning, S.W., Niu, M., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Staff, R.A., Turney, C.S.M., and van der Plicht, J. (2013) IntCal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0–50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 55(4), 1869–1887.



第73図 历年較正結果

4 放射性炭素年代測定（2）

1 はじめに

比企郡嵐山町の油面遺跡から出土した炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。

2 試料と方法

試料は、第2号炭焼窯跡から出土した炭化材4点である。調査所見による推定時期は平安時代である。試料は、いずれも最終形成年輪が残存していた。

測定試料の情報、調製データは第22表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製 1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

3 結果

第23表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代、暦年較正結果を、第74図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後

暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

¹⁴C年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。¹⁴C年代（yrBP）の算出には、¹⁴Cの半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した¹⁴C年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の¹⁴C年代がその¹⁴C年代誤差内に入る確率が68.27%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。暦年較正とは、大気中の¹⁴C濃度が一定で半減期が5568年として算出された¹⁴C年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の¹⁴C濃度の変動、および半減期の違い（¹⁴Cの半減期5730±40年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

¹⁴C年代の暦年較正には0xCa14.4（較正曲線データ：IntCa120）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、0xCa1の確率法を使用して算出された¹⁴C年代誤差に相当する68.27%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.45%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は¹⁴C年代の確率分

第22表 測定試料および処理

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-42486	遺構: SF2	種類: 炭化材 (コナラ属アカガシ亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄処理 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2ml/l, 水酸化ナトリウム: 1.0ml/l)
PLD-42487	遺構: SF2	種類: 炭化材 (コナラ属アカガシ亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄処理 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2ml/l, 水酸化ナトリウム: 1.0ml/l)
PLD-42488	遺構: SF2	種類: 炭化材 (コナラ属アカガシ亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄処理 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2ml/l, 水酸化ナトリウム: 1.0ml/l)
PLD-42489	遺構: SF2	種類: 炭化材 (コナラ属アカガシ亜属) 試料の性状: 最終形成年輪 状態: dry	超音波洗浄処理 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2ml/l, 水酸化ナトリウム: 1.0ml/l)

布を示し、二重曲線は曆年較正曲線を示す。

4 考察

以下各試料の曆年較正結果のうち 2σ 曆年代範囲（確率95.45%）に着目して結果を整理する。

PLD-42486は、1037-1162 cal AD (95.45%) の

曆年代であった。PLD-42488は、1036-1168 cal AD (94.91%) および1171-1174 cal AD (0.54%) の曆年代であった。PLD-42489は、1037-1168 cal AD (94.85%) および1171-1174 cal AD (0.60%) の曆年代であった。この3点は、11世紀前半～12世紀後半で、平安時代中期～後期の

第23表 放射性炭素年代測定および曆年較正の結果

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	曆年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C年代を曆年代に較正した年代範囲	
				1 σ 曆年代範囲	2 σ 曆年代範囲
PLD-42486	-26.06 \pm 0.26	933 \pm 21	935 \pm 20	1046-1054 cal AD (7.43%) 1057-1084 cal AD (23.05%) 1094-1104 cal AD (8.04%) 1123-1158 cal AD (29.75%)	1037-1162 cal AD (95.45%)
PLD-42487	-25.08 \pm 0.24	909 \pm 20	910 \pm 20	1049-1081 cal AD (37.76%) 1134-1137 cal AD (2.15%) 1152-1177 cal AD (23.64%) 1193-1201 cal AD (4.71%)	1044-1086 cal AD (40.85%) 1092-1106 cal AD (4.55%) 1118-1183 cal AD (38.37%) 1184-1213 cal AD (11.67%)
PLD-42488	-25.03 \pm 0.19	926 \pm 20	925 \pm 20	1047-1083 cal AD (36.76%) 1095-1103 cal AD (5.95%) 1125-1141 cal AD (13.51%) 1147-1161 cal AD (12.05%)	1036-1168 cal AD (94.91%) 1171-1174 cal AD (0.54%)
PLD-42489	-24.49 \pm 0.21	925 \pm 20	925 \pm 20	1047-1083 cal AD (37.58%) 1095-1102 cal AD (5.54%) 1125-1141 cal AD (13.00%) 1148-1161 cal AD (12.15%)	1037-1168 cal AD (94.85%) 1171-1174 cal AD (0.60%)

暦年代を示した。PLD-42487は、1044–1086 cal AD (40.85%)、1092–1106 cal AD (4.55%)、1118–1183 cal AD (38.37%)、1184–1213 cal AD (11.67%)の暦年代であった。これは11世紀中頃～13世紀前半で、平安時代中期～鎌倉時代の暦年代である。

木材は、最終形成年輪部分を測定すると枯死も

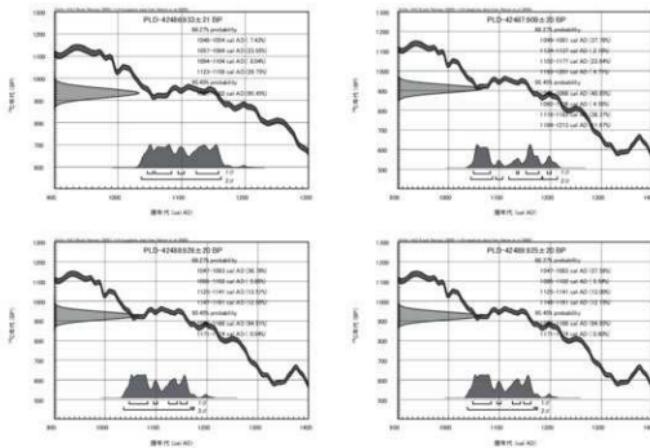
しくは伐採年代が得られるが、内側の年輪を測定すると内側であるほど古い年代が得られる（古木効果）。今回の試料はいずれも最終形成年輪を有しており、測定結果は木材の伐採時期を示している。今回の年代測定で得られた暦年代、調査所見による推定時期である平安時代に対して整合的であった。

参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51(1), 337–360.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の14C年代編集委員会編「日本先史時代の14C年代」：3–20, 日本第四紀学会.

Reimer, P.J., Austin, W.E.N., Bard, E., Bayliss, A., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Butzin, M., Cheng, H., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kromer, B., Manning, S.W., Muscheler, R., Palmer, J.G., Pearson, C., van der Plicht, J., Reimer, R.W., Richards, D.A., Scott, E.M., Southon, J.R., Turney, C.S.M., Wacker, L., Adolphi, F., Büntgen, U., Capone, M., Fahrni, S.M., Fogtmann-Schulz, A., Friedrich, R., Köhler, P., Kudsk, S., Miyake, F., Olsen, J., Reinig, F., Sakamoto, M., Sookdeo, A. and Talama, S. (2020) The IntCal20 Northern Hemisphere radiocarbon age calibration curve (0–55 cal kBP). Radiocarbon, 62(4), 725–757, doi:10.1017/RDC.2020.41. <https://doi.org/10.1017/RDC.2020.41> (cited 12 August 2020)



第74図 暦年較正結果

VI 調査のまとめ

油面遺跡における今回の調査では、縄文時代の住居跡4軒、集石土壙1基、土壙8基、焼土跡25基、遺物包含層2箇所、古代の住居跡1軒、炭焼窯跡2基、土壙1基、中・近世の溝跡3条、道路跡7条、ピット224基が確認された。

遺跡の周辺は、工業団地やゴルフ場開発によつて広範囲が調査されたことで既に多くの遺跡の存在が知られる地域である。そこで本項では、特に尾根沿いにつながる滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群（第75図2～22）について併せて概観しながら、本遺跡の調査成果について時代ごとに確認していく。

1 縄文時代の様相

A区西尾根端部の平場に位置する第3、4号住居跡は、斜面方向への土砂の流出による削平が進んでおり掘り込みの一部は失われていたが、出土

遺物から縄文時代前期後半諸磯b式期に属するものと考えられる。また、B区南尾根に位置する第2、5号住居跡は、掘り込みが完全に失われていた。一部が重複するが新旧関係は不明である。しかし、住居跡の西側斜面には、諸磯b式期を中心とする遺物包含層が形成されており、第2、5号住居跡も諸磯b式期であると考えられる。ここで、西側の谷を隔てて立地する遺跡に目を転じてみると、尺尻遺跡（第2図93）からは諸磯b式期の住居跡1軒が、尺尻北遺跡（第2図92）からは諸磯c式期の住居跡1軒が確認されており、当該地域には、諸磯式期の住居跡が点在する様子が認められる。

住居跡以外の遺構については、出土遺物を伴うものが少なく時期決定が困難であったが、第13号土壙や、第19号土壙からは諸磯b式期の土器片がわずかながら出土している。このように、遺構出



2 柳沢A遺跡	5 ニツ沼西遺跡	8 山田谷遺跡	11 細沼北遺跡	14 天裏遺跡	17 西友遺跡	20 年中坂B遺跡
3 大平遺跡	6 台田巣A遺跡	9 ニツ沼南遺跡	12 申西遺跡	15 用土庵A遺跡	18 中尾遺跡	21 鰐沢遺跡
4 ニツ沼北遺跡	7 台田巣B遺跡	10 柳沢B遺跡	13 実遺跡	16 用土庵B遺跡	19 細沼東遺跡	22 年中坂A遺跡

第75図 油面遺跡と周辺の遺跡の立地

土の土器の多くは諸磯式期に属する。一方で、A区、B区に形成されていた遺物包含層では、主体となる遺物は縄文時代前期諸磯式期のものであるが、A区遺物包含層では、早期から中期まで、B区遺物包含層では、早期から後期初頭にかけての土器片が出土している。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群中の複数の遺跡で集石土壙や、調査区内からは多時期にわたる土器片が多量に出土し、本遺跡と似た様相を呈する。

今回の調査の成果を合わせると、この地域では縄文時代前期においては、1、2軒の小さな集落が、時期をずらしながらも尾根ごとに点在し、前期末葉まで継続的に集落が形成されている点が特徴といえよう。

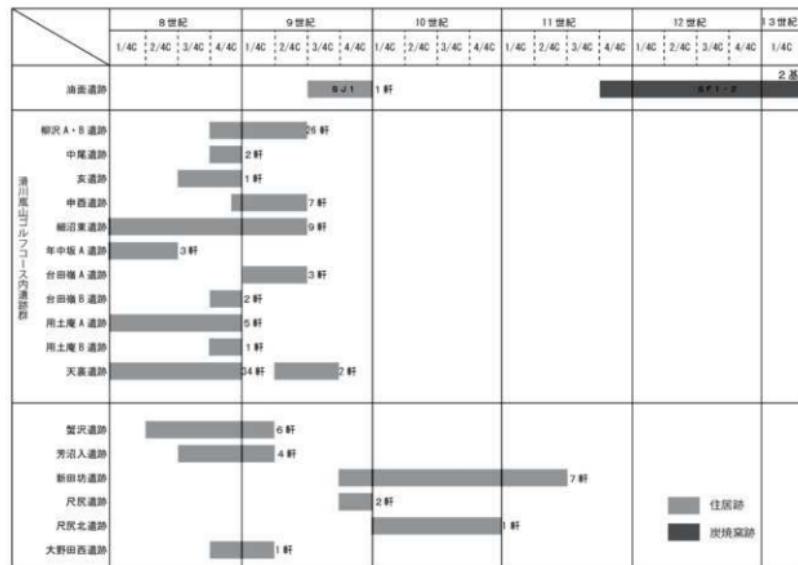
さらに本調査区では、遺構の存在は確認されなかつたが、出土した遺物から、縄文時代早期から後期初頭にかけて、丘陵内の活動が行われていたものと推察される。

2 古代の様相

確認された古代の遺構は少なく、分布状況も調査区内に点在する様相を呈する。

まず、B区南尾根の端部に位置する第1号住居跡であるが、コの字状口縁をもつ土師器壺の出土などから、時期は9世紀後半に属するものと考えられる。紡錘車が2点、袋状鉄斧1点が出土し、丘陵内の資源を利用し生産活動を行っていた者の住まい、あるいは一時的な作業場としての性格が考えられる。

次に、2基検出された炭焼窯跡のうち、第1号炭焼窯跡は、B区南尾根の西側斜面に位置する。出土した炭化材の自然科学分析によって、時期は11世紀中葉から13世紀初頭であり、炭化材の樹種は、軟質の木材であるクヌギ節であることが解った。対して、A区西尾根に位置する第2号炭焼窯跡は、第1号炭焼窯よりも規模が大きく、また、底面には3条の溝状施設が付帯し、第1号炭



第76図 油面遺跡と周辺の遺跡の住居跡等時期分布

焼窯跡との形態の違いは明瞭である。出土した炭化材の自然科学分析によれば、時期は11世紀後半から12世紀後半、および11世紀中頃から13世紀前半であり、炭化材の樹種は、いずれも硬質の木材であるコナラ属アカガシ亜属であることが解った。2基の炭焼窯跡は、時期的に近いものの、検出された樹種が異なる点が留意される。

最後に、油面遺跡が立地する丘陵における古代の土地利用状況について確認してみたい。本調査区内の遺構では、まず9世紀後半に住居跡1軒が作られ、少なくとも11世紀末頃までの断絶の後炭焼窯が築造されている。一方で、第76図に示した周辺遺跡の住居跡の時期と比較すると、滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群では、8世紀頃より住居が造られ始めることがわかる。最も多くの住居跡が確認された天裏遺跡（第75図14）では、8世紀代には34軒の住居跡が造られるが、9世紀にはいると数を大きく減じていることがわかる。滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群と本調査区の第1号住居跡をあわせてみてみると、丘陵内に住居跡の進出が開始されるのは8世紀頃からであり、第1号住居跡はその活動の終焉時期に位置付けられよう。

その後、第1・2号炭焼窯跡が築造される11世紀末頃までは、本丘陵内に遺構は認められないが、谷を隔てた隣の丘陵に立地する新田坊遺跡（第3

図94）には、9世紀末から11世紀中葉まで住居跡が確認される。これらの住居跡のうち4軒で住居跡内に炉跡状の浅い掘り込みが確認され、大量の焼土や鉄製品が出土するなど、工房的な特徴が指摘されている。

以上のことから、本丘陵周辺の土地利用は、8世紀頃より始まり、9世紀末には一旦収束に向う。その後、工房的性格を有する新田坊遺跡の住居跡や炭焼窯の築造など、丘陵への関り方を変えながら、13世紀初頭頃まで当該地域の土地利用が継続したものと推察される。

3 中・近世の様相

中世の遺構や遺物は、本調査では確認されていないが、戦国時代には周辺に杉山城跡や越畠城跡が立地し、防衛において重要な地域であったことが推察される。

近世の遺構は、溝跡と道路跡が確認されており、第1・2号溝跡と第1号道路跡は一連のものと考えられる。道路跡は、尾根沿いに確認されている。年中坂A遺跡（第75図22）においても、時期は不明ながら類似する道路状遺構が2条確認されている。

調査区内からは、上記の遺構と併せて、近世・近代の陶磁器片や火打石がわずかに出土しており、丘陵内で人々が活動した痕跡が残されている。

引用・参考文献

- 笠原仁史 2018 「群馬県の古代製炭遺構一穴窯タイプを中心とした集成ー」『地域考古学』3号 地域考古学研究会
- 埼玉県教育委員会 1979 『越畠跡』埼玉県遺跡発掘調査報告書第20集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1992 『蟹沢・芳沼入・芳沼入下・新田坊・尺尻・尺尻北・大野田遺跡』
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第119集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1994 『大野田西遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第138集
- 埼玉県埋蔵文化財調査事業団 2002 『谷ツ遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第282集
- 滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群発掘調査会 1997 『滑川嵐山ゴルフコース内遺跡群』
- 橋口清之 1993 『日本木炭史』講談社学術文庫 1076 講談社
- 水口由紀子 2002 「発掘された埼玉県内の炭焼窯—古代の事例を中心にしてー」『研究紀要』第24号
- 埼玉県立歴史資料館
- 渡辺一 2002 「古代の丘陵開発とその世界ー『続風土記』の世界ー」『あらかわ』第5号 あらかわ考古講話会